塩竈市文化財調査報告書第８集

桂　島　貝　塚

2010年（平成22年）３月

塩竈市教育委員会

序　　文

「桂島貝塚」は、昭和38年に当時の塩竈市立浦戸第二小学校の新校舎の建設に伴い、遺跡の確認を実施するため発掘調査に至ったもので、この地域の縄文時代の人々の生活がわかる遺跡であり、昭和44年に塩竈市文化財（史跡）に指定されました。

この発掘調査においては、縄文前期から中期の土器が多く出土され、浦戸諸島地域の先人の豊かな生活と文化を育んだ痕跡が残る大変貴重な遺跡であることが確認されました。

本書は、「桂島貝塚」を長年にわたり調査・研究してきた後藤勝彦氏に、平成18年から未整理であった遺物・資料の整理を依頼し、調査報告書としてまとめていただいたもので、貝塚に関しての本市で初めての報告集として今回発刊に至ったものです。

後藤氏の長年のご努力と地道な研究に対して深い敬意と感謝の意を表するとともに、これからも本市の文化財保護に対してご指導、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

また、本書が広く市民のみなさまや各地の研究者の方々に貴重な地域の歴史資料として活用頂ければ幸いです。

今後とも、本市の文化財の保護と、その貴重な文化財を生かしたまちづくりを一層進めてまいりたいと考えておりますので、関係各位の深いご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

最後になりましたが、発掘調査にご協力いただいた関係者のみなさまに深く感謝の意を表し、発刊のことばに代えさせていただきます。

平成22年３月

塩竈市教育委員会
教育長　小　倉　和　憲

目　　次

［Ⅰ］まえがき …… 1

［Ⅱ］調査に至る経過 …… 1

［Ⅲ］貝塚の位置（第１図） …… 1

［Ⅳ］調査の経過（第２図） …… 2

［Ⅴ］貝層の堆積（第３図） …… 5

［Ⅵ］出土遺物について …… 5

(1)　前期縄文土器（繊維土器） …… 5

(2)　中期縄文土器 …… 13

(3)　石製品 …… 47

(4)　骨角製品 …… 48

(5)　貝製品 …… 49

(6)　自然遺物について …… 52

［Ⅶ］出土遺構について …… 53

［Ⅷ］出土遺物・遺構の考察 …… 55

(1)　前期縄文土器について …… 55

(2)　中期縄文土器について …… 57

(3)　その他の出土遺物について …… 63

［Ⅸ］まとめ …… 65

宮城県塩竈市桂島貝塚発掘調査報告

後　藤　勝　彦

［Ⅰ］まえがき

桂島貝塚は県内貝塚のなかでも有名かつ重要な貝塚で古くから学会に知られている遺跡である(註1)。また先学による研究・調査がなされており(1930 斎藤忠・1953 佐藤達夫・1957 伊東信雄・1960 加藤孝・1963 後藤勝彦)、縄文時代前期・中期大木８ｂ・９～10式の時期であることは明らかになっていた。また、貝塚の位置も湾内に面した北斜面であった。現在塩竈市街には、小松崎に遺跡があったという記述があるが、現在まだ確認されていない。ほとんど浦戸地区に遺跡が分布している。桂島・野々島・船入島の貝塚は時期も古く、研究歴もある貝塚である。桂島貝塚は塩竈市指定史跡の貝塚でもある。

［Ⅱ］調査に至る経過

昭和38年10月12日に浦戸二小の移転新築の報せを受けて、市文化財委員として市教委と連絡をとる。校舎予定区が貝塚にかかるやもしれないという連絡なので、桂島浦戸二小の現場に出向く。私の知っている桂島貝塚の位置が、北斜面の貝塚なので、どのような新築工事なのか不安であった。現場に到着して、所謂桂島貝塚と直接的に関係ないことが明らかになった。しかし、新たに南斜面の校舎新築予定地に薄く貝殻が散布している小貝塚を発見した。しかも、校舎新築場所にあたることを知らされ、工事前に調査すべきことを痛感し帰る。

昭和38年10月14日　市教委社教文化財係に校舎建築予定地を変更出来ないので、事前調査をすべきことを具申する。また、浦戸二小の建築は国起債などの関係で、本年度中に建設しなければならないこと等で、緊急に調査することに決定した。

調査体制	調査主体者	塩竈市教育委員会　塩竈市文化財保護委員会	
	調　査　員	宮城学院女子大学助教授	
		日本考古学協会員	
		宮城県遺跡調査員	加藤　　孝
	同	宮城県塩釜女子高等学校教諭	
		日本考古学協会員	
		塩竈市文化財保護委員会委員	
		宮城県遺跡調査員	後藤　勝彦
	同	塩竈市立第二中学校教諭	今泉　武男
	同	塩竈市立第三小学校教諭	佐藤　達夫
	同	七ヶ浜町立亦楽小学校教諭	槙　　要照

10月18日　東北大学教育学部平研究室に連絡、調査用具・労働力の応援を要請し了解を得る。

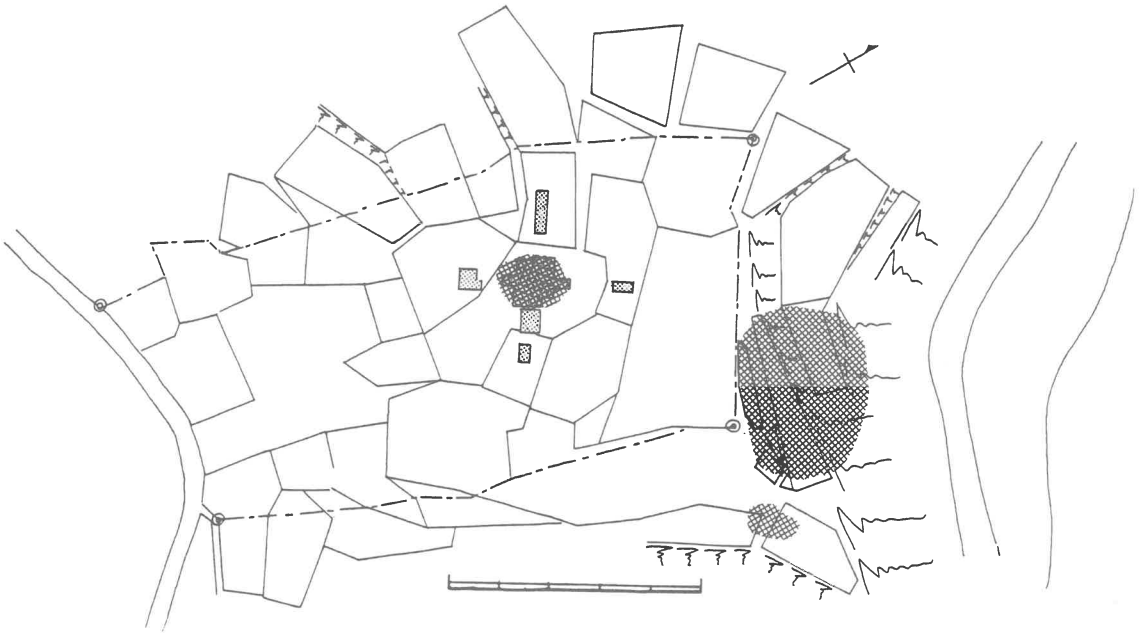
調査期間　昭和38年10月19・20日～10月26・27日　４日間

第２次調査　11月18～20日　３日間

［Ⅲ］貝塚の位置（第１図）

桂島は代ケ崎、馬放島、野々島、寒風沢島等と一連に松島湾口を東西に結び松島湾の防波堤の役割をなしている、東西に細長い島である。この島は桂島、石浜の両部落に分かれ、この部落のほぼ中間に浦戸第二小学校が存在し、桂島貝塚は小学校の北側に通ずる道路の北斜面の台地にあり、有名な桂島貝塚

の地点は、この台地に尾根からの急な北西斜面に存在する。調査した貝塚は、この尾根より南東への緩やかな斜面にある、新発見の地点である。古くから知られている地点を含めると環状貝塚を構成する。貝塚の中心部は台囲47番地にあたる。



第１図　調査地点

[Ⅳ] 調査の経過（第２図）

10月19日(土)　　９時の定期船で出発、浦戸二小を調査本部とし11時調査開始。貝塚の中心部とおぼしい貝殻散布の濃い部分に、台地尾根にほぼ直角にＡトレンチ２×８ｍの調査区を設定し、南よりＡＩ～ＡⅣとし表土を剥離する。表土は少量の土器を含んでいるが浅く、ＡＩで25cmで貝層に到着する。ＡⅣでは貝層はなく黒色土層で自然と茶褐色土層に変化して行く。貝層は地形にそって緩やかであり、厚さも南へ次第に厚くＡＩで約40cmを超える。遺物はＡＩ～Ⅲ区の貝層中より、黒色土層上まで完全土器、一括土器が伏せられた状態、横倒しの状態で多数出土する。時期は縄文中期大木８ｂ式に併行するものである。貝層は巻き貝のスガイ・クボカイを主体として、二枚貝のアサリ・シオフキ・ハマグリ・カキ・マテガイ等で構成する。初日にして完全土器２ケ、完形土器５ケ、一括土器18袋、その他不明石器、石匙、石斧が出土した。

10月20日(日)　　前日の残りのＡＩ～Ⅱ区の貝層剥離。完全・一括土器の出土は昨日と同じ状態で、足の踏み場がないほどだ。特に、ＡＩに集中している。黒色土層から下に繊維を大量に含んだ前期初頭の土器が出土することが判明した。

午後になってＡＩ～Ⅳ区の調査が完了したので、Ａトレンチを南に３区延長Ａ０・ＡＩ′・ＡⅡ′と名付け調査を進める。延長トレンチは表土がやや深く、貝層の堆積も厚くなり混土が多くなる。ＡⅡ′では、破砕貝層があり、堆積も50cmを超える。一括遺物の出土が少ない。

遺跡の範囲調査のためＡトレンチを北へ延長、尾根の平坦な畑地に２区設定（Ｒトレ）とした。表土から土器が出土しているが、約15cmで凝灰岩の基盤に達し、貝層はない。

10月26～27日の両日雨のために調査中止。

11月２日(金)　　新たにＡＩ～Ⅱに並列して東に拡張し、ＢＩ～Ⅱとする。Ｂトレンチは一般に貝層

は薄く、ＢⅡでは貝塚の東端のような状態である。遺物の出土状況はＡＩ～Ⅱと同じような一括土器が多く、小形の完全な深鉢土器を掘りあげる。特記すべきは、浅鉢の注口土器と犬骨の出土がある。

11月３日(土)　　Ｂトレンチの作業と、ＡトレンチのＡ０の調査を続ける。一括土器が多い。Ａトレンチが貝塚の中心部に当たるようである。およそ、Ａ・Ｂトレンチの調査を終了する。

11月４日(日)　　調査の整理とＡトレンチの壁面及び平板実測図の作成及び遺物の積出し終了して、緊急な第１次調査を終了する。

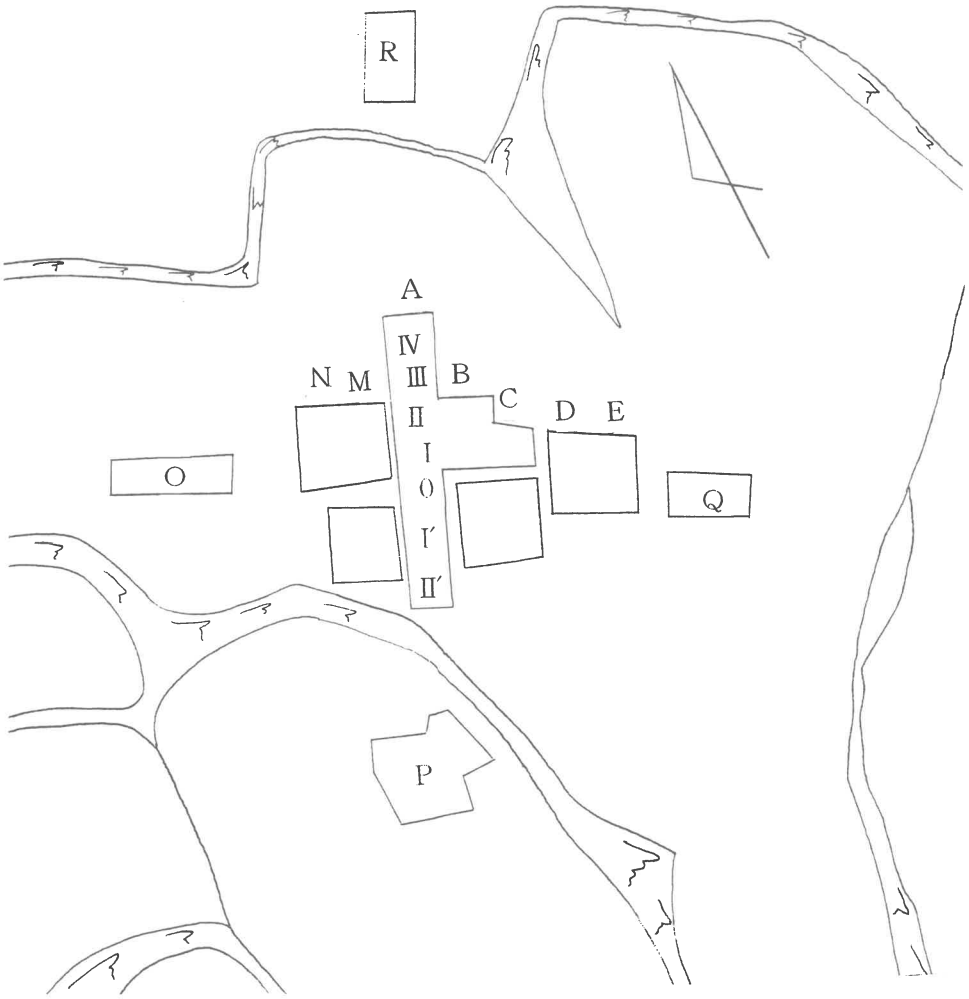
11月７日(水)　　塩竈神社において市文化財保護委員会が開催され、第１次調査の概要と成果について報告、同時に第１次調査の調査費33,500円の支出が決定される。また、第２次調査を文化財保護委員会から委嘱される。費用は別途助役が考える。調査は11月13～15日か18～20日のどちらかとする。

第２次調査

11月８日(木)　　社会教育課長深沢氏と調査について公民館で打ち合せ。日程・労働力の件。

11月18日(土)　　第１次調査での遺物の出土状況から、住居跡の検出が考えられるので、２ｍ幅のトレンチ調査から、４×４ｍの単位の調査に変更し、班編成により遺物の収納及び記録も各班の責任とした。槙調査員は今回不参加である。また、市内小・中学校から研修を兼て、職員の参加がなされた。

佐藤班　　分担がＣ・Ｄトレンチ（Ｃ０・ＣＩ′Ｄ０・ＤＩ′）であったが、第１次調査後、浦戸二



第２図　調査区

小の調査がＣＩで実施された。また、東に貝層が薄くなるので、予定を変更してＡトレンチに近接した、Ｂ・Ｃトレンチ（Ｂ０・ＢＩ′ Ｃ０・ＣＩ′）を設定して作業にかかる。

今泉班　　この班もＣ・Ｄトレンチ（ＣＩ・ＣⅡ、ＤＩ・ＤⅡ）予定であったが、佐藤班の変更により、急遽、Ａトレンチの西側にＭ・Ｎトレンチ（ＭＩ・ＭⅡ、ＮＩ・ＮⅡ）を設置する。ＭＩ・ＭⅡで完全土器、完形土器が早速検出される。貝層は西にＮ区の中頃までのようであり、貝塚の東西の規模が明らかになった。

後藤班　　Ｄ・Ｅトレンチ（ＤＩ・ＤⅡ、ＥＩ・ＥⅡ）を変更して、Ｄ０・ＤＩ、Ｅ０・ＥＩを設定する。Ｄ０・ＤＩで貝層がなく包含地なので調査を中止した。新たにＭ・Ｎトレンチ（Ｍ０・ＭＩ′、Ｎ０・ＮＩ′）を新設して調査をする。Ａ０・ＡＩ′ ＡⅡ′での知見の通り堆積が深く、ＭＩ・ＮＩとは状況が違って混土貝層が厚く、遺物の出土も少ない。混土貝層下部で遺物が出土するが完形品が少ない。

11月19日(日)　　今日は各班共に継続作業で各トレンチの貝層剥離である。特に、ＭＩ・ＭⅡ・ＮＩ・ＮⅡの遺物出土状況の観察を実施する。参加人数が多かったので、遺跡の規模を調査するために、Ｏ・Ｐ・Ｑの各トレンチを東・西・南に新設し調査する。

佐藤班　　遺物はＡトレンチ側によって多く出土する。Ｃ０は貝塚の東端のようだ、貝層が薄い。ＢＩ′に貝層が傾斜しており貝層が深くなる。今日は主にＢＩ′ ＣＩ′の貝層剥離。

今泉班　　昨日と同じ貝層剥離だが、出土遺物が密集して出土しており作業は思うようにはかどらない。午後に第１回の遺物を取り上げる。その下に新しい一括遺物を検出する。

後藤班　　貝層は掘り上げ、その下部の黒色土層に密着した一括土器が多数出土した。貝の堆積にスガイの下にアサリがブロック状に堆積が見られることである。当時の人の１回に捨てる量を示すものと考えた。

Ｏトレンチ　　Ｎトレンチの西方の畑地に、ほぼ東西２×８ｍの４区を設定した。貝の堆積はない。遺物が散見する程度である。しかし、トレンチの西寄りの壁付近に焼土が検出され、炉跡であることが確認された。

Ｑトレンチ　　Ｅトレンチの東に、東西２×４ｍの２区を設定する。Ｏトレンチと同じく貝の堆積はない。石組があったがどんな意味のものか不明。遺物として石皿の残欠がある。

Ｐトレンチ　　Ａトレンチの南への延長上、１段低い畑地に２×４ｍの２区を設定する。石組遺構と共に土器が検出された。炉跡であり西に２区拡張する。土器は土師器であり奈良平安期のもので、表杉入式である。貝塚のものとは別個のものである。

11月20日(月)　　調査最終日なので遺物の取り上げ、各調査区の観察がなされる。

佐藤班　　このトレンチは、Ｃは貝塚の東端を示し、遺物の出土が少なく、遺物も北西部にかたよって出土。ＢＩ′の南東壁よりに犬骨が出土した。

今泉班　　このトレンチは完形土器の出土が多数であり、出土状況から大形土器(器高35cm以上)・中形土器(器高25cm内外)・小形土器(器高18cm内外)の土器組合せセットがあって、これに浅鉢土器が組合せられるようである。特に、ＭＩで傾向が顕著のようである。

特記すべきは、ＭⅡで中形土器の内部に小形土器が内蔵された状態で検出されたことである。また、ＭＩから鹿角を利用した耳飾りが発見された。

後藤班　　貝層の深さは、他のトレンチと違って、貝層下の黒色土層まで約１ｍで深い。ＭＩ′あたりから貝層が傾斜し、地形に沿った状態になり南端に近いことを示し、Ｎ０・ＮＩ′の中間で貝層が切れ西端が判明した。この新貝塚（Ｂ）は予想よりはるかに小さな貝塚であることが判明した。東西10m、

南北12mの範囲である。

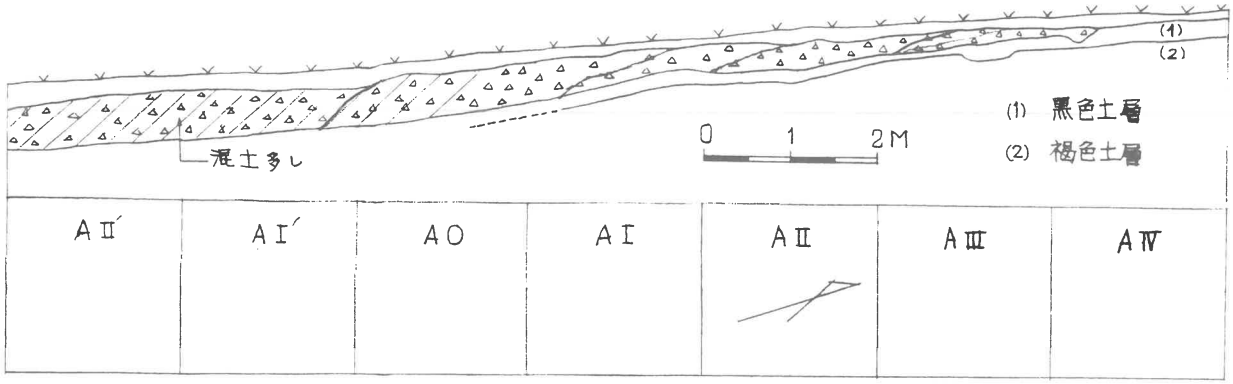
２時に作業を中止し、遺物の整理。３時30分の船で石浜より遺物を積みだす。

11月24日(金)　　Ｏ・Ｐ・Ｑ各トレンチの図の作成。Ｐトレンチの出土遺構は焼土は南側だけであり、炉跡の土器は片面が耕作で削りとられており、炉跡も粘土で固められたものと考えられる。炉跡内部で焼土の下には粘土がはられていた。

周辺の遺跡の観察を実施した。

12月１日(日)　　遺跡の状況観察。工事の状態の調査。

以上で第２次調査が終了する。



第３図

［Ⅴ］貝層の堆積（第３図）

貝層のセクション図は、Ａトレンチの西壁だけである。堆積層は単純で、ＡⅣの南端から貝層の堆積が始まり10cm程であり薄い。上部は耕作土で貝層の下部に黒色土層となり順次褐色土層に移る。貝層はスガイ・クボカイの巻貝中心に、アサリ・ハマグリの二枚貝が混じった状態である。堆積は徐々に厚くなり、Ａ０頃から土が混じり混土層となり厚く78cmにもなる。南はＡⅡ′の段落まで、北から南に堆積する。範囲はＡトレンチを中心に、西はＮから東はＣⅠの中間まで、北はＡⅣの南端からＡⅡ′の南の段落まで凡そ東西10m、南北12mの小範囲である。堆積層は数層観察されるが時期の区分は出来ない。

［Ⅵ］出土遺物について

（１）　前期縄文土器（繊維土器）（第４～９図）

繊維土器は貝層全体から出土している。中期土器の完形品が沢山出土したため惑わされて確認を怠ったためである。堆積層の貝層下部の黒色土層周辺に出土が多い。遺物数も少ない。全体238点に過ぎない。小破片が多い。

口縁部72点（30.25％）、体部162点（68.0％）、底部４点（1.68％）総計248点である。施文文様は羽状縄文179点（75.21％）であり、内結節94点（39.49％）、結束81点（34.03％）である。非結束は僅か４点（1.68％）である。斜行縄文27点（11.34％）、ループ文13点（5.46％）、撚糸文８点（3.36％）、不整撚糸文４点（1.68％）、組紐文４点（1.68％）、綾絡文２点（0.84％）施文したものである。

口縁部はやや外反し、口端がよく整形され、口端が内に傾斜したものが多い。しかも、土面に刻目が施文され、大きめの刺突痕（第４図３・４・９。第８図３・４）、半截竹管文様のもの（第４図７・８）、土

面に縄文施文した（第５図31）ものもある。口縁部内湾した器形が２点（第４図10、第５図30）、内湾気味のもの（第６図９・14、第８図13）もあり、殆ど平縁である。しかし、１点だけ突起端に刻目の突起状の口縁が存在する（第５図29）。また、補修孔を持つもの（第４図10・26、第５図34）もある。

今回の調査で特徴的に検出したのは、口縁部下や体部に太い幅の横線や段落を持つ資料の発見である（第４図16、第６図20、第７図54・55、第８図24）。文様帯の区画と考えられる。同じように、上部にヨコの擦痕、下部に斜行の施文帯（第8図26）、上部に斜行文様帯、ヨコにやや広い区画帯、下部に斜行縄文（第８図25）の資料も区画帯を持つということで同じである。

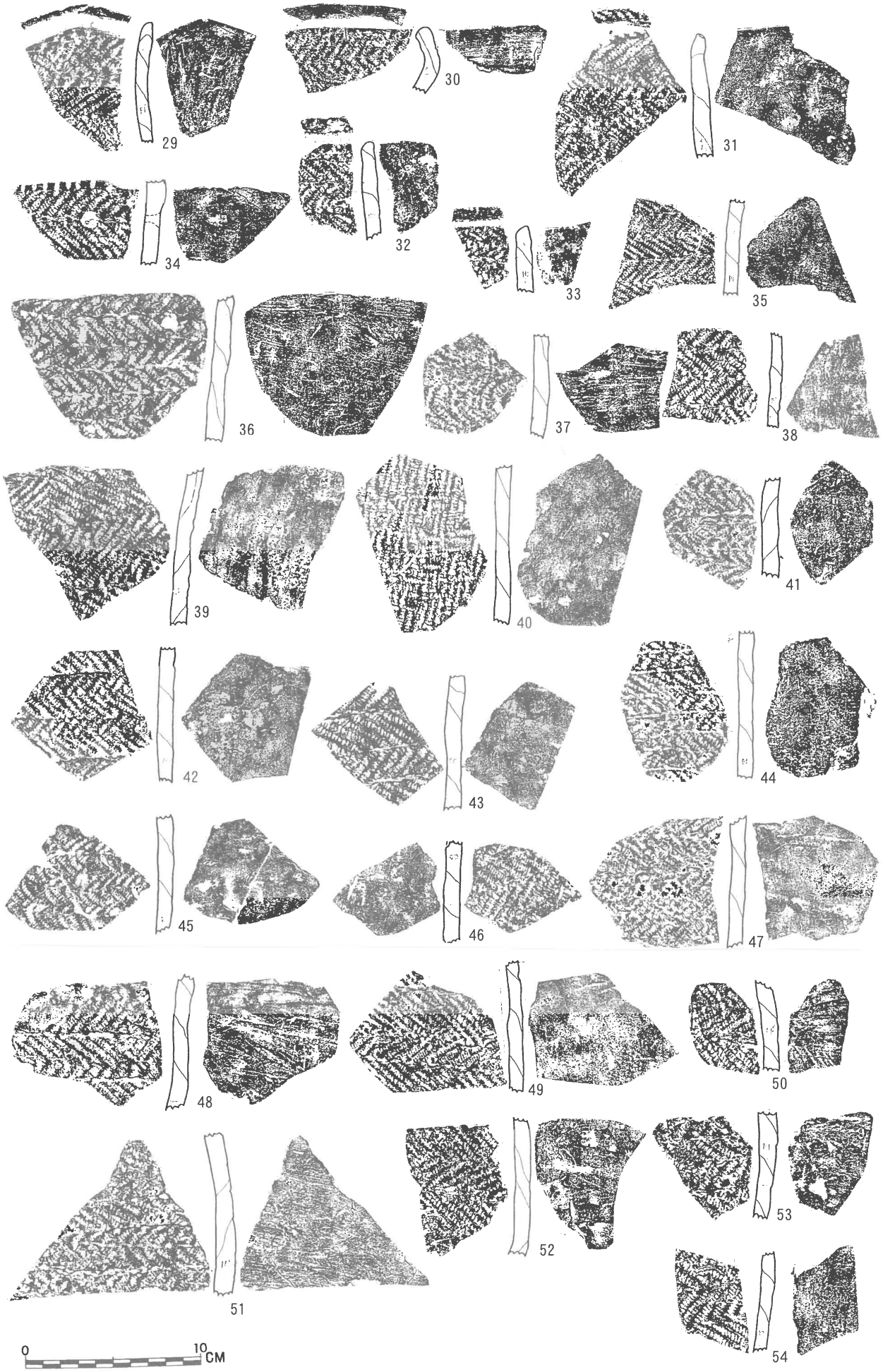
体部は第７図50・51のように湾曲する資料の存在から、徐々にすぼまって底部になる。裏面は文様なく、タテ・ヨコの整形痕跡、繊維痕、凹凸痕程度である。

底部は平底で縄文施文のものである。底部下部に２列の刺突が巡り、底面に刺突痕を持つもの（第９図16）がある。

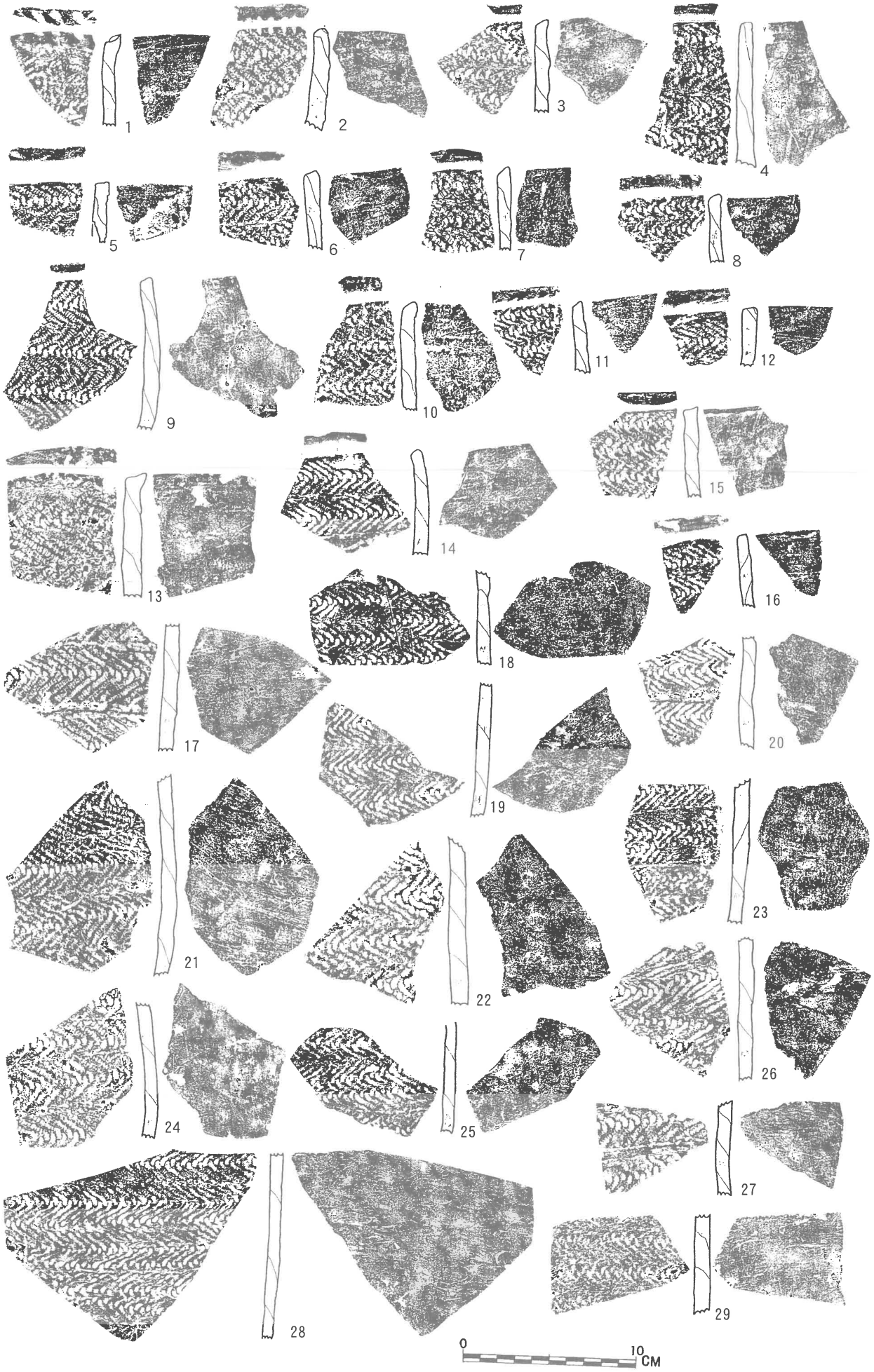
繊維土器の出土地区を見ると、Ａ地区が45点で一番多い。北からＡⅣ８点、ＡⅢ４点、ＡⅡ３点、ＡＩ10点、Ａ０13点、ＡＩ′３点、Ａ区４点である。Ｂ地区はＢⅡ２点、ＢＩ３点、Ｂ０９点、ＢＩ′９点、Ｂ区５点，総計27点である。ＣＩ１点、Ｃ０８点、ＣＩ′６点で計15点である。ＭⅡ15点、ＭＩ６点、Ｍ０２点、Ｍ区８点で計33点である。Ｎ区14点で、ＮⅡ２点、ＮＩ５点、Ｎ０６点、Ｎ区１点である。ＭＮ区にわたる２点も存在する。少なくてもＡＩ－Ａ０，Ｂ０－ＢＩ′、Ｃ０－ＣＩ′、ＭⅡ－ＭＩ、ＮＩ－Ｎ０区に多く集中し出土範囲は狭い。

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
0
10CM

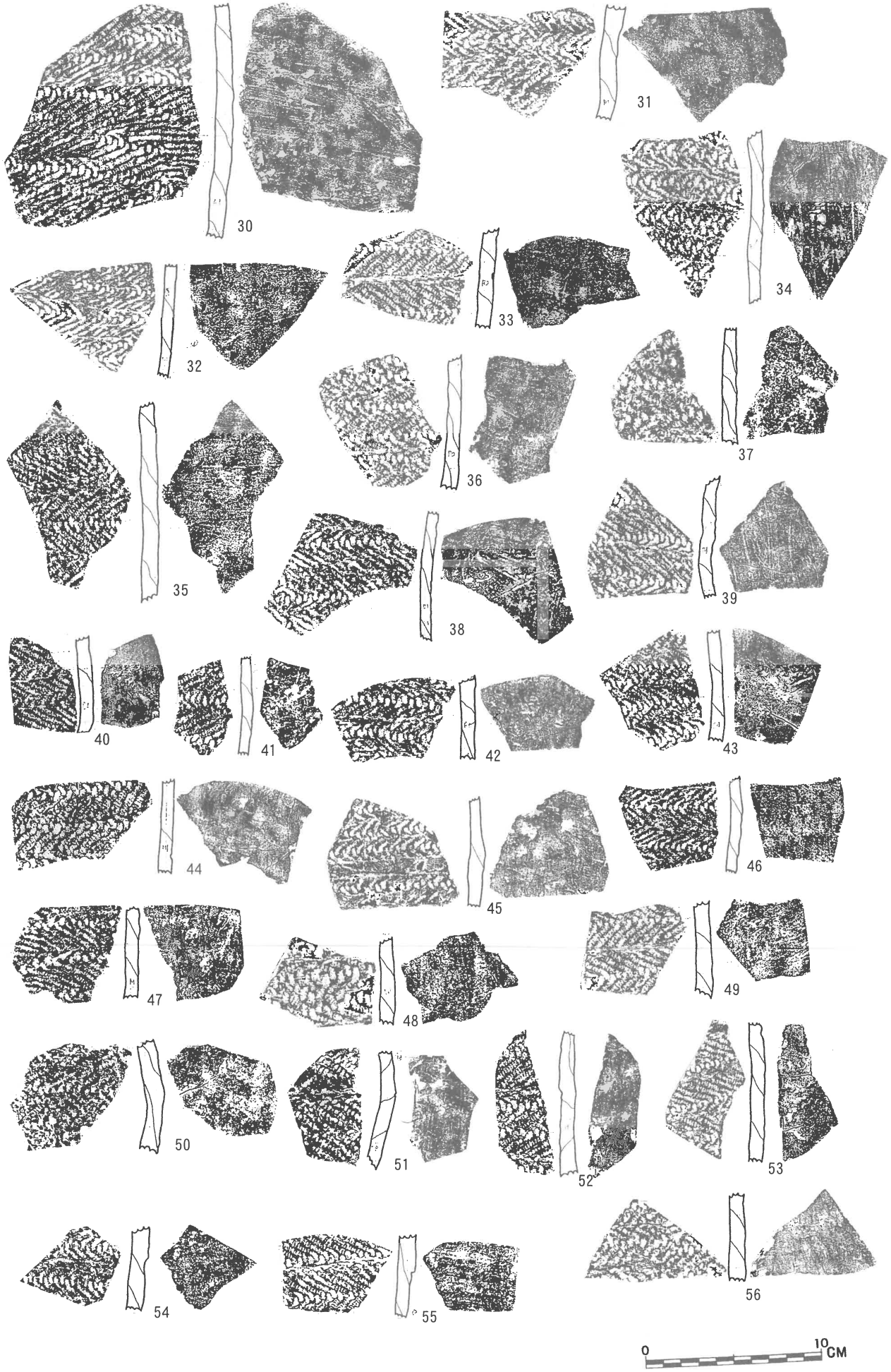
結束羽状　第４図


29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
0
10
CM

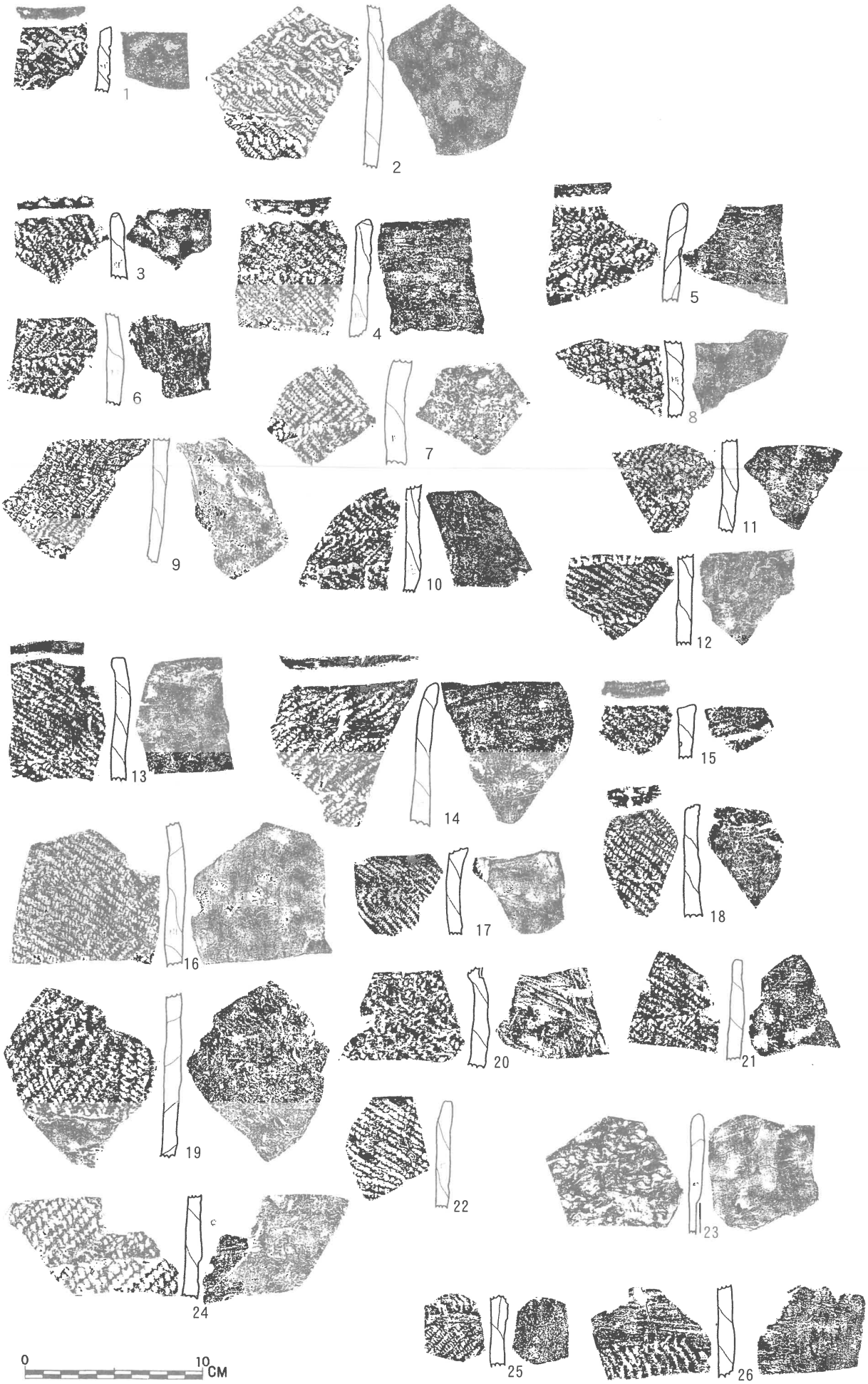
結束羽状　第５図


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
0
10
CM

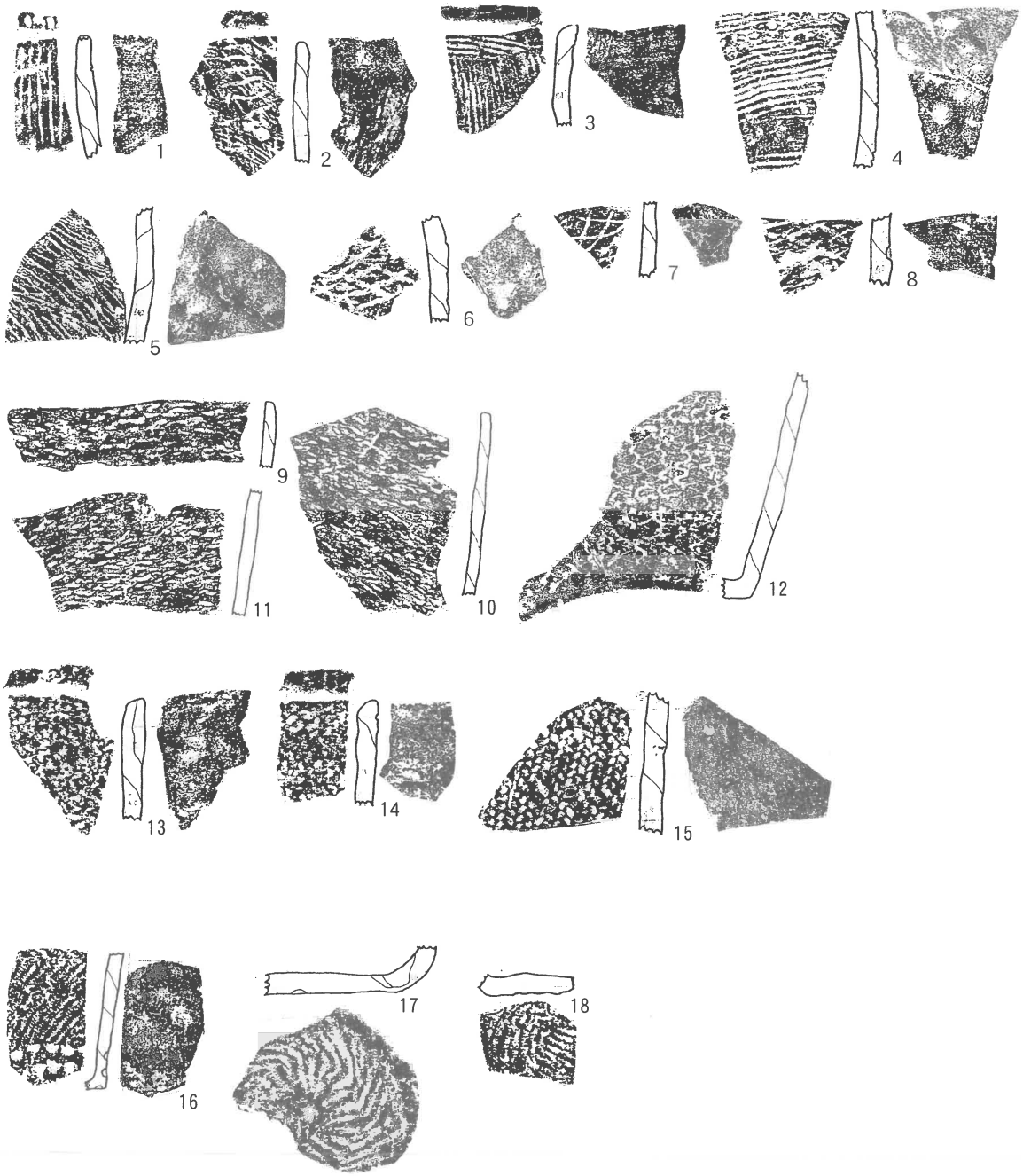
結節羽状　第６図


30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
0
10CM

結節羽状　第７図



綾絡文・ループ文・斜行縄文　第８図



0 10CM

撚糸文・不整撚糸文・組紐文・底部　第９図

（２） 中期縄文土器（第10～35図）

資料の大部分は中期縄文土器に属する。破片が多いが、特に、完形品も多い。各グリット毎に説明することにする。

Ａ区（Ⅳ～Ⅰ・０～Ⅱ′）

Ａ区はＡⅠ区中心に多数の遺物が出土した。ＡⅣは堆積層が薄く、Ａ′区は混土層となり堆積層も深く遺物の出土が少ない。出土遺物を実測図・拓本図で示した。

Ａトレンチの西壁のセクションによると、堆積層が観察されるが層位の変化は明らかにされていない。調査中は貝層から全体を同じ層位と認識している。

器形分類　実測図及び拓本図によって観察すると、深鉢42、鉢・浅鉢８、類型不明６である。第１表に示した通り、遺物はＡⅠ・０区に集中し、Ａ類型（キャリパー）が過半数の59％を占める。口縁部に

第１表　地区別器形分類表

A区	A類型実	拓本図	B類型実	拓本図	C類型実	拓本図	D類型実	鉢・浅鉢 実	拓本図	類型不明	実測計	拓本図計	合計　%
AⅢ	・	・	1	・	・	・	・	・	・		1	・	1 (1.78)
AⅡ	・	・	1	1	・	・	・	1	・		2	1	3 (5.35)
AⅠ	6	8	3	・	3	4	・	3	1	3	18	13	31 (55.35)
AO	1	5	・	・	3	・	・	1	1	1	6	6	12 (21.42)
AⅠ′	・	・	・	・	・	1	・	・	1	・	・	2	2 (3.57)
A	3	・	1	・	1		・	・	・	2	7	・	7 (12.5)
合計（　）％	10	13	6	1	7	5	・	5	3	6	34	22	56 (99・97)
	23(41.07)		7(12.5)		12(21.42)		・	8 (14.28)		6(10.71)		56(99.98)	

B区	A類型実	拓本図	B類型実	拓本図	C類型実	拓本図	D類型	鉢・浅鉢 実	拓本図	類型不明	実測計	拓本計	合計　%
BⅡ	1	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	1 (3.33)
BⅠ	4	3	2	1	・	・	・	1	1	・	7	5	12 (40.00)
BO	2	5	2	2	・	2	・	2	1	1	7	10	17 (56.66)
合計（　）％	7	8	4	3	・	2	・	3	2	1	15	15	30 (99.99)
	15(50.00)		7(23.33)		2(6.66)			5 (16.66)		1	30(99.98)		

C区	A類型実	拓本図	B類型実	拓本図	C類型実	拓本図	D類型	鉢・浅鉢 実	拓本図	類型不明	実測計	拓本計	合計 %
CⅡ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・	・
CⅠ	・	・	・	・	・	・	・	・	・	1	1	・	1 (7.69)
CO	3	2	1	・	・	・	・	1	・	・	5	2	7 (53.84)
CⅠ′	1	3	・	・	・	1	・	・	・	・	1	4	5 (38.46)
合計 ( )%	4	5	1	・	・	1	・	1	・	1	7	6	13 (99.99)
	9 (69.23)		1 (7.69)		1			1		1	13 (99.99)		

M区	A類型実	拓本図	B類型実	拓本図	C類型実	拓本図	D類型	鉢・浅鉢 実	拓本図	類型不明	実測計	拓本計	合計 %
MⅡ	3	3	3	1	4	2	・	・	1	2	12	7	19 (22.89)
MⅠ	1	1	2	・	8	3	・	1	5	2	14	9	23 (27.71)
MO	1	9	・	・	2	6	1	1	7	1	5	23	28 (33.73)
MⅠ′	2	・	・	1	3	1	1	2	・	1	8	3	11 (13.25)
M	・	1	・	・	・	1	・	・	・	・	・	2	2 (2.40)
合計 ( )%	7	14	5	2	17	13	2	4	13	6	39	44	83 (99.98)
	21 (25.30)		7 (8.43)		30 (36.14)		2	17 (20.48)		6 (7.22)	83 (99.97)		

N区	A類型実	拓本図	B類型実	拓本図	C類型実	拓本図	D類型実	鉢・浅鉢 実	拓本図	類型不明	実測計	拓本図計	合計 %
NⅡ	・	2	・	・	1	・	・	・	1	・	1	3	4 (8.0)
NⅠ	2	3	2	1	11	2	・	3	・	5	23	6	29 (58.0)
NO	・	3	・	2	1	5	・	・	・	・	1	10	11 (22.0)
NⅠ′	・	・	・	・	・	・	・	・	1	・	・	1	1 (2.0)
N	・	1	・	・	・	2	・	・	・	・	・	3	3 (6.0)
MN	・	1	・	・	・	1	・	。	・	・	・	2	2 (4.0)
合計 ( )%	2	10	2	3	13	10	・	3	2	5	25	25	50 (100.0)
	12 (24.0)		5 (10.0)		23 (46.0)			5 (10.0)		5	50 (100.0)		

	A類型実	拓本図	B類型実	拓本図	C類型実	拓本図	D類型実	鉢・浅鉢 実	拓本図	類型不明	実測計	拓本図計	合計 %
区不明	2	2	4	1	3	9	1	4	5	2	16	17	33
	4 (12.12)		5(15.15)		12(36.36)		1	9 (27.27)		2	33(99.99)		
							(3.03)			(6.06)			

					C類型実	拓本図	D類型			類型不明	実測計	拓本図計	合計 %
P区					・	5	2			3	・	10	10
					5 (50.0)		2 (20.0)			3 (30.0)	10 (100)		

	A類型実	拓本図	B類型実	拓本図	C類型実	拓本図	D類型	E類型	鉢・浅鉢 実	拓本図	類型不明	実測計	拓本図計	合計 %
A区	10	13	6	1	7	5	・	・	5	3	6	34	22	56 (20.74)
B区	7	3	4	3	・	2	・	・	3	2	1	15	15	30 (9.25)
C区	4	5	1	・	・	1	・	・	1	・	1	7	6	13 (4.81)
M区	7	14	5	2	17	13	2	・	4	13	6	39	44	83 (30.74)
N区	2	10	2	3	13	10	・	・	3	2	5	25	25	50 (18.51)
P区	・	・	・	・	・	5	2	・	・	・	3	・	10	10 (3.70)
区不明	2	2	4	1	3	9	1	・	4	5	2	16	17	33 (12.22)
合計 ( )%	32	47	22	10	40	45	5		20	25	24	136	134	270(99.72)
	79(29.2)		32(11.8)		85(31.4)		5(1.85)		45(16.6)		24 (8.88)	(50.3)	(49.62)	

突起を持つものあり。Ｂ類型７点(口縁部外反し端部肥厚し小渦巻文)・Ｃ類型(口縁部外傾・外反無文)が12点であり、Ｅ類型（口縁部に立体的な把手装飾を持つ）を最初考えたが最終的にない。(2003 水沢教子の器形分類を参照した。第16回縄文セミナー 中期後半の再検討－記録集－)

Ｂ区はＢⅡ・ＢＩ・Ｂ０・ＢＩ′とＡ区東側に設定した。ＢⅡは貝塚の北側縁あたり、貝層薄く、遺物も少ない。Ｂ区としても遺物の量が少ない。ＢＩ・Ｂ０に集中する。Ａ区と同じように、深鉢24点、Ａ類型に突起持つもの２点、浅鉢５点で鉢形の注口土器が注目の存在である。

Ｃ区もＣⅡ・ＣＩ・Ｃ０・ＣＩ′としてＢ区の更に西側に設定した。ＣⅡは貝層薄く北・東側のはずれになり、遺物の出土さらに少ない。器形も深鉢が主体であり、各区と同様である。

Ｍ区（ＭⅡ・ＭＩ・Ｍ０・ＭＩ′）Ａ区の遺物が集中したＡⅡ・ＡＩ・Ａ０の西側に設定した。予想通り完形土器の出土が多かった。深鉢58点、鉢、浅鉢17点、類型不明７点である。深鉢もＣ類型が多く、

Ａ類型を凌駕するほどである。Ａ類型の口縁部に突起を持つもの１点存在する。

Ｎ区（ＮⅡ・ＮＩ・Ｎ０・ＮＩ′）Ｍ区のさらに西側に設定したトレンチで、西側は貝層が切れ、貝塚の西端である。遺物はＮＩに集中し、深鉢40点、浅鉢５点、類型不明５点である。深鉢中Ｃ類型が23点と過半を占める。Ｃ類型の注口土器が１点存在する。

Ａ～Ｎ区で区不明　深鉢22点、浅鉢９点、類型不明２点である。特に、深鉢のＤ類型(樽形のもの)１点がある。

Ｐ区は貝塚の南、一段落下がった位置で貝の堆積は無い。実測図を作る遺物なし、拓本図で示した。深鉢７点、しかもＣ類型５点、Ｄ類型２点の出土がある。

全体では深鉢形が199点(73.70％)で、うちＡ類型79点(28.2％)、Ｂ類型32点(18.85％)、Ｃ類型87点(31.4％)、Ｄ類型５点(1.85％)である。鉢・浅鉢形45点全体の(16.6％)で、内湾する器形と外傾の２種が存在する。類型不明24点(8.58％)となる。深鉢形はＡ類型を主体とするが、口縁外反するＣ類型の割合が多いことに注目したい。

文様表出と文様構成

Ａ類型　器形は全体としてＡ類型口縁部内湾(キャリパー形)が多い。したがって、口縁部文様帯・頸部文様帯・胴部文様帯に区分される。

Ａ類型の口縁部文様

Ａ類型の器形は　(1)　口縁部が強く内湾するもの　Ⓐ1
(2)　口縁部が緩やかに内湾するもの　Ⓐ2
(3)　口縁部内湾するが地文のもの　Ⓐ3　に分類される。

Ⓐ1は　①小単位の非連結横位渦巻文、棘状の施文。地文。(第16図 1、第32図 1)
②破片等で不明であるが連結渦巻文にヨコ・タテの棘状の施文。地文。(第11図 6・7、第18図 1)
③ヨコ連結渦巻文と口縁部に装飾突起を１個、地文のもの。(第16図 2・4、第35図 33)
④上下の突起状渦巻文と下端の渦巻文と連結し、連結渦巻文間に不整区画文、突起を持つもの、地文のもの。(第10図 2・3・5、第16図 7、第20図 1、第21図 12)
⑤ヨコ連結渦巻文と方形、長方形、円形、三角形の区画を持つもの、地文。(第10図 4、第11図 8、第16図 6、第27図 1)
⑥連結渦巻文に口縁部に装飾突起４個を持つもの。(第11図 10)
⑦ヨコＳ字連結渦巻文と三角形、方形等の区画、地文を持つもの。(第20図 1)

Ⓐ2は　① 隆線の波状文、不定形の区画を持つもの、地文。(第18図 4)
②ヨコ連結渦巻文に区画、刺突文、小突起、凹部、地文の施文のもの。(第11図 9、第18図 2、第21図 11・13・14)
③非連結の円文に鋸歯状の沈線施文のもの。(第16図 5)
④口縁部にヨコ連結の渦巻文だけで、頸部・胴部の区画なく一文様構成のもの。(第27図 2、第30図 17)

Ⓐ3は　①口縁部緩やかに内湾し頸部緩やかに締まる器形、地文のみのもの。(第20図 2、第26図 49)

Ａ類型の頸部文様

頸部文様は無文ヨコ調整のものがほとんどである。

①頸部下に２～３本沈線で区画される。

②頸部下に区画線ない例である。(第16図 5、第32図 1・3)

Ａ類型の胴部文様

①頚部下区画線下に小単位の連結渦巻文の下垂、沈線端部に棘状施文。(第10図 1)

②頚部下区画線下に、大単位の連結渦巻文、沈線端部に棘状施文。(第10図 2、第11図10、第16図 3、第18図 1、第21図 10、第27図 1)

③頚部下区画線下に連結曲流渦巻文。(第10図 4、第18図 2・4、第20図 1、第21図 11・13)

④頚部下区画線下に規格渦巻文が下垂、棘状の施文。(第10図 3)

⑤頚部下に区画無く、地文や無文のもの。(第16図 5、第32図 1・3)

A類型は主たる文様帯は三であるが、僅かに口縁部文様帯と胴部文様帯のみのものが存在する。

B類型　基本的には三文様帯である。ただし、頚部に区画無いものがあり、二文様帯となる。

B類型の口縁部文様

①口縁部外傾し肥厚し、太い沈線連結のヨコ位渦巻文突起となる。(第12図11・12・13・14・16、第17図9・10・11・12、第18図 5、第22図 23・24、第27図 5・6、第32図 5・6・7・8)

B類型の頚部文様

①口縁部下無文で２～３本の沈線・刺突文列に区画されるもの。(第12図 14・16、第17図9、第18図 5、第27図 5、第32図 6)

②口縁部下無文ヨコ調整のみ、区画なし。(第12図 11、第17図 10・11・12、第20図 7、第22図23、第32図 5・7・8)

③口縁部下地文の沈線文で区画なし。(第27図 6)

B類型の胴部文様

①大単位の連結規格文、端部に棘状施文。(第12図 14)

②連結曲流渦巻文のもの。(第12図 16、第17図 9、第22図 24)

③小単位の渦巻文、端部に棘状施文。(第18図 5、第27図 5、第32図 6)

④地文のみのもの。(第20図 7、第22図 23、第27図 6、第32図 5・7・8)

C類型　基本的には三文様帯であるが、口縁部、頚部、胴部の区分無いものがあり、二文様帯や一文様帯も存在する。

C類型の口縁部文様

①ほとんど口縁部無文、平縁・波状・突起状での区分。(第12図 17・18・19、第13図 22、第22図 15・16・19・21、第23図 26・28・29・30、第24図 31・32、第27図 7、第28図 12・13・14・15、第29図 17・18・19、第33図 11)

②口縁部に縄文施文のもの。(第22図 17、第23図 27)

③口縁部に沈線・刺突痕の装飾のあるもの。(第22図 17、第27図 8)

C類型の頚部文様

①頚部に沈線による区画のあるもの。(第12図 17・18・19、第13図 22、第22図 15・16・17・21、第23図26・27・28、第24図 31・32、第27図 7・8、第28図 12・13・14・15、第29図 17・19、第33図 9)

②頚部に区画のないもの。(第12図 20・21、第20図 8・9、第22図 18・19・20、第23図 29・30、第27図 9・10、第29図 18、第33図 10・11)

C類型の胴部文様

①沈線下連結曲流渦巻文、不規則区画、∩字状文区画のもの。(第12図 17・18・19、第22図 15・16・17・21、第27図 7・8、第28図 12・13・14・15、第29図 17・19)

②沈線下に３本の沈線の規格文が下垂するもの。(第13図 22)

③沈線下に小単位の連結規格文、棘状の施文。(第24図 31・32、第33図 9)

④地文だけのもの。(第13図 24、第19図 18、第22図 19、第23図 30、第29図 18、第30図 22、第33図 11)

⑤無文で擦痕程度のもの。(第12図 20・21、第20図 8・9、第22図 18・20、第27図 9・10、第33図 10)

⑥口縁、頚部、胴部の区分なく円形・∩字状区画の一文様構成のもの。(第23図 29、第30図 19・26、第34図上段 3・4、下段 6) 同上、３本沈線、波状文の下垂の一文様構成のもの。(第19図 7) 同上、口縁から連結曲流渦巻文、不規則区画の一文様構成。(第26図 40・46、第28図 11・16、第30図 6・7・16・17、第33図 12、第34図 8・10・13)

Ｃ類型の無文・地文の小形深鉢形には、口縁部直立したコップ形の土器がある。(第13図 24、第20図 9、第27図 10、第31図 38)

Ｄ類型（樽型） Ｄ類型は口縁部内湾、口縁部大形な渦巻きが下垂し、円形・∩形の区画を持つ、一文様構成のもの。(第26図 31、48、第34図上段P区 1・2、下段区不明 7)

鉢型・浅鉢型 (1) 口縁部内湾するもの（浅１）

(2) 口縁部外傾し、肥厚するもの（浅２）

(3) 口縁部単純で、椀型のもの（浅３）に細分される。

鉢・浅鉢１ 口縁部文様

①連結渦巻文・凹部を配し、長方形区画に矢羽根状の沈線を施文。(第13図 27、第24図 36)

②文様帯の区分なく、口唇部に１条の沈線巡るもの。(第13図 25・26)

③小単位の連結渦巻文を配し、ヨコ棘状の施文。注口部あり。(第17図 14)

④口縁部に渦巻・円形の凹部配し、この間隅丸長方形の区画。(第24図 34、第33図 15)

⑤口縁部狭く、連結渦巻文を配し、隅丸長方形区画に刺突文を施す。(第24図 36)

⑥口縁部に隆帯で円形区画を配し、この間にヨコＳ字の連結渦巻文、上下に三角形・不整形の区画を配したもの、隆帯の断面は三角形状蒲鉾形。(第29図 20・21)

⑦口縁部無文、頚部に太い隆帯を一条巡る。(第29図 22)

胴部文様

①大部分は無文である。

②地文のもの。(第24図 36、第29図 20)

鉢・浅鉢２ 口縁部文様

①口縁に沈線で結ばれた渦巻文・凹部。(第13図 28・29、第17図 13、第18図 6、第33図 16)

②口縁に肥厚なく、外傾、口唇部に装飾のないもの。(第33図 13)

胴部文様 無文、ヨコ調整である。

鉢・浅鉢３

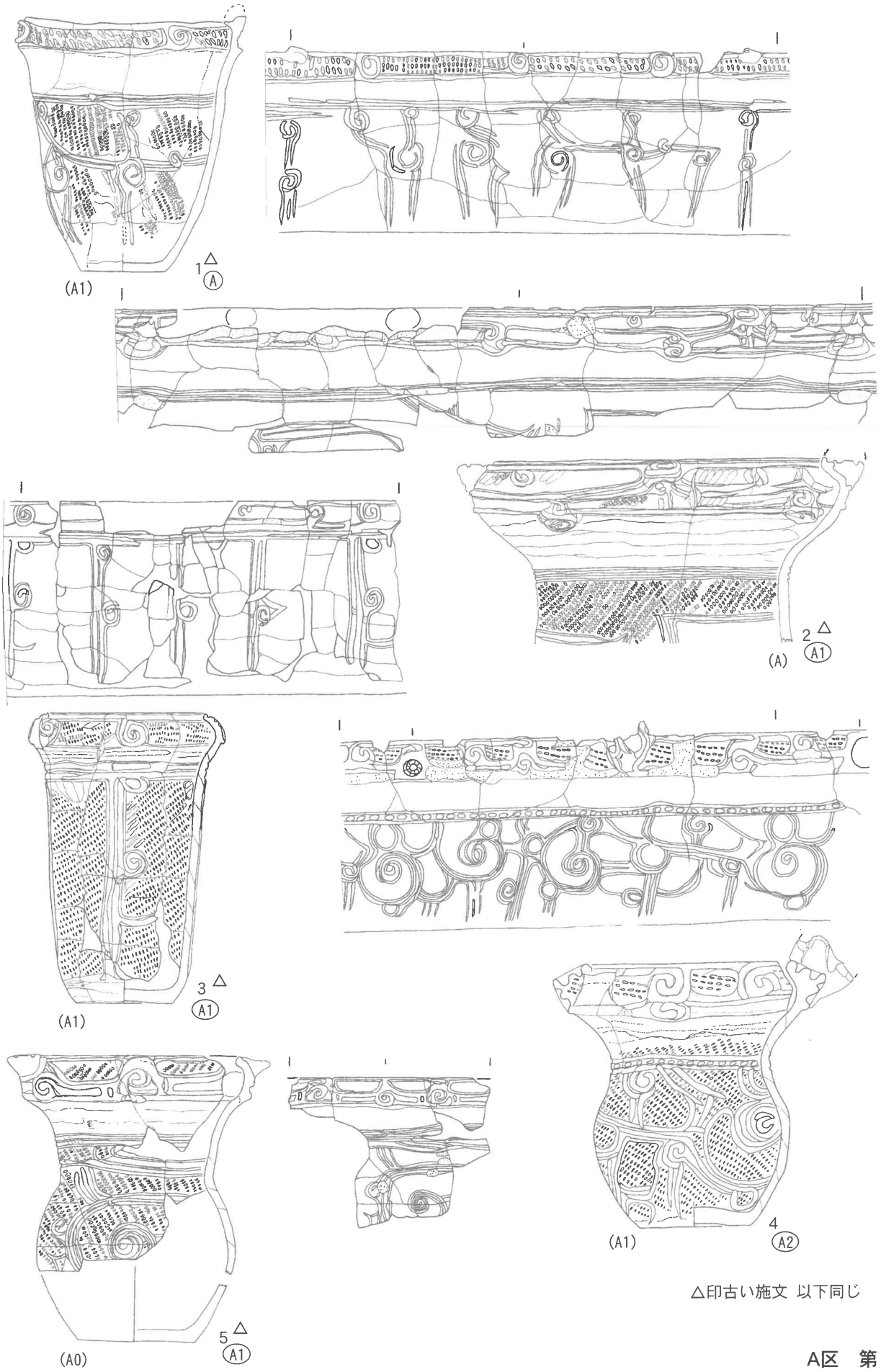
①やや口縁が直立気味で、無文で椀形になる。(第17図 15)

②同上、地文のもの。(第24図 33)

③口縁外傾、単純口縁のもの。(第33図 14)

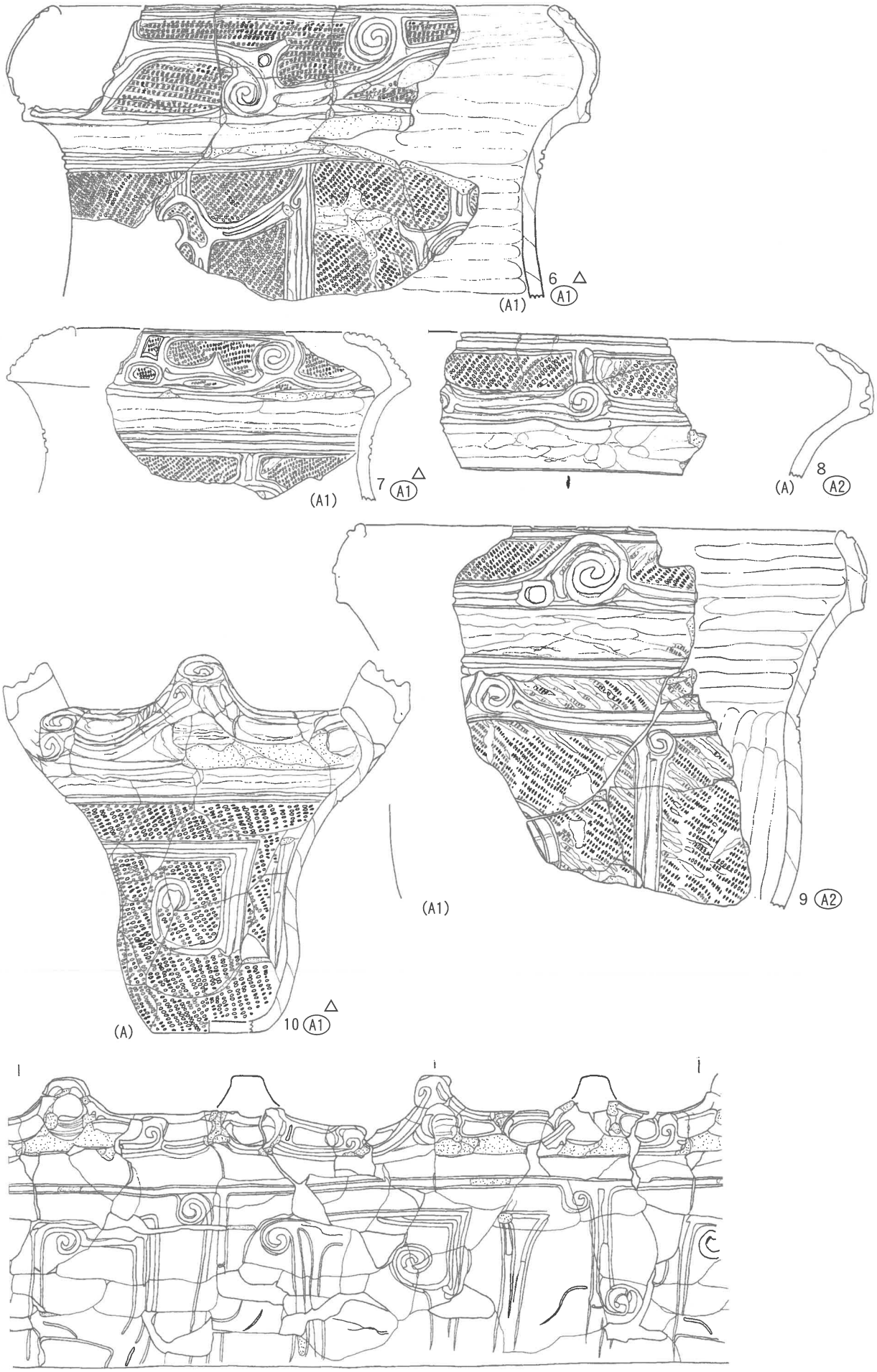
胴部文様 無文、地文である。

器型の深鉢形 Ａ類型、Ｂ類型、Ｃ類型、Ｄ類型、Ｅ類型、鉢・浅鉢形の特徴を説明したが、報告書によっては具体的な説明がないものがあり、どういう概念で使用しているか理解出来ないため、抽象的になり理解に苦しんだ。そのため筆者の独断的判断がある。

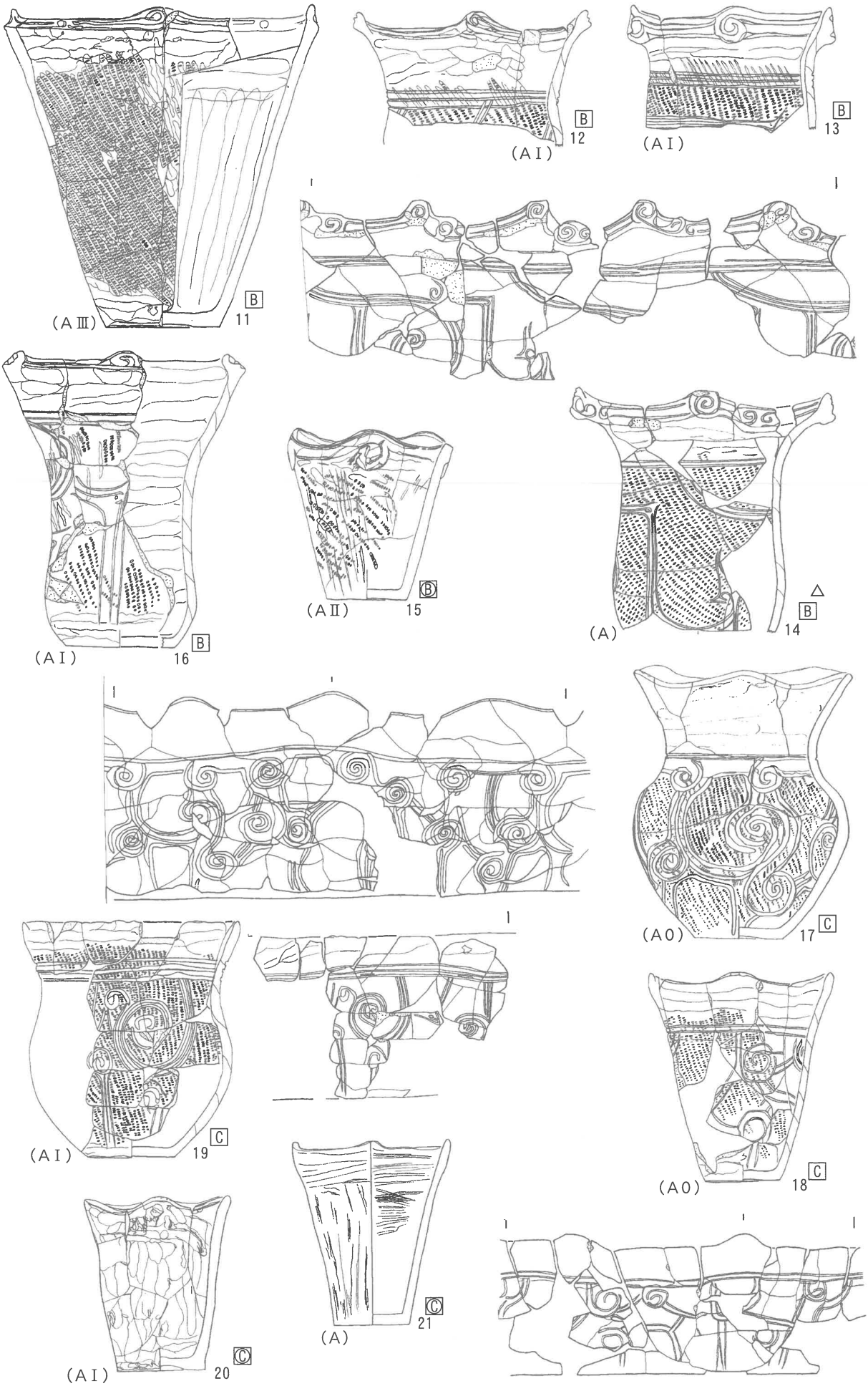


△印古い施文 以下同じ

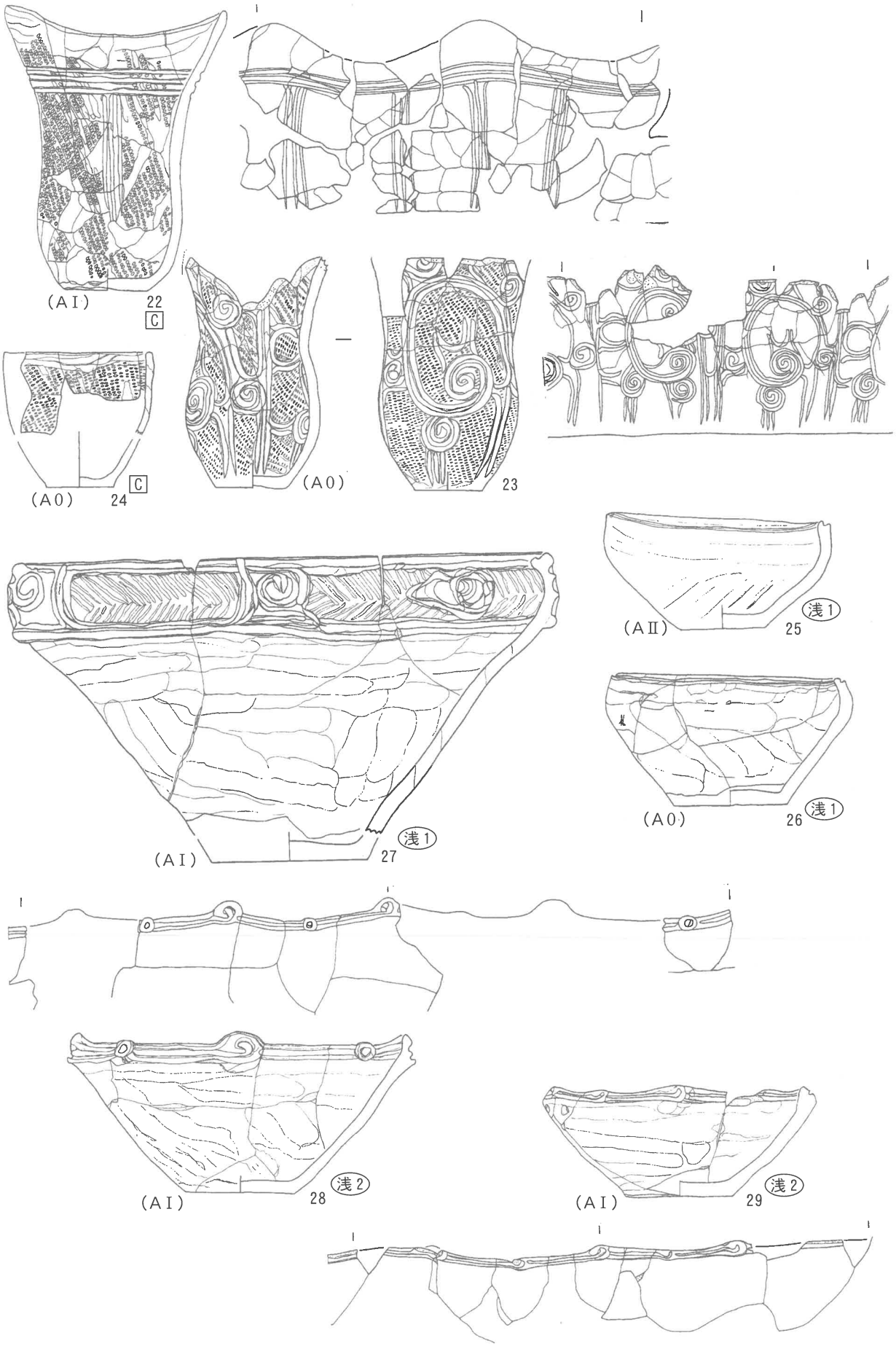
A区　第10図



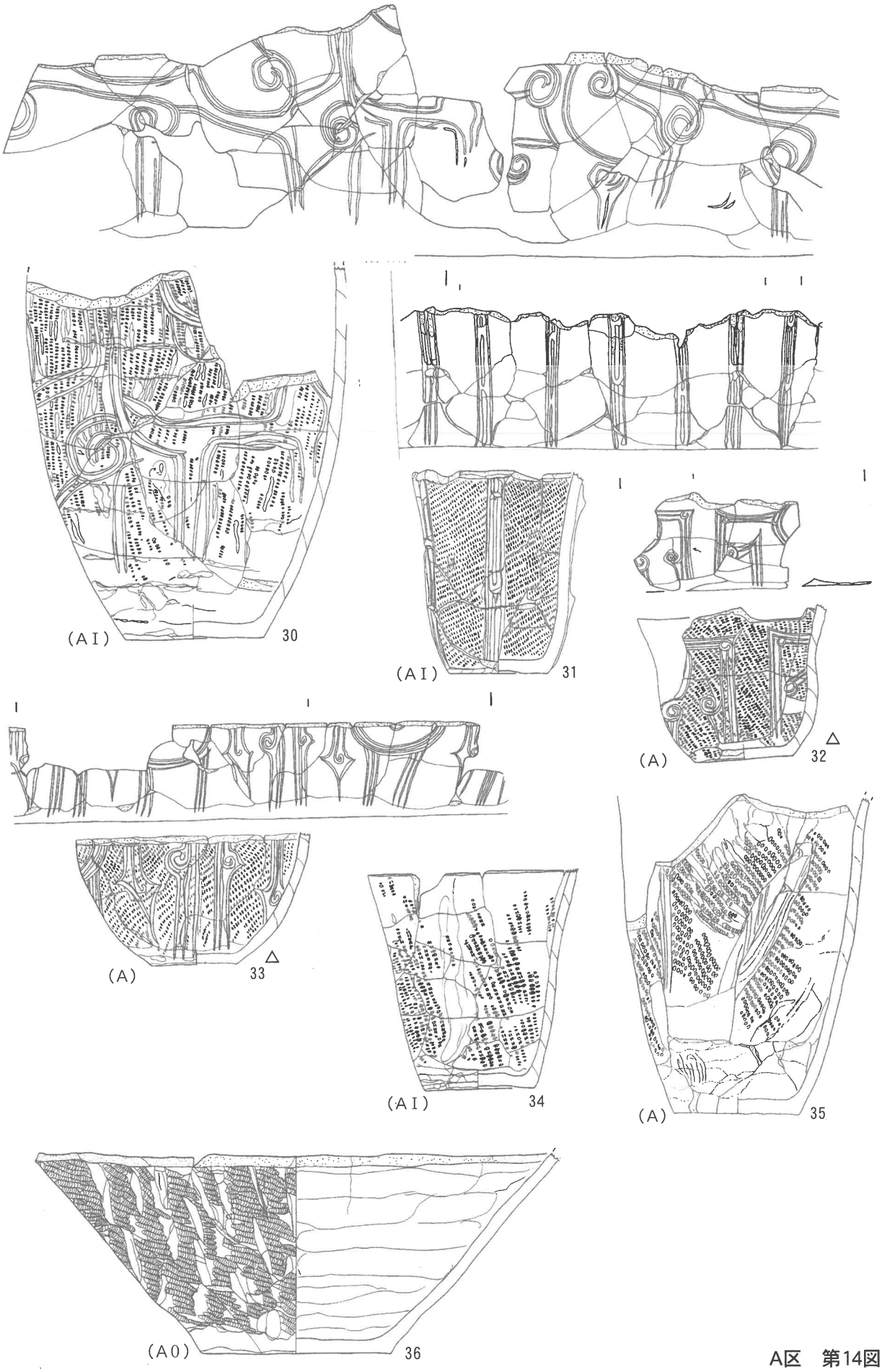
A区　第11図


(AⅢ) 11 B
(AⅠ) 12 B
(AⅠ) 13 B
(A) 14 B △
(AⅡ) 15 B
(AⅠ) 16 B
(A0) 17 C
(A0) 18 C
(AⅠ) 19 C
(AⅠ) 20 C
(A) 21 C

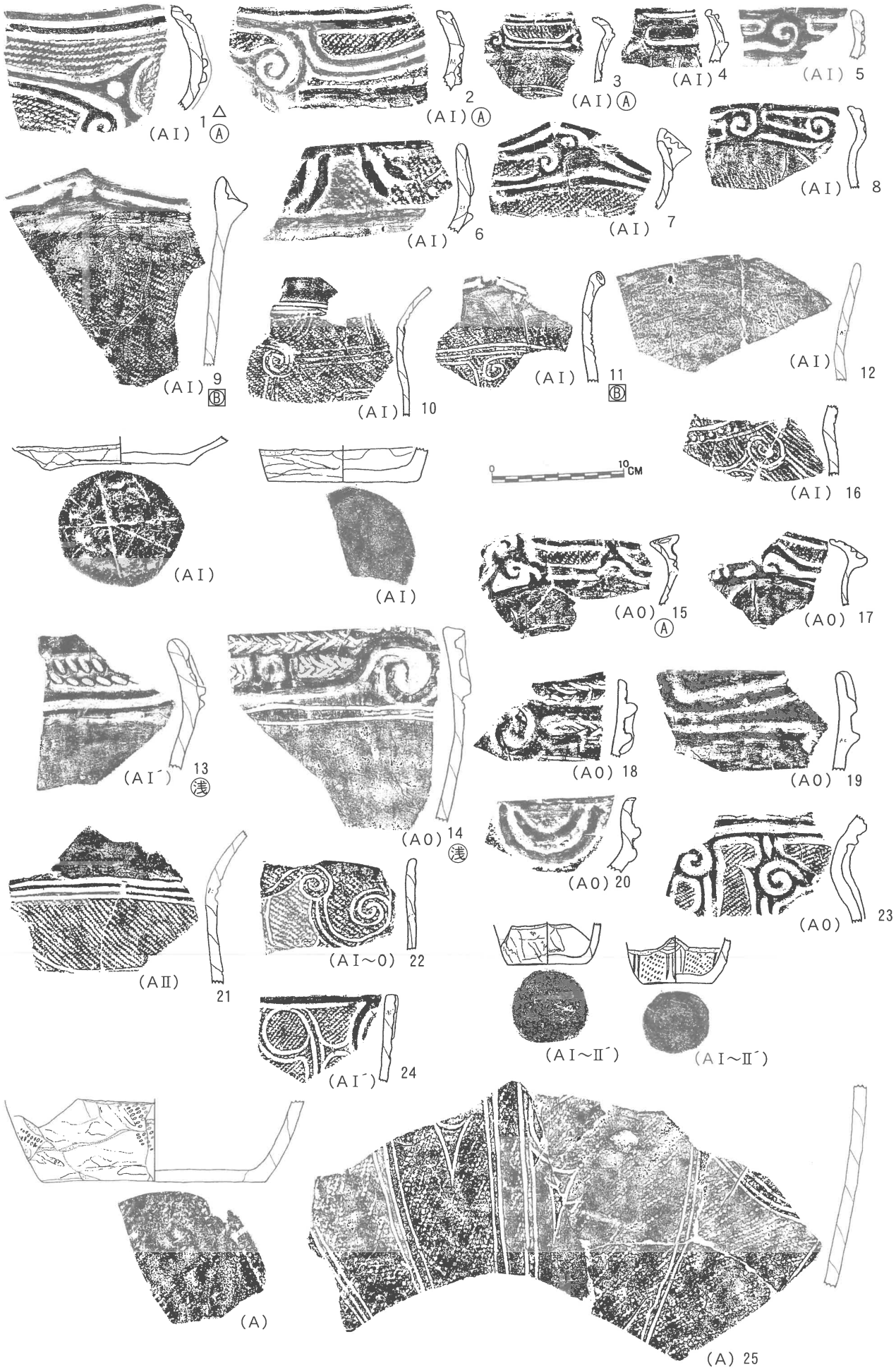
A区　第12図



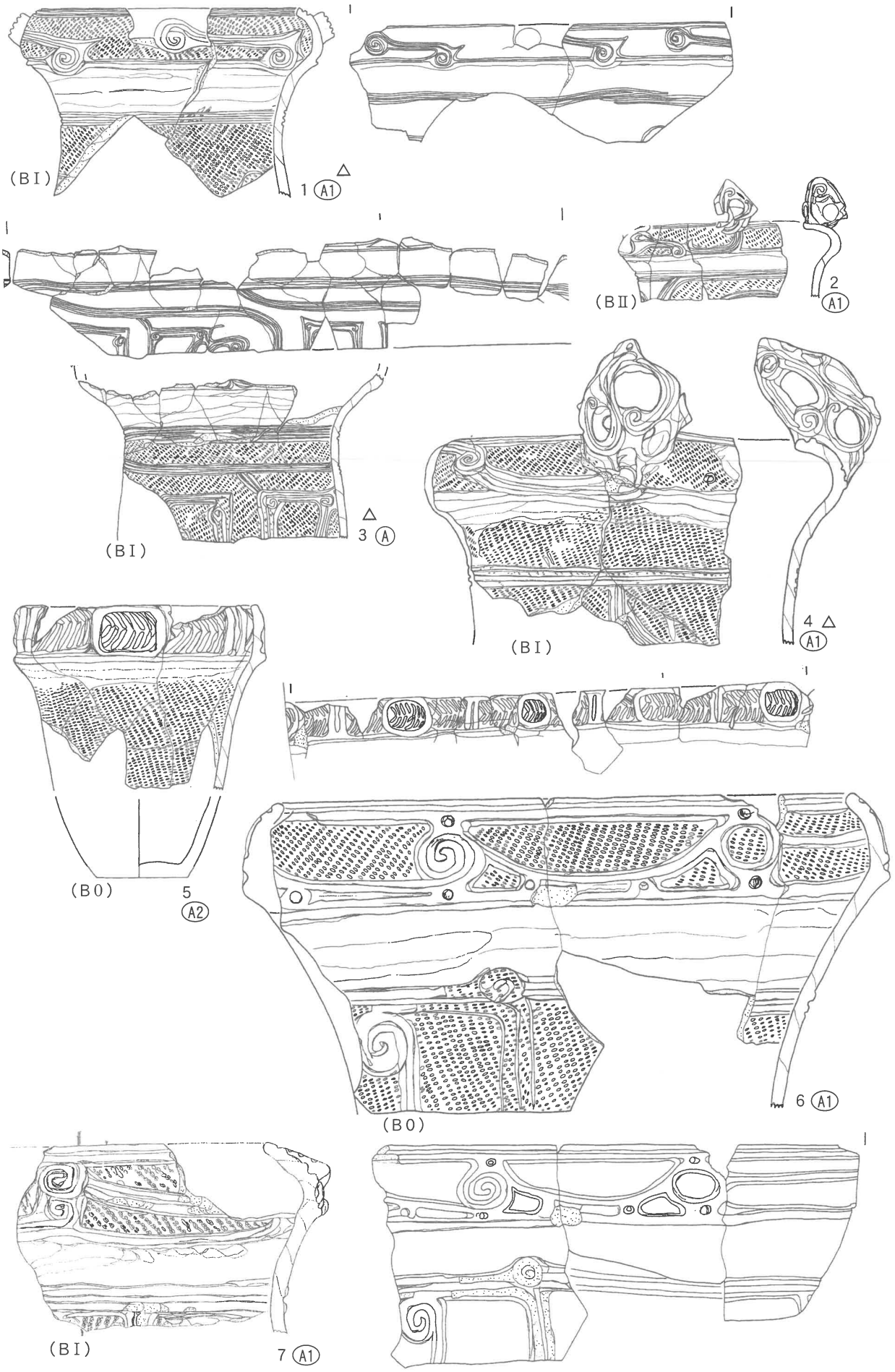
A区　第13図



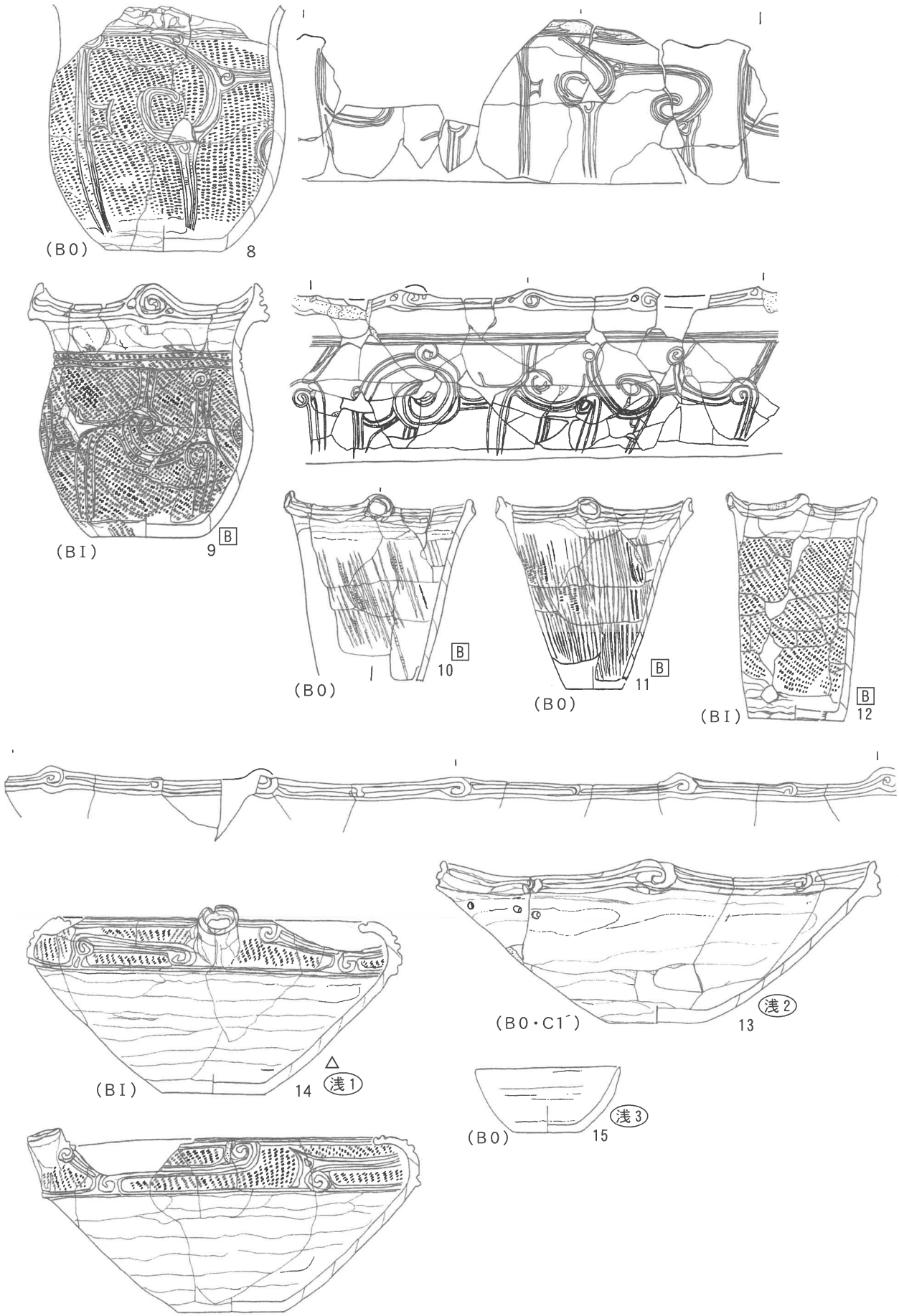
A区　第14図


(AI) 1 Ⓐ
2 (AI) Ⓐ
3 (AI) Ⓐ
(AI) 4
(AI) 5
(AI) 6
(AI) 7
(AI) 8
(AI) 9 Ⓑ
(AI) 10
(AI) 11 Ⓑ
(AI) 12
(AI)
(AI)
0 10CM
(AI) 16
(AO) 15 Ⓐ
(AO) 17
(AI´) 13 浅
(AO) 14 浅
(AO) 18
(AO) 19
(AO) 20
(AO) 23
(AII) 21
(AI～O) 22
(AI´) 24
(AI～II´)
(AI～II´)
(A)
(A) 25

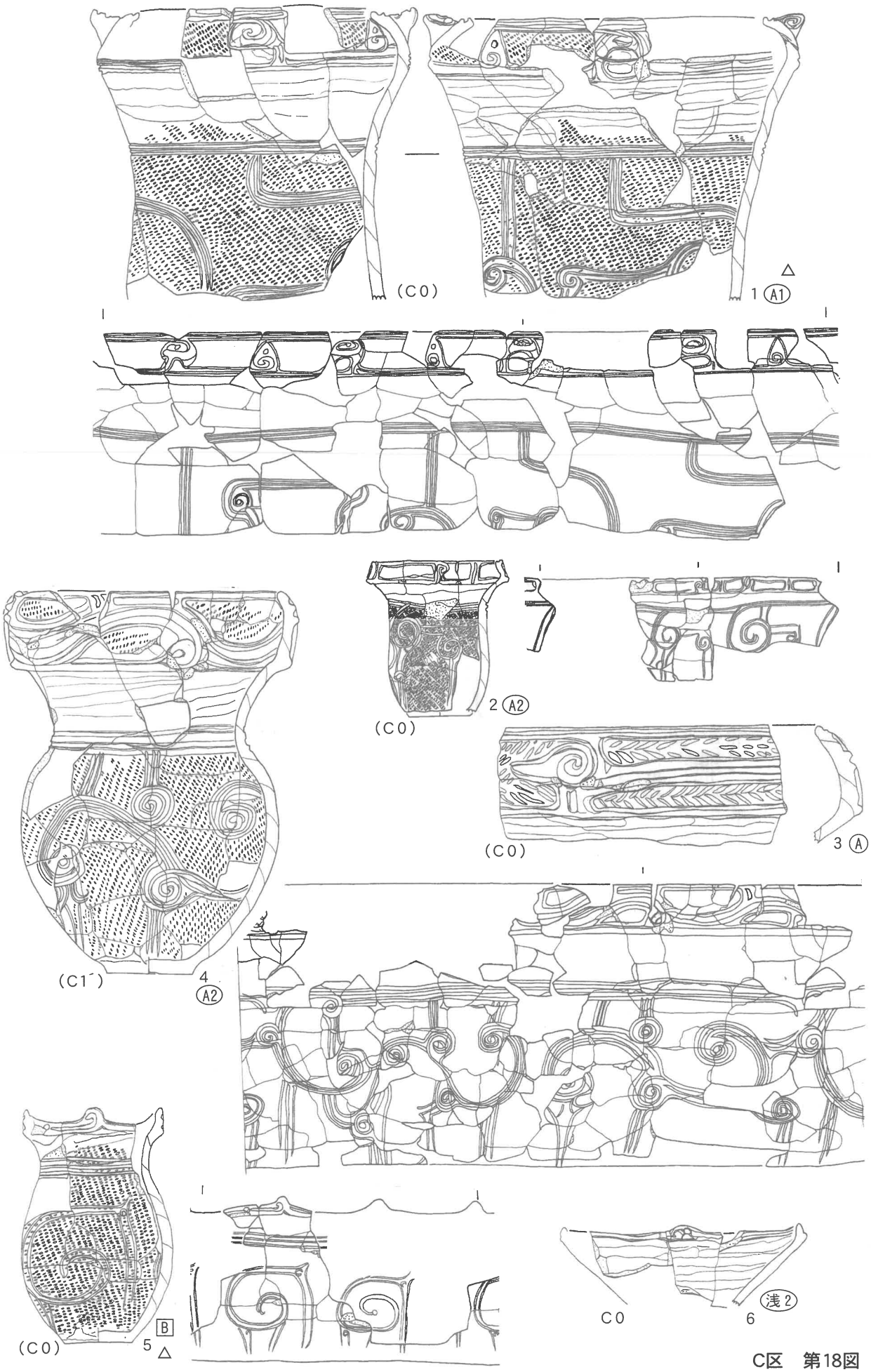
A区　第15図



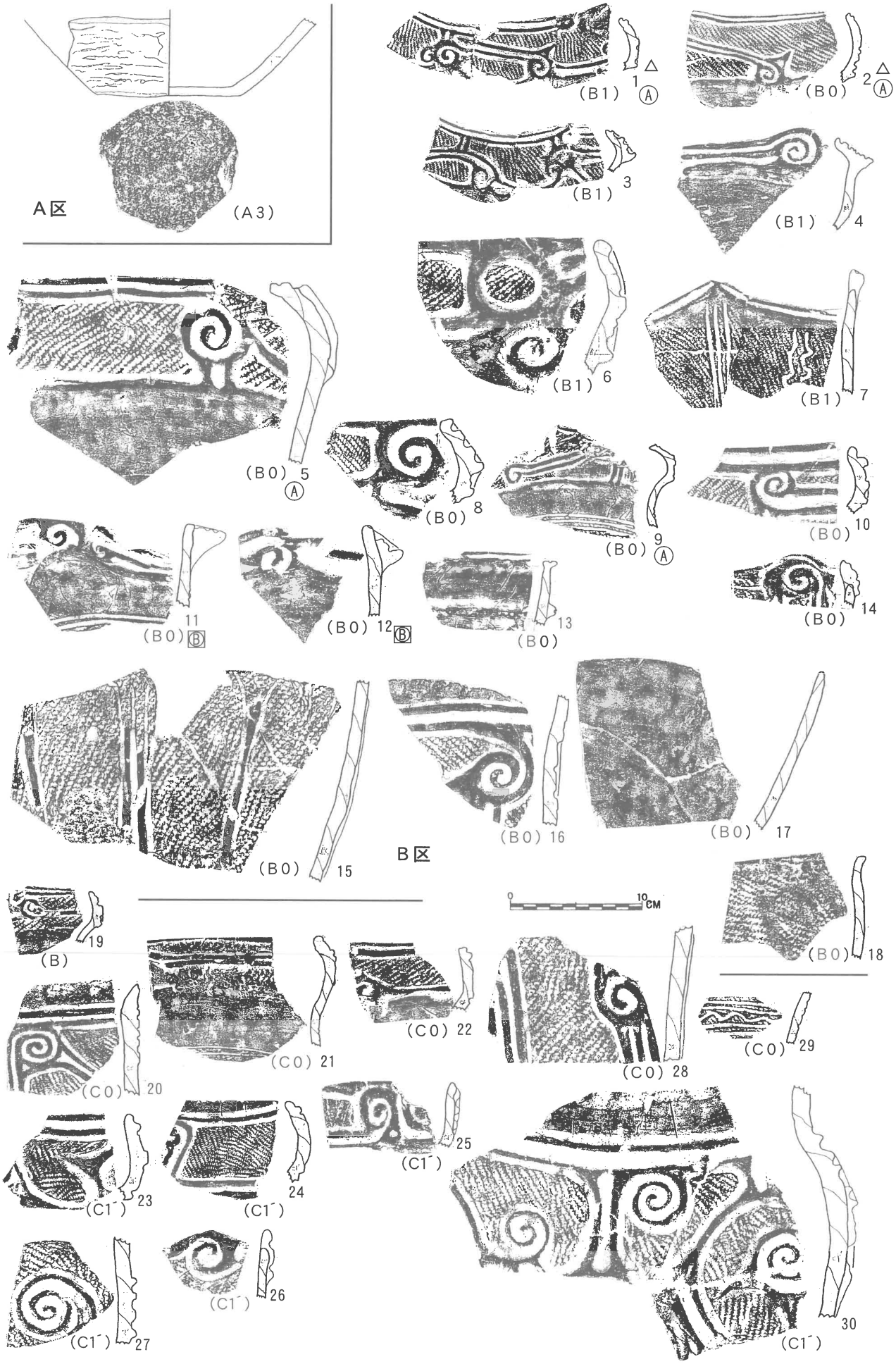
B区　第16図



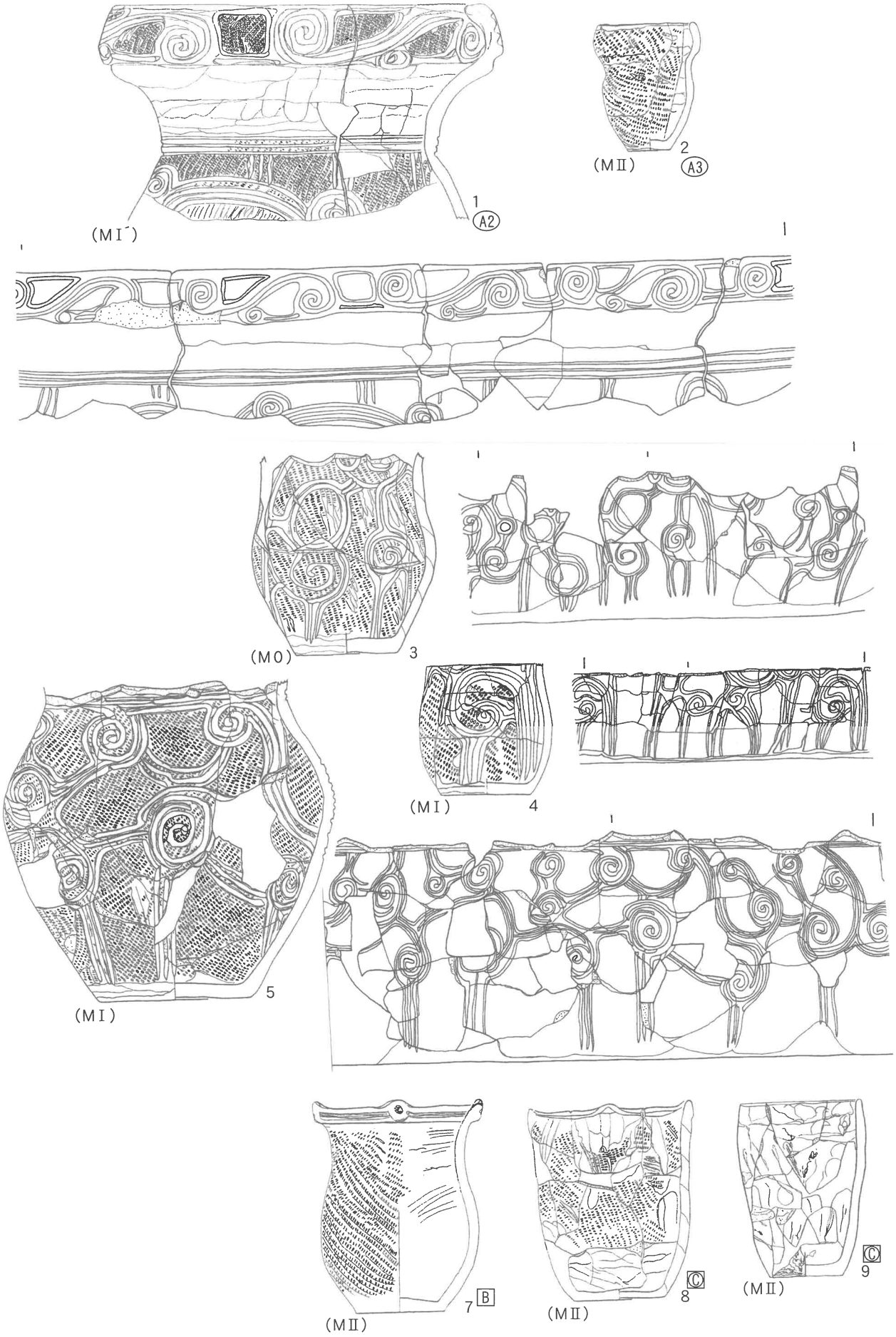
B区　第17図



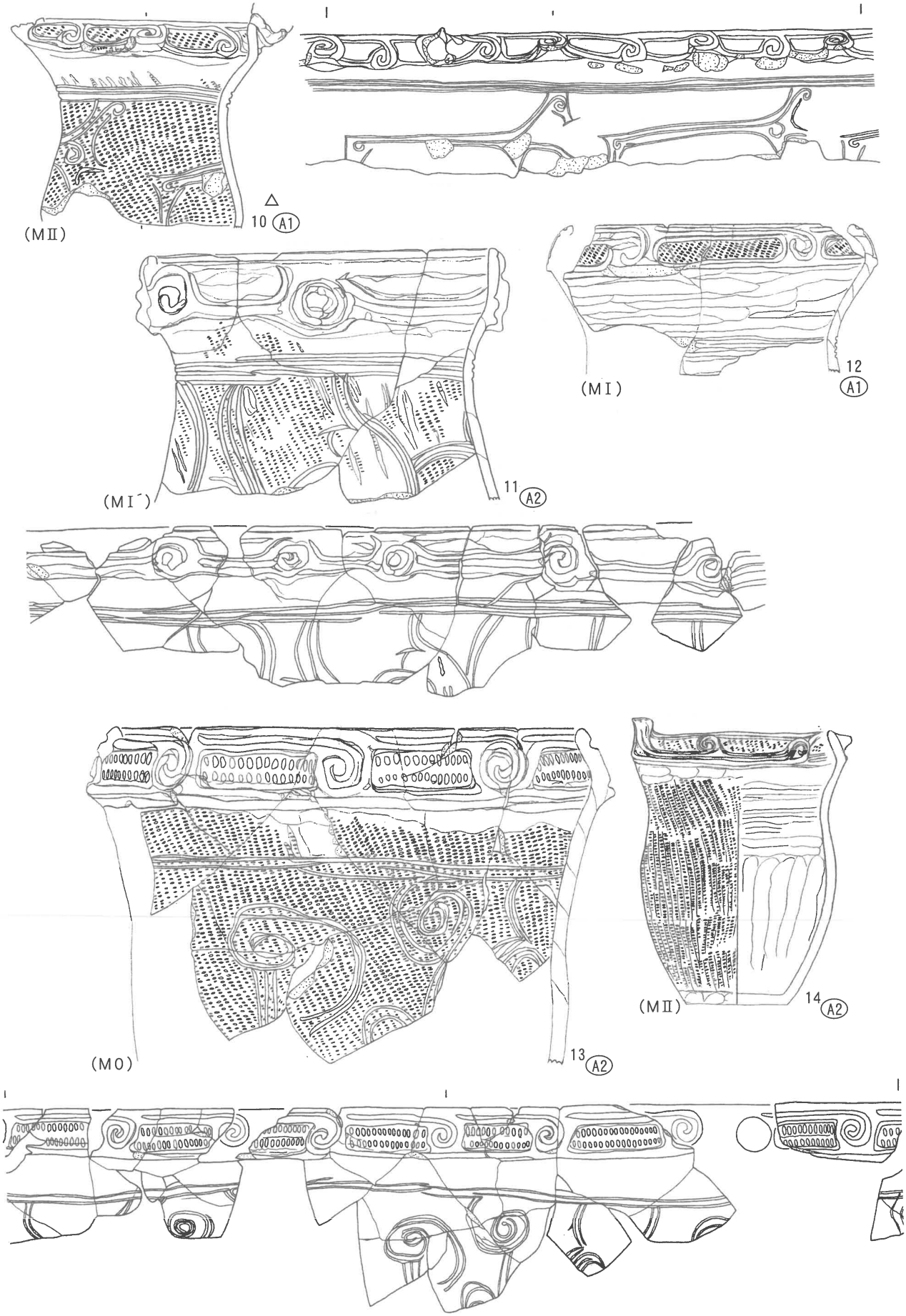
C区　第18図


A区
(A3)
(B1) 1 △Ⓐ
(B0) 2 △Ⓐ
(B1) 3
(B1) 4
(B1) 6
(B1) 7
(B0) 5 Ⓐ
(B0) 8
(B0) 9 Ⓐ
(B0) 10
(B0) Ⓑ 11
(B0) 12 Ⓑ
(B0) 13
(B0) 14
(B0) 15
B区
(B0) 16
(B0) 17
(B) 19
(B0) 18
0 10CM
(C0) 20
(C0) 21
(C0) 22
(C0) 28
(C0) 29
(C1´) 23
(C1´) 24
(C1´) 25
(C1´) 26
(C1´) 27
(C1´) 30

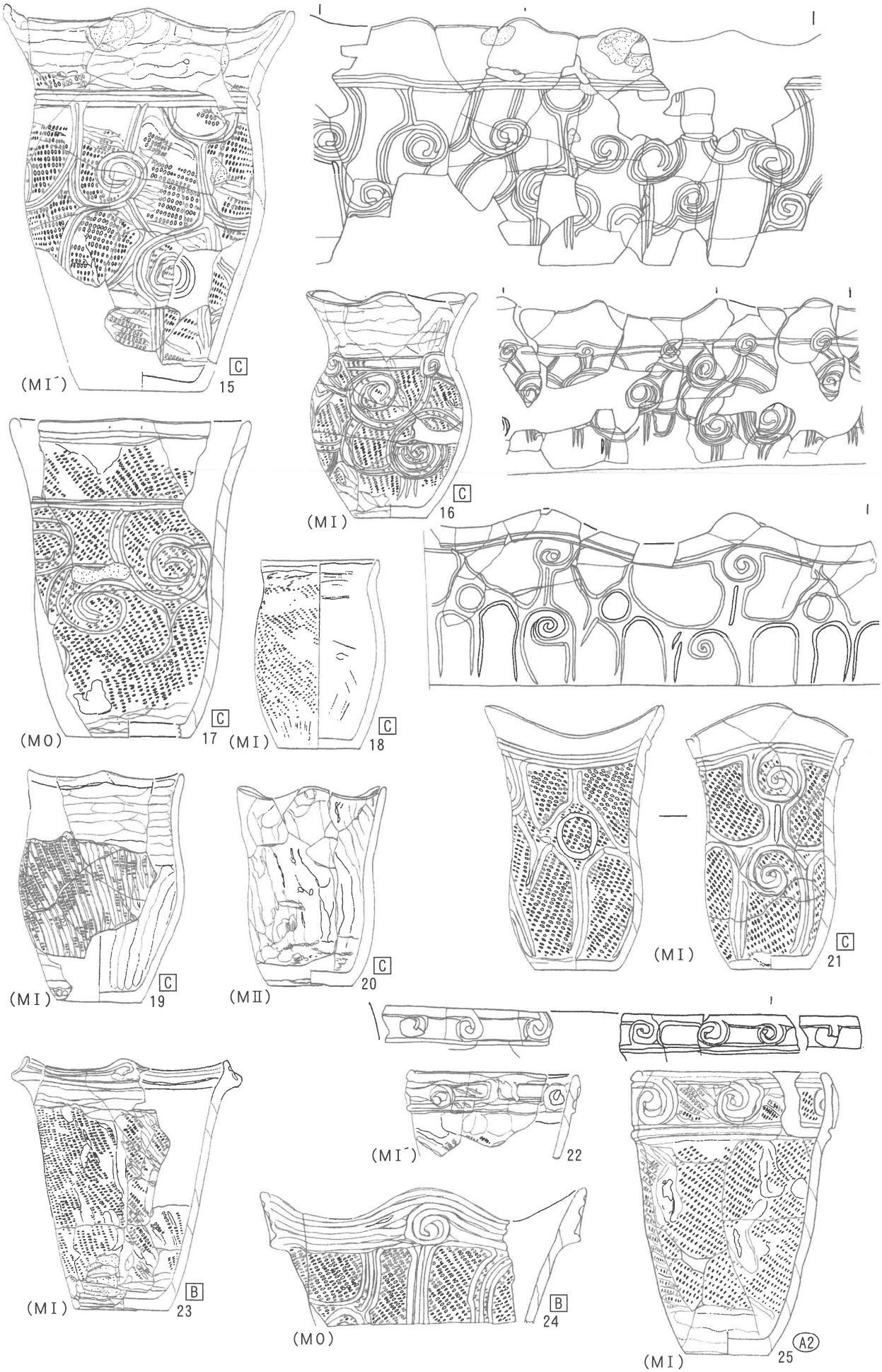
C区　第19図



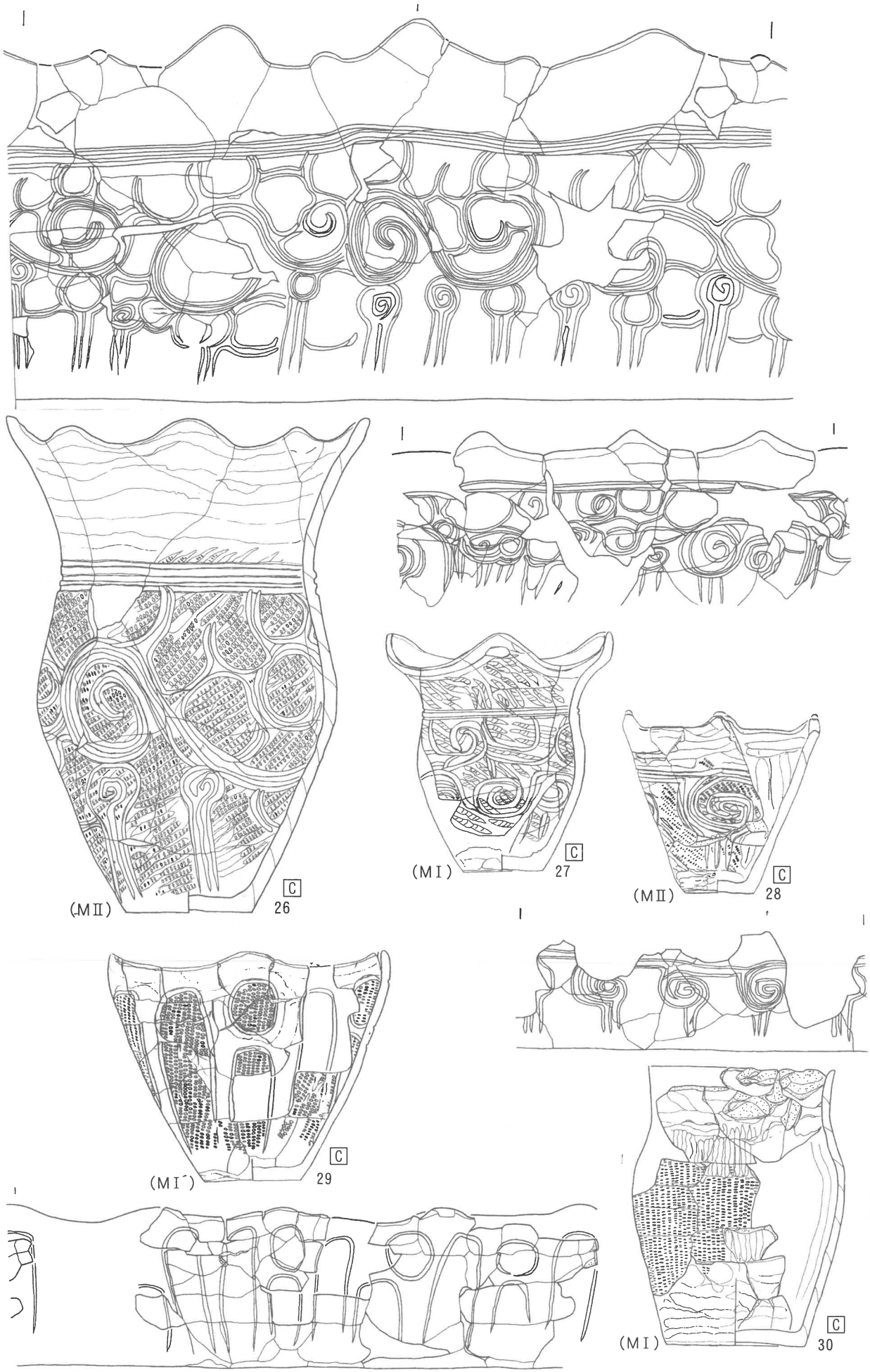
M区　第20図



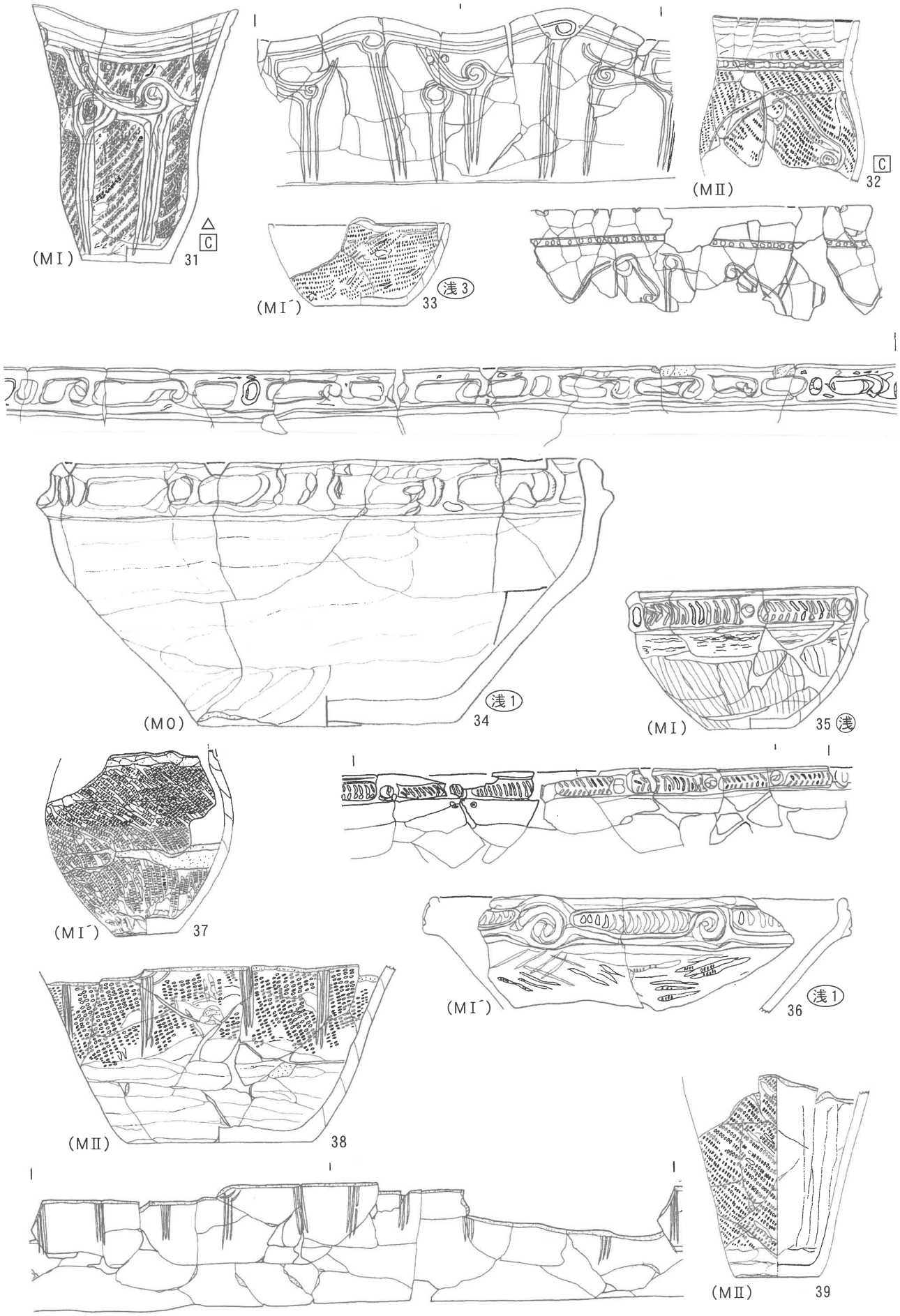
M区　第21図


(MI´)
15
C
16
(MI)
C
(MO)
17
C
(MI)
18
C
(MI)
19
C
(MII)
20
C
(MI)
21
C
(MI´)
22
(MI)
23
B
(MO)
24
B
(MI)
25
A2

M区　第22図



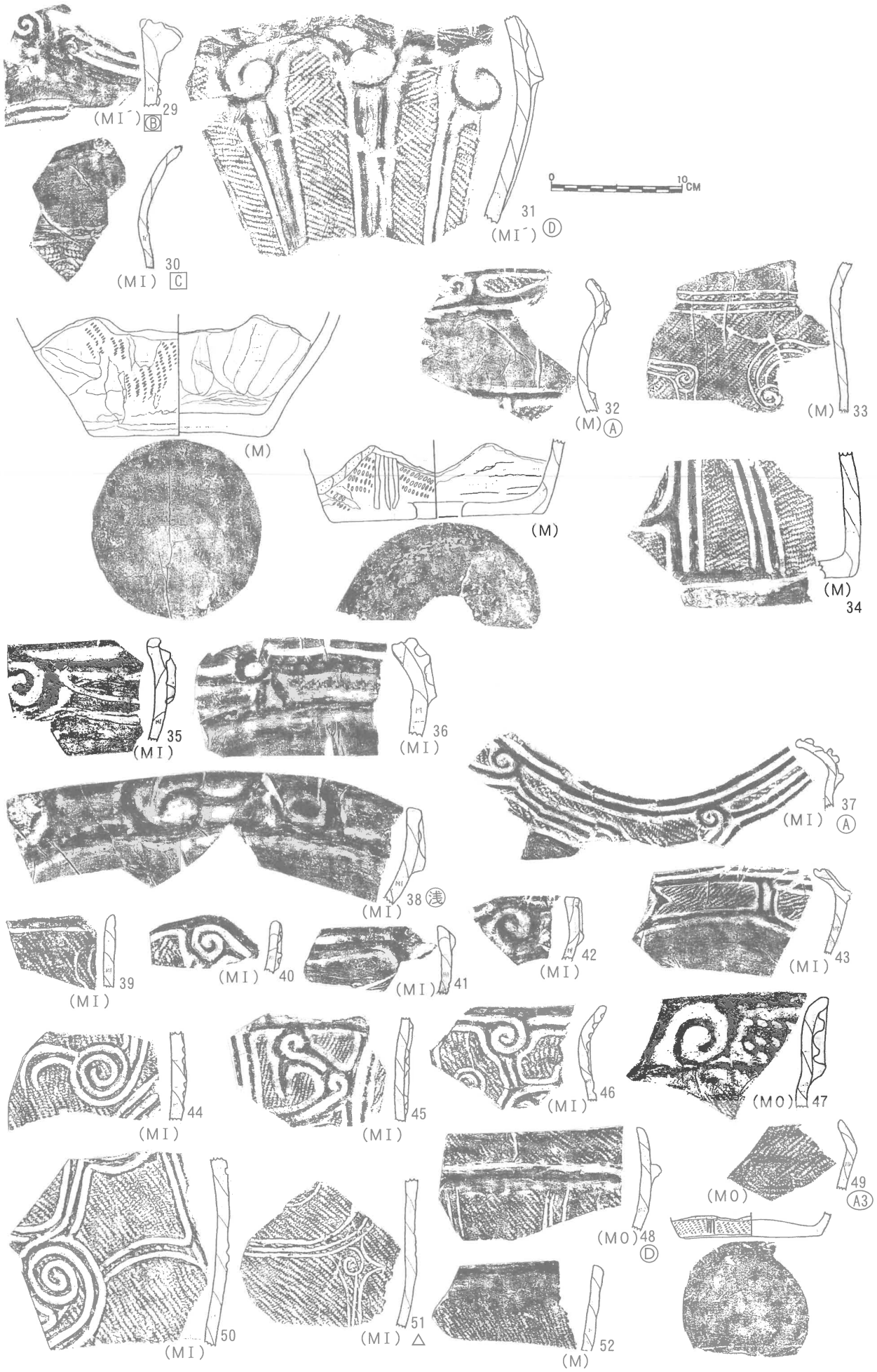
M区　第23図



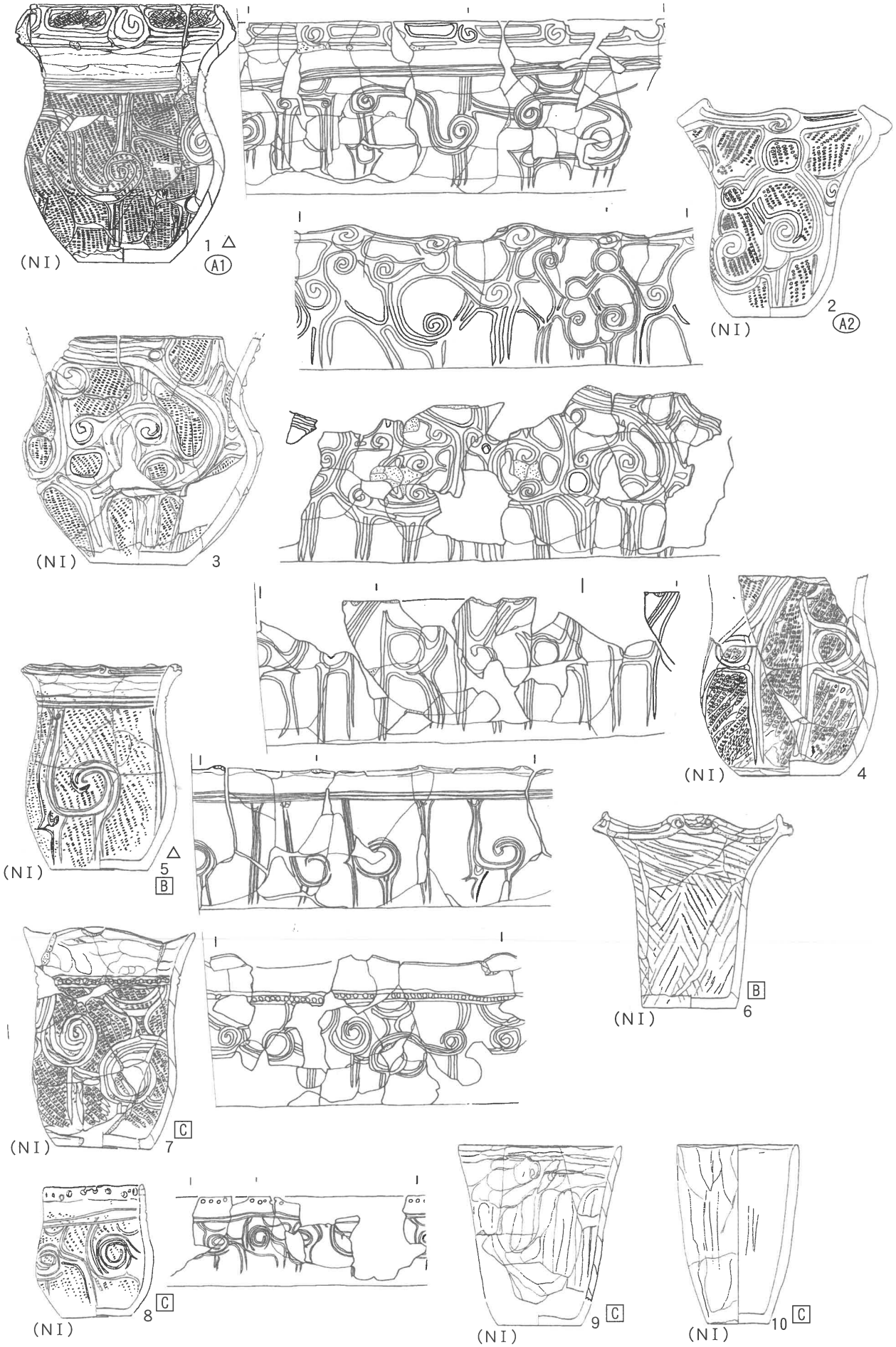
M区　第24図

1 Ⓐ (MⅡ)
2 Ⓐ (MⅡ)
3 Ⓐ (MⅡ)
4 (MⅡ)
5 浅 (MO)
6 浅 (MO)
7 (MO)
8 (MO)
9 (MO)
10 (MO)
11 (MO)
12 (MO)
13 (MO)
14 (MO)
15 (MO)
16 (MO)
17 (MⅡ)
18 (MO)
19 (MO)
20 (MO)
21 (MO)
22 (MO)
0 10CM
23 (MⅡ)
24 (MⅡ)
25 (MⅡ)
26 (MⅡ)
27 (MO)
28 (MO)

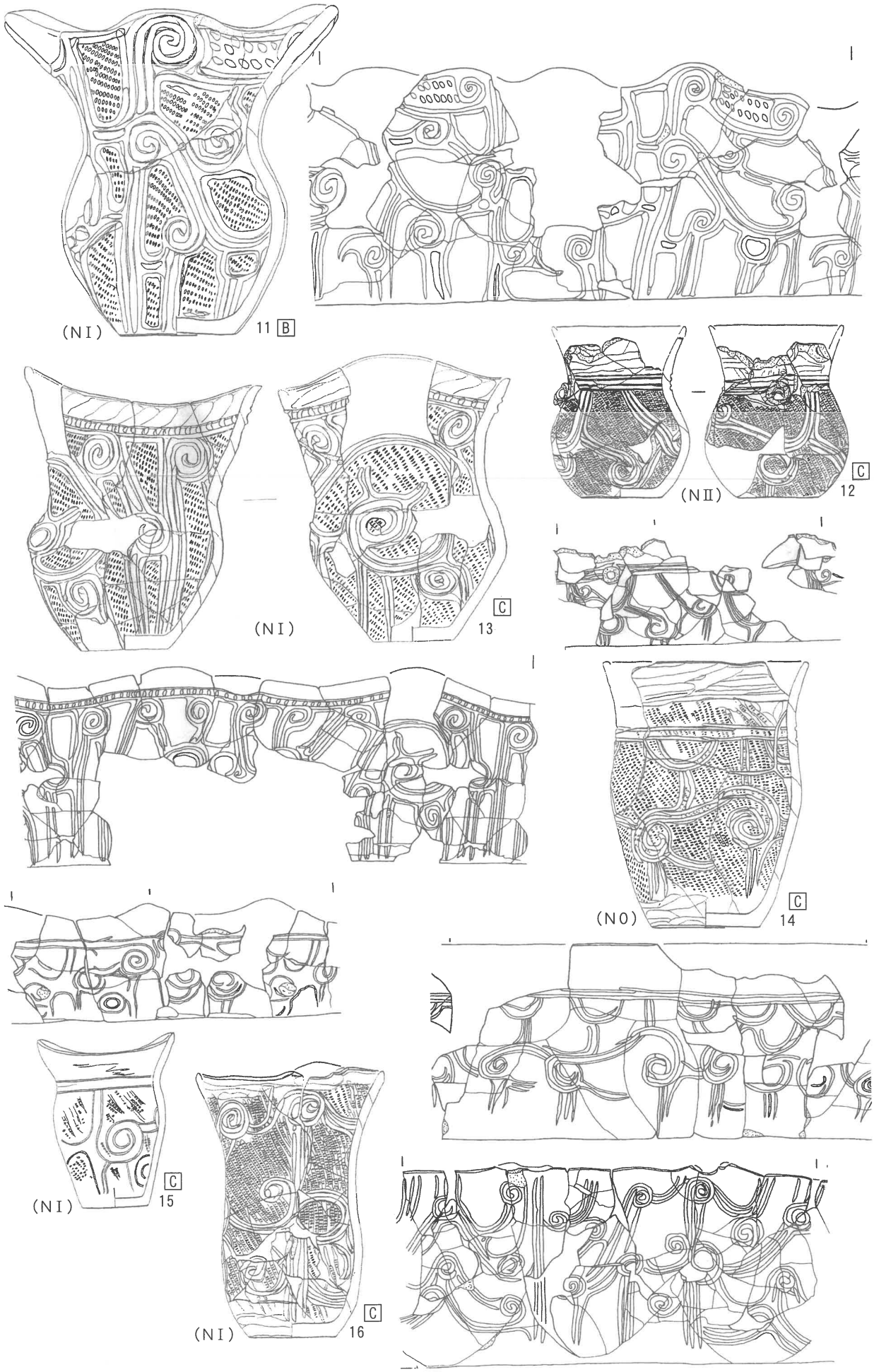
M区　第25図


29
(MI´) Ⓑ
30
(MI) C
31
(MI´) Ⓓ
0 10CM
(M)
32
(M) Ⓐ
(M) 33
(M)
(M)
(M)
34
35
(MI)
36
(MI)
37
(MI) Ⓐ
38 浅
(MI)
39
(MI)
(MI) 40
(MI) 41
42
(MI)
(MI) 43
44
(MI)
45
(MI)
46
(MI)
(MO) 47
49
(MO)
A3
(MO) 48
Ⓓ
50
(MI)
51
(MI) △
52
(M)

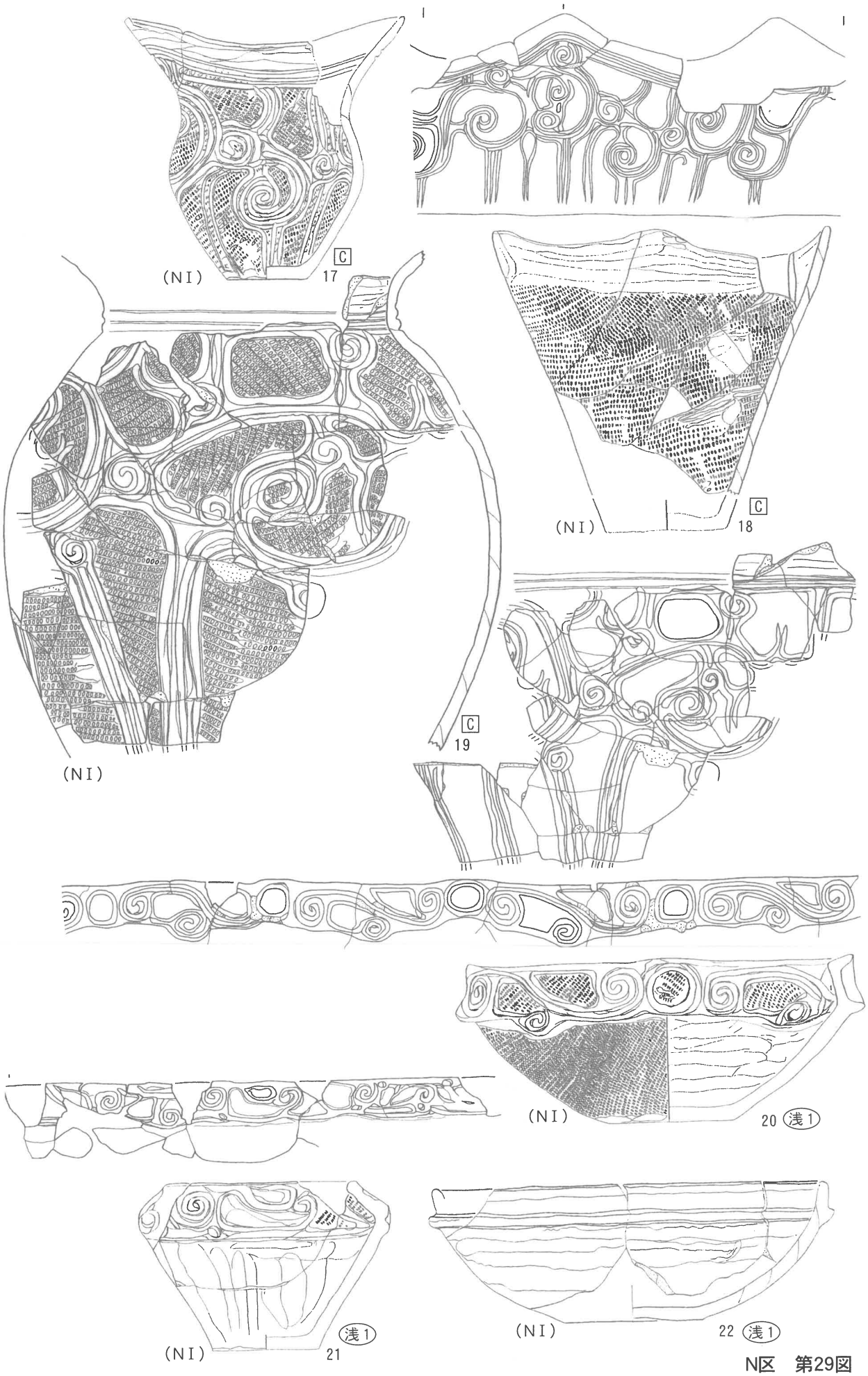
M区　第26図



N区　第27図



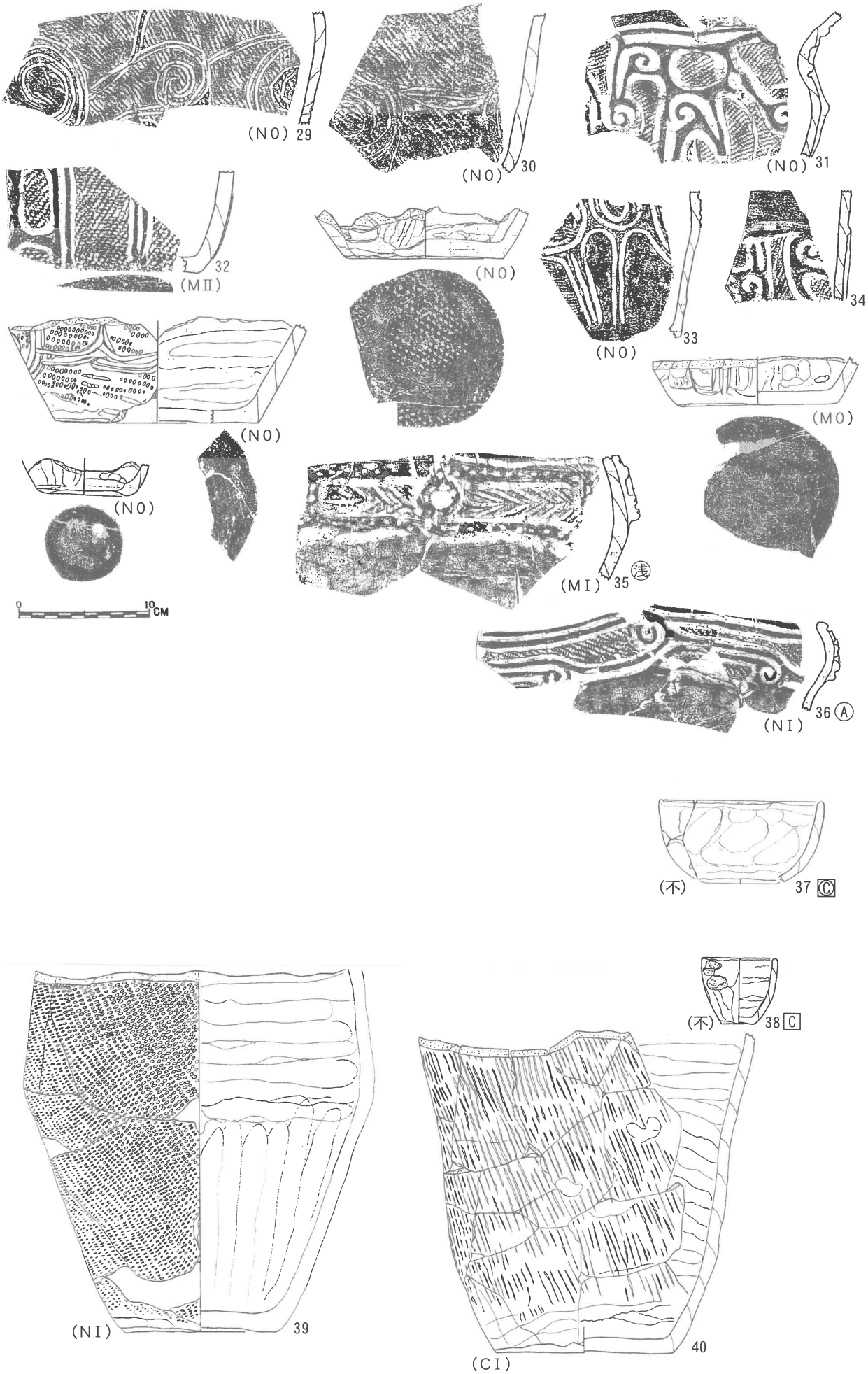
N区　第28図



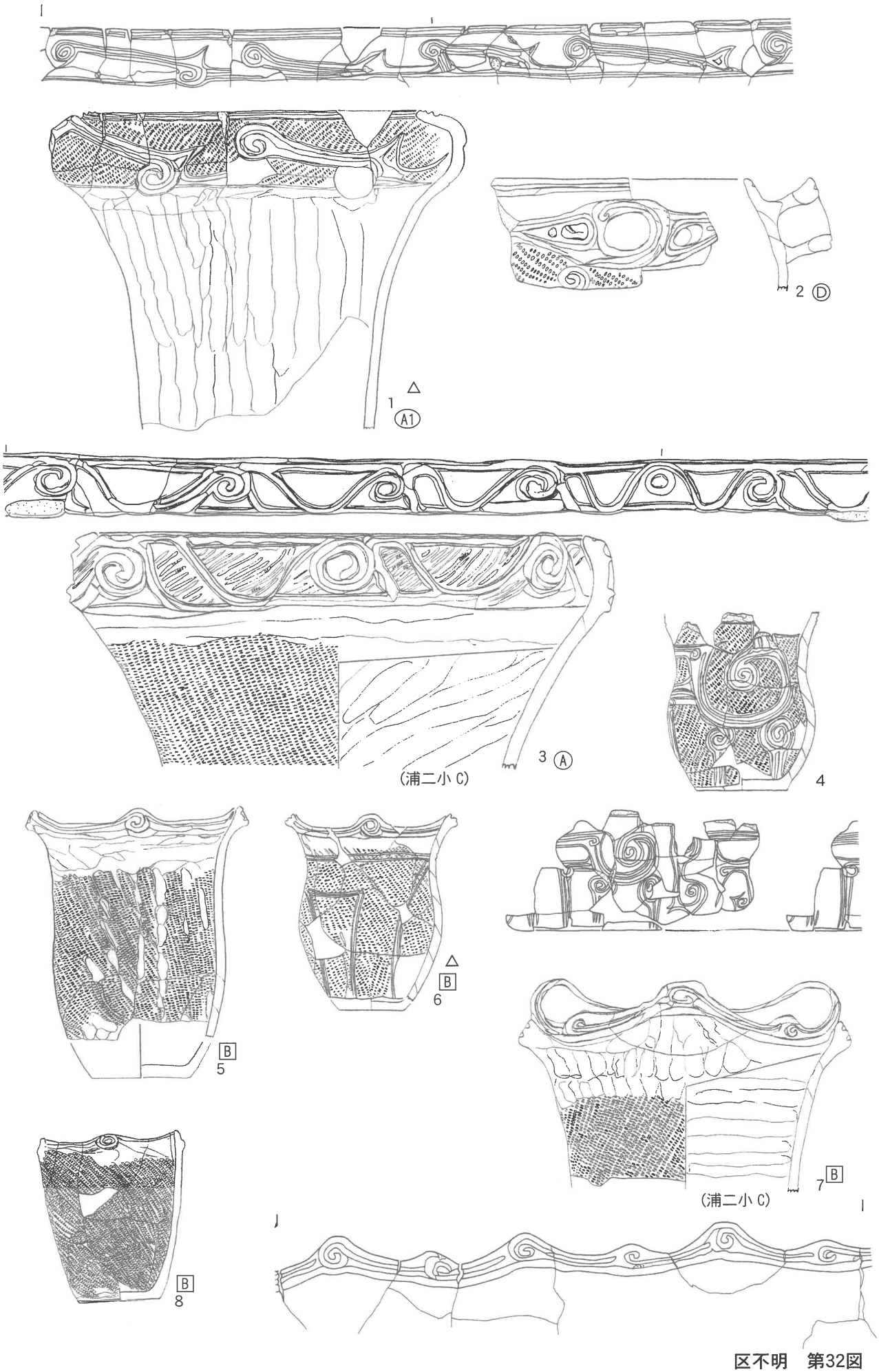
N区　第29図

(NⅡ) 1
(NⅡ) 2
3 浅
(NⅡ)
△
(NⅡ) 9
(NⅠ) 4 Ⓐ
5
(NⅠ)
(NⅡ) 10
(NⅠ) 6
(NⅠ) 7
(NⅠ) 8
(NⅠ) 11
12
(NO)
13
(NO) Ⓐ
(N) 14
15
(NO)
(N) 16
(NO)
17
Ⓐ2
(NO) 18
C
(NO) 19
20
(NO) B
(NO) 21
(NO) 22
(NⅠ´) 23
24
(MN)
(MN) 25
0 10CM
(N) 26
27
(N)
(N)
28
(N)

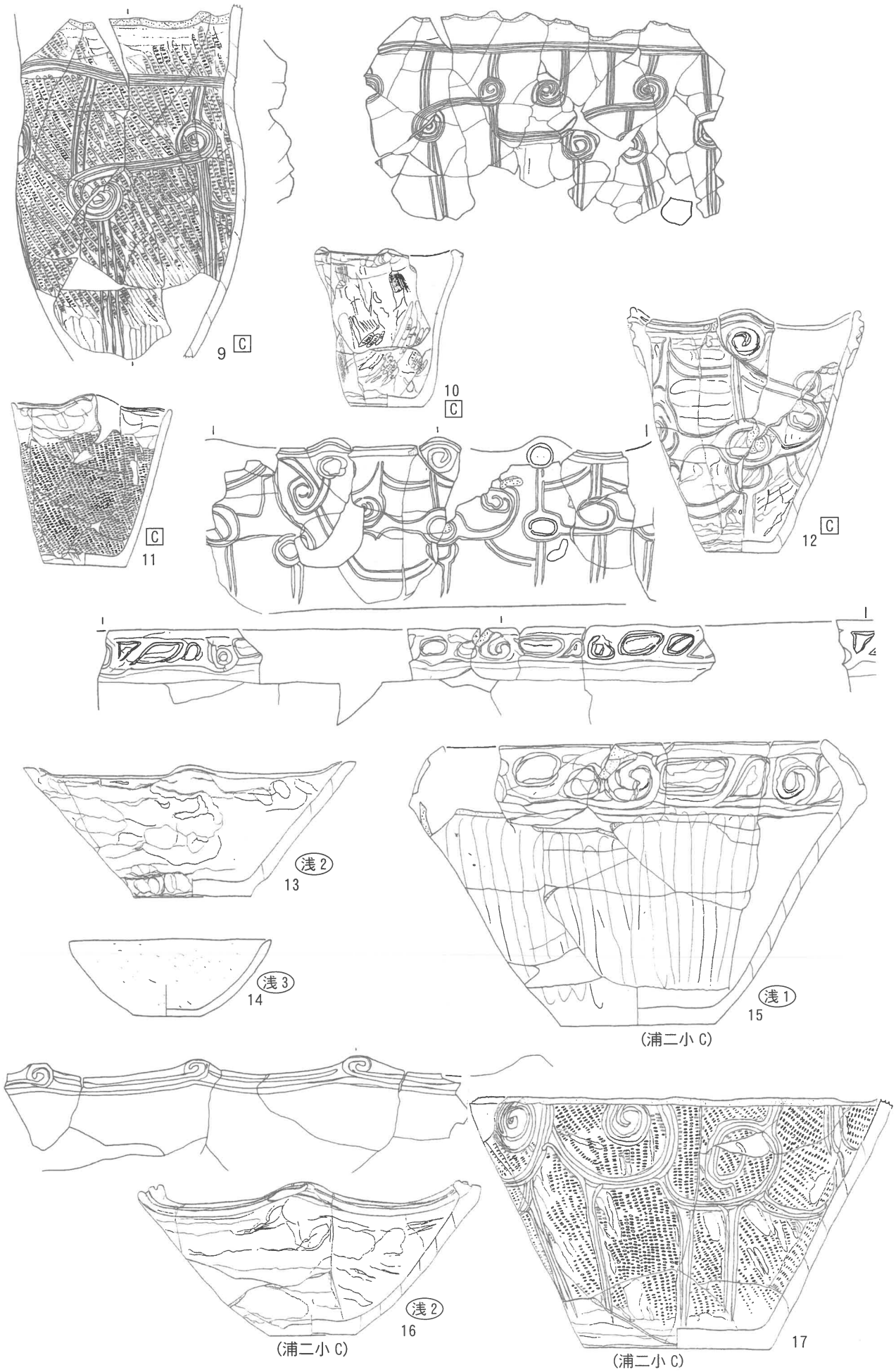
N区　第30図



M区・N区・C区・不明区　第31図

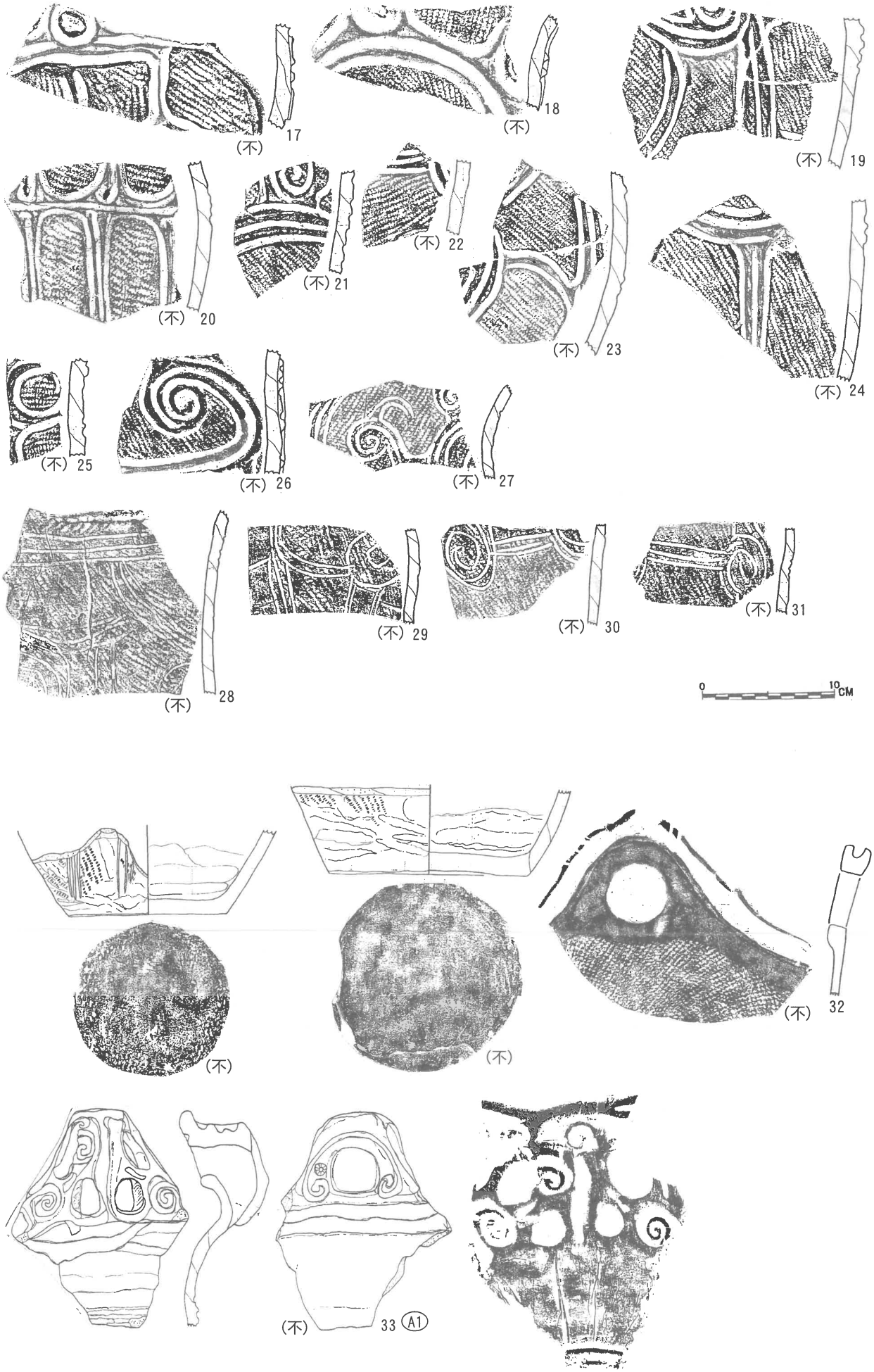


区不明　第32図

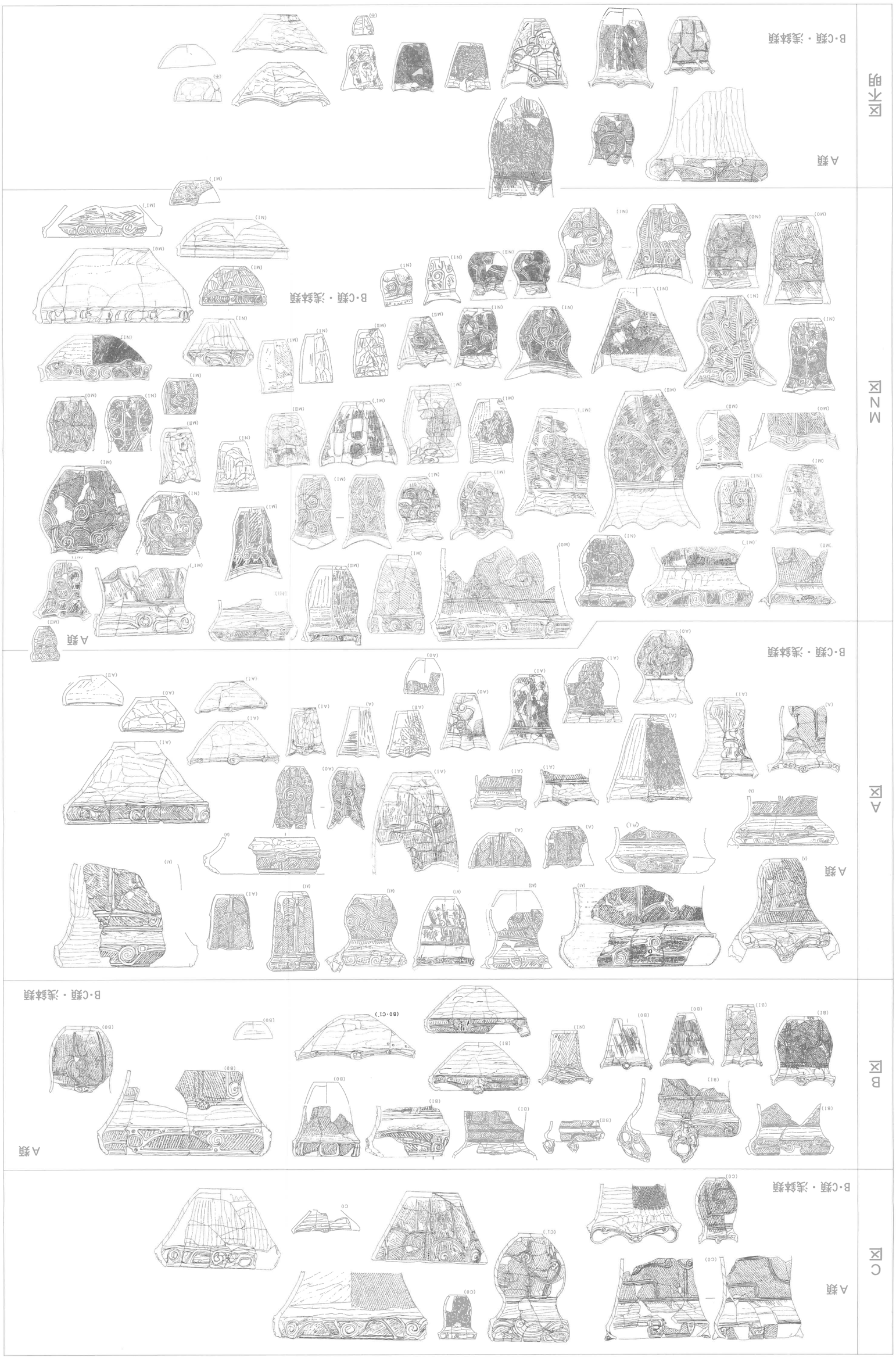


区不明　第33図

C区・M区・P区・区不明　第34図


(不) 17
(不) 18
(不) 19
(不) 20
(不) 21
(不) 22
(不) 23
(不) 24
(不) 25
(不) 26
(不) 27
(不) 28
(不) 29
(不) 30
(不) 31
0 10CM
(不)
(不)
(不) 32
(不) 33 A1

区不明　第35図



第36図　グリッド別・類型別図

グリット別・類型別土器の配置によって、中心になるのは、Ａ・ＭＮ区である。完形品、完形品に近い土器はＡ地区36個、Ａ類11個、Ｂ類５個、Ｃ類７個、浅鉢類５個で、特にＡＩ区に集中する。しかも大木８ｂ式の古い棘状文、カギ状の施文が多い。大木８ｂ式新段階のＡ類も多い。調査段階での小形土器が多かったＣ類である。

また、ＭＮ区も多く、Ａ類10個、Ｂ類４個、Ｃ類が特に多く27個、浅鉢類７個で総計48個の出土がある。Ｂ・Ｃ区は貝塚の東端である。貝層も薄く、遺物も少なく、Ａ区もＡⅢ・Ⅳ区は貝塚の北端で貝層薄く少なく、同じようにＡＩ´～Ⅱ´も貝層厚く、混土層に近くなり貝層の南端に近く完形品の出土は少なく、出土遺物も少ない。

同じようにＮ区も西側にあたり出土が少ない。ＭＩ´ 第23図29 は明らかなＣ類の土器であり、○文、∩文の区画をタテに配置したもので、典型的大木９式である。この出土状態がよくわからなかった。桂島貝塚出土では新しい時期なので、当時はピット遺構出土のでないかと考えていた。また、区別の拓本図を示してあるが、Ｎ区に一文様帯で不整方形、渦巻文のものが多く出土している。

第30図６・７・17・18のような一文様の土器の存在もあり、ＭＩ区に第26図31のように口縁部無文帯体部上から渦巻文と∩字状文がタテに施文されたＤ類型の出土もあり、ＭＩ´ 第23図26Ｃ類型 は大木８ｂ式新段階から棘状施文が失われ、連結曲流渦巻文の展開と、不整区画文の出現と同時に連結規格渦巻文が∩字状区画文とともに文様のタテへの変化を示し、大木９式へ発展することが明瞭である。

残念なことは、グリット調査を実施したが、大木８ｂ式から大木９式への層位的に確認することは出来なかった。

（３） 石製品 （第37図～第38図）

① 剥片石器

◆石　鏃（第37図１～４）

１～３は基部形態Ａ類（凹基）であり、ＭＩ区出土。１は長2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmである。２は長1.9cm、幅推1.7cm、厚さ0.35cmである。３は長2.4cm、幅1.6cm、厚さ0.5cmである。４は基部形態Ｄ類（凸基）であり、Ｂ０区出土。長3.0cm、幅1.3cm、厚さ0.4cmである（後藤勝彦 1986）。

◆石　匙（５～６）

５はＢＩ´区出土、先端部欠損の縦型石匙である。現長6.5cm、幅1.75cm、厚さ0.5cmである。６は同じく細身石匙で、ＡＩ出土、長7.7cm、幅1.5cm、厚さ0.8cmである。

② 棒状石器

◆軽石製品（７）

形態不明で用途特定出来ない。左側が欠損している。ＢＩ´区出土。長3.3cm、幅推1.8cm、厚さ1.3cmである。

◆石　斧（８～11）

８は先端部と裏面先端が欠損したものＡＩ区出土。現長13.0cm、幅4.3cm、厚さ2.4cmである。９はＭＩ区出土。長10.4cm、幅4.3cm、厚さ2.5cmである。10はＡⅣ区出土で、先端欠損。現長7.1cm、幅4.6cm、厚さ1.8～1.5cmである。11はＰ区出土でこれも先端欠損である。現長6.9cm、幅3.6cm、厚さ1.4～1.1cmである。

◆凹　石（13～14）

13は上部欠損したもので下部に擦面、特に、裏面の擦面下部に凹部２個が存在する。ＭⅡ出土。

現長9.4cm、幅5.2cm、厚さ5.4cmである。14は下部欠損で上部に２個の打痕跡がある。裏面欠損したもので同じように打痕跡がある。Ｃ０区出土である。現長9.4cm、幅8.0cm、厚さ5.6cmである。

◆石製垂飾具（12）

垂飾具は上部に0.8cmの、凹部に0.3cmの貫通孔があり、先端がやや欠損したものである。ＭⅡ区出土。現長8.6cm、幅3.1cm、厚さ1.4cmである。石質凝灰岩である。

◆小判形円盤状石製品（16～20）

形態は小判状の扁平・やや棒状のもの、17・18・20は扁平、16・19はやや棒状である。16はＮ０区出土、長6.4cm、幅3.6cm、厚さ1.85cmである。

17は区不明、長9.1cm、幅5.7cm、厚さ1.8cmである。18はＣＩ´区出土、長8.4cm、幅4.3cm、厚さ1.1cmである。19は下部欠損で、Ｍ０区出土。現長9.9cm、幅5.1cm、厚さ2.5cmである。20はＭＩ´区出土、長7.4cm、幅4.6cm、厚さ1.12cmである。

◆打製石斧（15）

ＮＩ´区出土。表面左側と下部が大きく剥離され、裏面は端部がよく剥離された大形の打石器である。長11.9cm、幅6.9cm、厚さ3.2cmである。

◆擦痕・刻線のある平板な凝灰岩（21～22）

両品とも下部欠損、用途不明の石である。21はＡＩ´区出土。両面とも下部の欠損した近くに刻線・擦痕が多い。現長11.1cm、幅7.3cm、厚さ2.8cm。22はＢ０区出土で、表面の欠損部近くに刻線・擦痕が集中している。現長8.3cm、幅7.0cm、厚さ1.7～1.4cmである。

◆不整な石（第38図24～26）

総べて不整な平板なもので用途不明。24は区不明、現長14.1cm、幅6.8～6.3cm、厚さ2.2～1.0cmである。25はＮ０区出土。現長13.0cm、幅8.7cm、厚さ2.3～1.1cmである。26はＭＩ区出土。現長7.5cm、幅5.4cm、厚さ1.5～1.2cmである。

◆舟底状不明石器（23）

凝灰岩製で上部に突起状の摘み持ち、上部より下部中よりまで約0.7cmの幅約0.5cm、長さ12.0cm程の舟底状の凹部持つもので、長19.8cm、幅3.8～9.1cm、厚さ2.3～1.57cmのものである。表に刻線・擦痕や打痕跡の凹部を持ち、裏面も左端に刻線・擦痕が多く、舟形状に整った整形がされている。最初、２分割の別々Ａ区出土で整理によって接続された。用途は始め突起があることから「偶」的なものと考えたが、舟底の凹があることから別の用途と考え不明石器とした。

この他に図示出来なかったが、昭和39年８月新築の浦戸二小を訪れた資料として、刻線ある石１個、丸石２個、石皿残欠１個、大形の凹穴６個の凹石１個、縦型石匙２個、横型石匙１個、凹基石鏃２個を写真に収めている。

（４） **骨角製品**（第38図下段　１～６）

◆耳飾り（１）

区不明で破片であるが環状の玖状耳飾りと推定。現長4.0cm、幅1.5cm、厚さ1.3cmである。

◆垂飾具（２）

Ｎ０区出土。魚種が不明だが鰓蓋骨を利用し、ヨコに貫通孔を持つものであり、周囲を整形した物である。高さ4.6cm、幅5.1cm、厚さ2.2～0.4cmである。

◆刺突具類（３～６）

３はＡ０区出土、先端部欠、基部にタテ・ヨコに刻み、現長4.8cm、幅0.87cm、厚さ0.5～0.7cmである。４はＭＩ区出土、上下欠損。現長5.9cm、幅0.6cm、厚さ0.46cmである。５は中足・中手骨の頭部で、Ｐ区出土。現長6.2cm、幅2.0cm、厚さ1.1cmである。６はＡⅡ´区出土、先端部欠。現長4.9cm、幅1.25cm、厚さ0.9cmである。

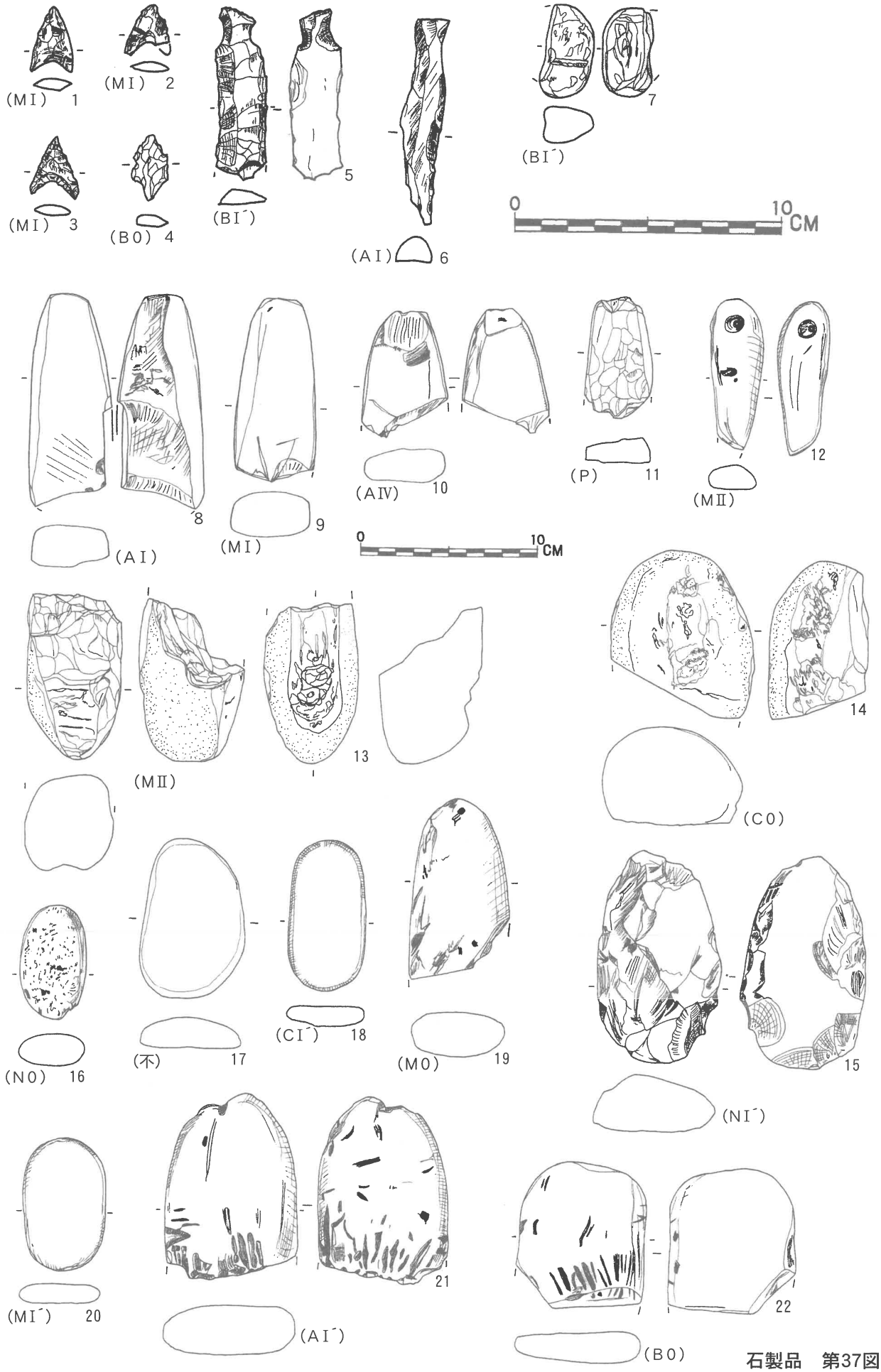
図示出来なかったが約６cmの小形無鈎釣針２個、尺骨の刺突具、角尖部の刺突具各１個、叉状の落角が出土している。

（５） 貝製品（７～９）

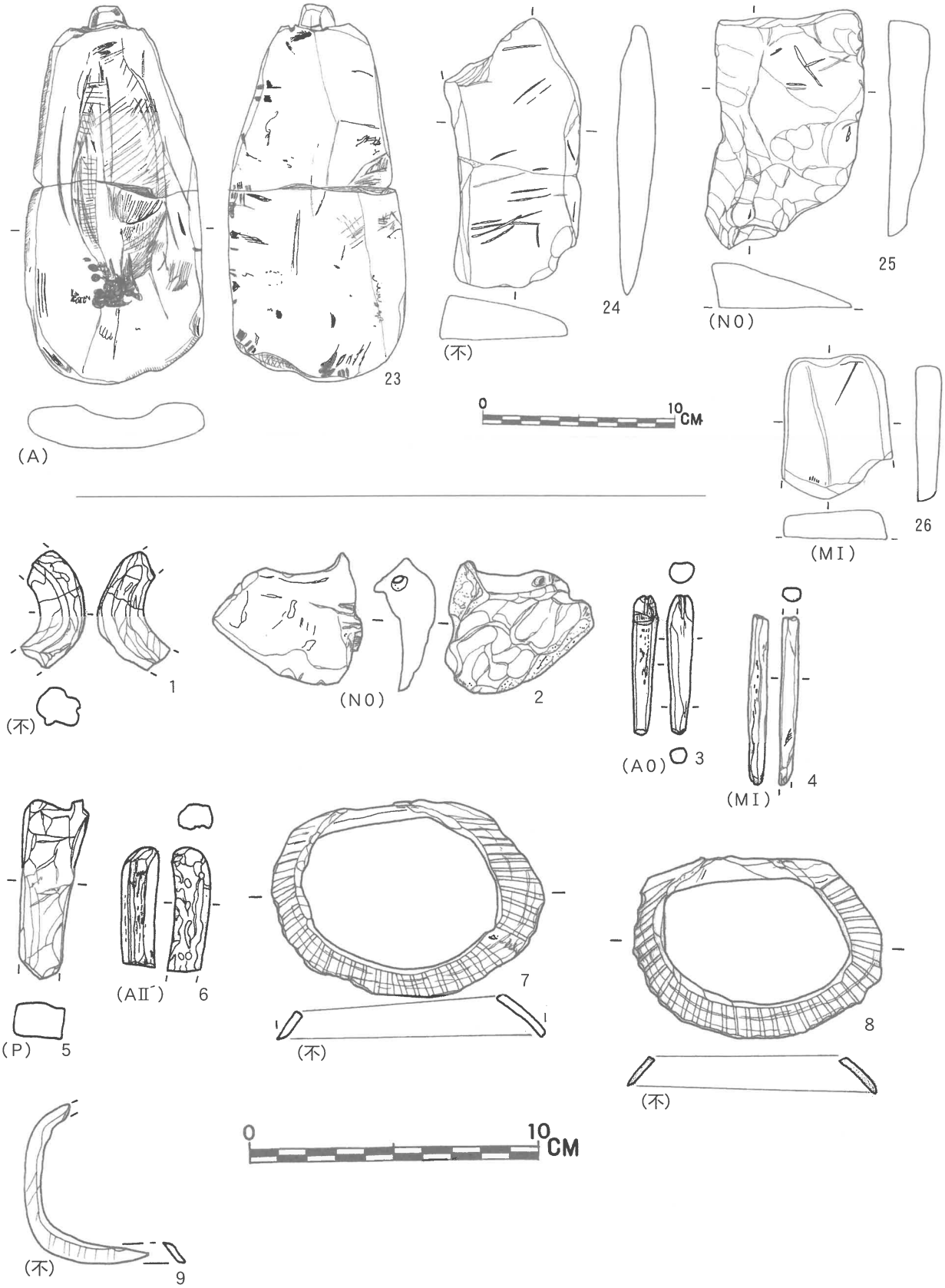
◆貝　輪

７～９は区不明、７・８はサルボウ製で、７は殻長6.7cm、殻幅9.3cm、厚さ0.3cmであり、８は殻長6.3cm、殻幅8.5cm、厚さ0.3cmである。９はハマグリ製で推殻長5.7cm、殻幅は不明、厚さ0.21cmである。

図示出来なかったがイタボカキ・カキの貝輪５点を確認している。


(MI) 1
(MI) 2
(MI) 3
(BO) 4
(BI´)
5
(AI) 6
7
(BI´)
0
10 CM
(AI)
8
(MI)
9
(AIV) 10
(P) 11
12
(MII)
0
10 CM
(MII)
13
14
(CO)
(NO) 16
(不) 17
(CI´) 18
(MO) 19
15
(NI´)
(MI´) 20
21
(AI´)
22
(BO)

石製品　第37図



石製品・骨角貝製品　第38図

（6） 自然遺物について

◆貝類

1　イタボカキ
2　カキ
3　クボガイ
4　スガイ
5　アカニシ
6　レイシ
7　イボニシ
8　イモカイの一種
9　ハマグリ
10　カリガネエガイ
11　イガイ
12　マテガイ
13　アサリ
14　シオフキ
15　サルボウ
16　ハイガイ
17　オオノガイ

(17種)

◆獣類

1　イノシシ
2　シカ
3　イヌ
4　ウサギ

(4種)

◆魚類

1　マダイ
2　クロダイ
3　タイ類
4　スズキ
5　ボラ
6　コチ
7　マグロ
8　サメ類

(8種)

◆　鳥類

1　カモ類
2　コガモ
3　ミズナギドリ
4　キジ

(4種)

◆両棲類

1　カメ

(1種)

合計　34種

①　獣　類

◆イノシシ　上顎骨R(区不明)I　○、L(p区)　○m　m　M、下顎骨R(区不明)○　M　M　L(区不明)　M　○、尺骨(MI´区)L1個、R(区不明)1個、上腕骨R(MI区)1個、L(M0区)1個、肩甲骨L(P区)1個、中足骨R(CI´区)1個、脛骨L(MI´・N0区)2個、R(A0区)1個、指骨(AI´区)1個、椎骨(MII・M・P・BI・N0区)5個、頭骨(P・N0区)2個。

◆シカ　上顎骨R(区不明)　P　M　M、肩甲骨R(B0・N区)2個、L(N0・MI区)2個、大腿骨L(区不明)1個、中足骨R(B0区)1個。

鹿角　落角(B0・M・区不明)3個、頭骨付き(M・区不明)2個、叉状部(B0・M・区不明2)4個、角尖部(A0・AI´・区不明)3個、角幹部半切(B0・A0～AI´・N04・MN・A0・区不明6・NI3・MI´2・NI´3・B・AII・MII)2　5個。

◆イヌ　上腕骨L(AI´)1個、R(NI・MI´)2個、肩甲骨L(MI´・C0)2個、大腿骨L(BI´)1個、R(BI´)1個、犬歯(MI´2)2本。

◆ウサギ　上腕骨L(A0～AI´・B0)2個、R(B0)1個。

(註　イノシシ・シカの上顎骨・下顎骨の○は萠出を示す。Iは犬歯、mは乳歯、Mは大臼歯を示す。
＿＿＿＿は顎骨の一連を示す。)

②　魚　類

◆マダイ　上顎骨L(B03・M0・MI・B2・区不明3)10個、R(BI2・AI・B03・N0・N・M0・MII)10個、歯骨L(A02・AI´・N0・A0～AI´・B2・区不明3)10個、R(NI・MI2・C0・MII・A0・区不明2)8個。

◆クロダイ　上顎骨L(M0・A0・AII・MI・区不明2)6個、R(N0・M0・C0・AII・N2・B・区不明)8個、歯骨L(N0・BI´)2個、R(N0・NI・区不明2)4個。

◆タイ類　前頭骨(AⅠ・B・N0・NⅡ・区不明5)９個、前頭骨先端が打撃痕に折られたのが多い。後頭骨(AⅠ・BⅠ´・B02・CⅠ´・MⅠ・MⅠ´2・MⅡ・区不明・N0・NⅡ)12個、鰓蓋骨L(N0・MⅡ・区不明)３個、R(B0・M 2)３個、関節骨L(AⅠ2・A02・B02・M02・MⅡ2・N0・NⅠ・B・区不明2)15個、R(B02・M0・MⅡ2・N0・B・AⅡ´・区不明6)15個、椎骨(B02・MⅡ)３個

◆スズキ　歯骨L(MⅠ)１個、R(BⅠ´)１個、鰓蓋骨L(A0・MⅠ・区不明)３個。

◆マグロ　椎骨(N0・NⅠ・区不明) L3.1　幅3.5、L2.1　幅2.6。３個。

◆サメの一種　椎骨(区不明)１個。

◆コチ　歯骨R(N0)１個。

◆ボラ　歯骨R(C0)１個。

③　鳥　類

◆コガモ　上腕骨R(C0・A0・A0～AⅠ´・区不明)４個

◆カモ類　上腕骨R(AⅠ´2・B0・BⅠ・N02・A03)９個、橈骨L(A0・AⅠ・区不明3・CⅠ´)６個、R(A02・B 2・区不明3・B0・AⅠ)９個、烏口骨R(CⅠ´2・MⅡ)３個、脛骨L(A0・N0)２個、R(区不明)１個、肩甲骨R(BⅠ´・AⅣ)２個、中手骨L(BⅠ´)１個。

◆ミズナギドリ　上腕骨L(AⅠ´・B0・B・区不明2)５個、R(MⅡ・NⅠ)２個、橈骨R(B・区不明2)３個、烏口骨R(N0)１個。

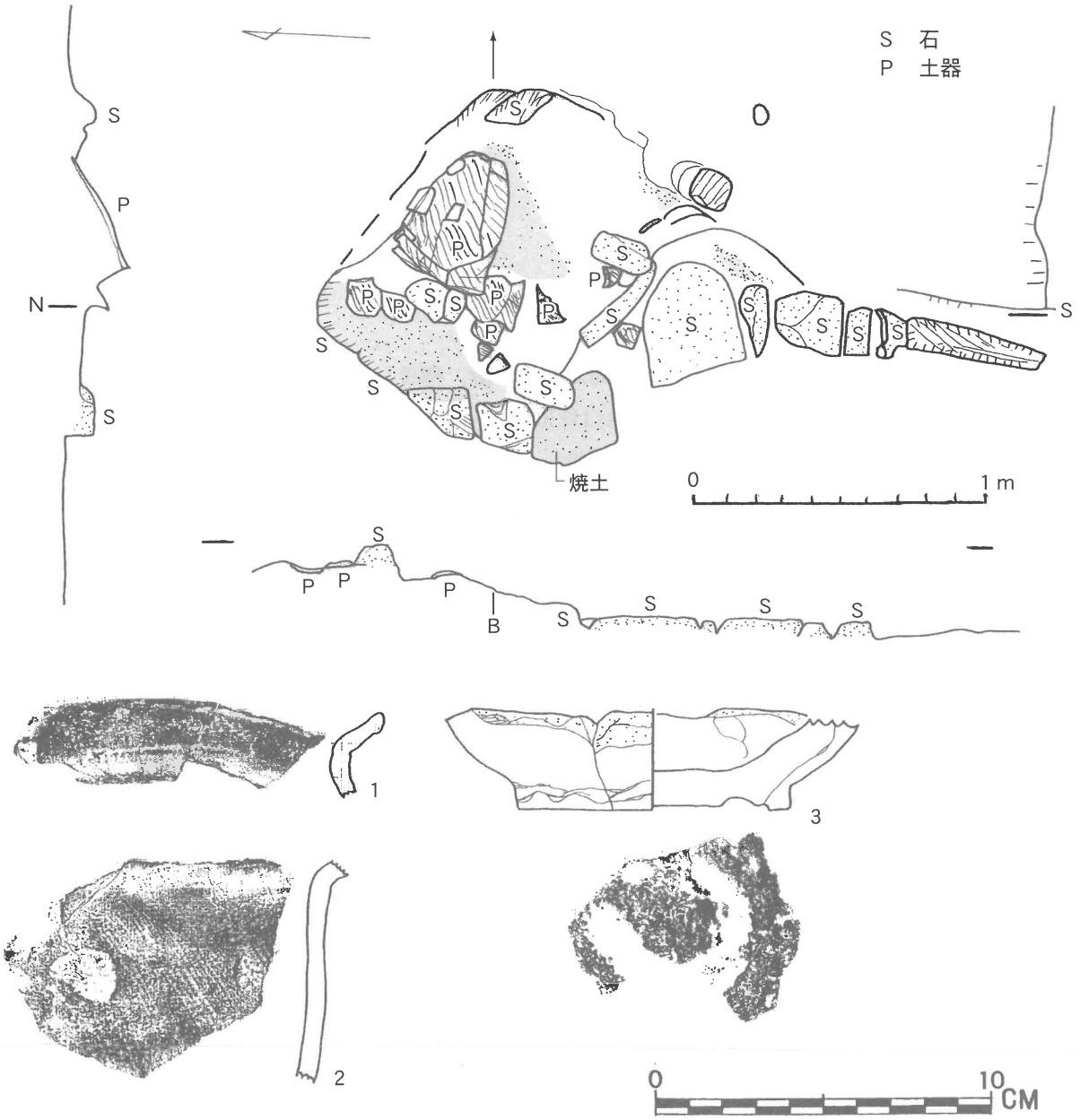
◆キジ？　上腕骨L(B0)１個、R(AⅡ)１個。(小獣かも)

[Ⅶ] 出土遺構について

（1）　Ｐトレンチの炉跡遺構（第39図）

Ａトレンチの南、１段低い畑地に遺構確認の調査区を設定した。凝灰岩で組まれ、周辺に焼土・木炭の層と約40cmの長胴の土器がほぼ東西に、横たわった状態で出土した。Ｐトレンチは貝層の堆積は無く、黄褐色である。西・南に拡張し、南西方向に0.9mの凝灰岩がしきつめられ、上に焼土層が堆積し、南東方向に土器・凝灰岩と粘土によって１mの区画である。ほぼ長方形の区画である。また、南にほぼ１mの凝灰岩列が延び、更に、幅10cmの溝続く。構造上炉跡とすることにためらいがあるが、焼土・木炭の状態から炉跡とした。

長胴の土器は土師器である。図面上では完形品であるが、接合出来る破片が無く、口縁部、口縁部付近の資料を提示した(第39図1～3)。時期は表杉入式と考えられる。



Pトレンチ　炉跡実測図・土器拓影・実測図

第39図

（2） Ｏトレンチの焼土遺構

Ｏトレンチの中央の北壁寄りに検出した。焼土は長さ0.9m、幅0.4mである。トレンチ外に延びているので、全容が不明であるが、楕円状が考えられる。厚さ５cmである。

（3） Ｑトレンチ

調査当時は石組遺構と考えていたが、規則性もなく石組にもならない。図面に石皿の記入がある。

［Ⅷ］ 出土遺物・遺構の考察

（1） 前期縄文土器について

出土数が僅か238点、それも小破片が多い。それに、あまりに中期縄文土器の完形品が多く出土したために惑わされて、出土層位の確認を怠った弊害がある。

総点数の内、口縁部72点、体部162点、底部４点、施文文様の特色は羽状縄文が75％以上を占める。斜行縄文僅か、ループ文、撚糸文、不整撚糸文、組紐文、綾絡文にいたっては５％以下と量的には少ない。

昭和49年(1974)に「縄文時代の食生活」をテーマに生徒と継続研究を実施した。その一部の成果がある(後藤勝彦 2006)。桂島貝塚の北斜面のＢトレンチ(2×2)が前期初頭の遺物は少ないが良好な資料を得た。総数136点、口縁部39点、体部96点、底部１点、施文文様は羽状縄文が72％を超え、斜行縄文、末端ループ文、撚糸文、不整撚糸文、半截竹管文、組紐文である。今回の出土遺物と器形・施文文様の特色、種類等ほとんど同じ様相であり、新発見の南斜面の貝塚と北斜面の貝塚の前期繊維土器の特徴は同じ様相であることが認識された。

古いことで期日を忘れたが山内清男先生の成城大学詣でをしたことがあった。平箱から数片の土器を取り出されて、「室浜式」の講釈をされたことを思い出す。裏に黒・朱書された破片で、鳴瀬町川下り響貝塚出土の組紐文の前期土器に及んだ。「室浜式」は基準資料の公表はなかったが、新たに「上川名式」(加藤孝 1951)が示された。石灰肥料を製造するために採掘され貝塚と確認され、加藤氏が長期間調査されて、上部貝層の蜆貝層から羽状縄文・竹管文・撚糸文・竹管撚糸文施文の土器群、下部貝層の蛤貝層からは縄文条痕文・条痕文施文土器が層位的に確認され、以後、縄文前期初頭の編年は「上川名式・上川名Ⅱ式」に定着する。

昭和41年(1966)から西の浜貝塚、南境貝塚、平田原貝塚、左道貝塚、貝殻塚貝塚、桂島貝塚の調査が実施され、縄文前期初頭の土器群の内容を明らかにした(後藤勝彦 2005・2006a・b・c)。昭和41年の西の浜貝塚は、第３貝層中心に遺物が出土した。施文文様は斜行縄文が約40％で、羽状縄文が約20％弱と本貝塚と異なる。ループ文、組紐文、綾絡文、撚糸文、竹管文は10％以下の少量である(後藤勝彦 2008)。

昭和41～43年にわたって７回の調査を実施した南境貝塚は、破砕貝層中心に繊維土器が出土しているが残念ながら層位区分が出来なかった。施文文様の特徴で区分したが、斜行縄文が60％強と大勢を占め、羽状縄文は11％程度であり、傾向としては西の浜貝塚と同じであり、撚糸文、撚糸圧痕文、ループ文は10％以下の少量である(後藤勝彦 2006)。

昭和43年調査の平田原貝塚は、斜行縄文が50％強であり、羽状縄文、撚糸文、組紐文、綾絡文は８％以下である。調査報告書では、不整撚糸文、葺瓦状撚糸文、櫛歯文、貝殻文も８％以下の少量の出土があり、前者の帰属に悩んでいる。後者は前期の土器であるが、一般的文様特徴は大木２式であり、しかも、櫛歯文、竹管文、貝殻文は関東東部での植房式に比定され、大木２ａ式に当たる。調査では区分することが出来ず、一括と考えられるとしている。特に、組紐文については山内博士の指導があり、「縄

文前期の編年は、室浜貝塚出土の土器を標式とした撚糸文、竹管文、羽状縄文等を特徴とした室浜式から、組紐文を特徴とする土器群を経て、羽状縄文、ループ文を特徴とする大木１式へと考えられる」という。だとすると、前者は前期初頭に近い、大木１式より古い時期と考えられる(後藤勝彦 1969・1988加筆)。

昭和46年(1971)の左道貝塚は、古くから遺跡を探訪した同町在住の堀野宗俊氏が採集した遺物によって、前期初頭の貝塚の存在が知られていた。これを使用した白鳥氏の報文がある(白鳥良一 1978)。また、開発のため七ヶ浜町教育委員会・県文化財保護課の調査もある(七ヶ浜教委 1991)。筆者の小規模の調査では、斜行縄文が約44％を占め、羽状縄文35％強であり、組紐文10％でループ文、撚糸文、沈線文、隆帯文の組成である。七ヶ浜町の調査では羽状縄文が主流であり、斜行縄文、撚糸文、組紐文、竹管文、ループ文、刺突文があり、口縁部文様帯を構成する器形も存在する。一つの丘陵鞍部を削りとった大規模開発であったので遺物も多数である(後藤勝彦 2005)。

昭和47年(1972)の貝殻塚貝塚は斜行縄文47％強、羽状縄文37％強、撚糸文・撚糸圧痕文、ループ文、組紐文、沈線文、刺突文は量が少ない。このように、羽状縄文と斜行縄文施文の序列の変化だけで、撚糸文、撚糸圧痕文、ループ文、組紐文、沈線文、刺突文の施文序列が変わるが、いたって、量が少ないのが共通して、施文文様から縄文前期初頭の土器群上川名(上層)Ⅱ式(加藤孝 1951)に併行すると考えられ、また、左道貝塚の前期初頭の土器群に近似しているとしている(後藤勝彦 2005)。

県内の資料としては、鳴瀬町(東松島市)金山貝塚(鳴瀬教委 1977)、名取市宇賀崎貝塚の出土土器(阿部恵 1980)が羽状縄文を主として、斜行縄文が続いて、組紐文、撚糸文、ループ文、刺突文、竹管文が少量であるが存在する。器形外反し口縁部文様帯を画するのが僅かであるが存在する。また、阿武隈川の上流の角田市土浮貝塚(角田市教委 1994)は、羽状縄文が主流で斜行縄文が従で、ループ文、撚糸(網目)文、竹管文、刺突文が多少存在する。口縁部文様帯区画の土器も存在する。大きな相違は組紐文の欠落である。

形式設定された上川名貝塚は、提示された拓本図４葉だけであり、残念ながら遺物の量的な説明がなく、宮城県古代史(伊東信雄 1957)に「帯状文・羽状縄文が圧倒的に多く」「口縁部には半截竹管や撚糸文によって文様を施したもの」との説明程度である。口縁部文様帯区画を持つものが多く、選別された資料であろう。同じく、上川名貝塚の資料を保管している東北大学の写真資料にも組紐文施文の土器が欠落している。

このように、阿武隈川の支流の白石川の上流の白石市上高野遺跡(後藤勝彦 1984)の第４群～第５群土器は羽状縄文、斜行縄文、ループ文、撚糸文、撚糸圧痕文、組紐回転文からなる組成で上川名Ⅱ式に比定された。組紐文中心に考えると槻木貝塚群から阿武隈川流域の県南東部は地域的に組紐文の欠落した地域と考えられ、地域的特性を考えられる。

しかも、かつて、上川名Ⅱ式から大木１式の間に、口縁部文様帯の消滅した羽状縄文施文群の数形式が介在するとして桂島式、三神峯Ⅲ式を設定(林謙作 1960)した。この事が口縁部文様帯の欠如した、簡素な地文の単調さ、口縁外反の深鉢形が全てということで、上川名Ⅱ式に近似しながらも、そのものと見ることが出来ず後出のものと考えたのである。昭和38・49年の桂島貝塚調査の遺物整理で、僅かながら口縁部文様帯の区画、段落のある遺物の検出、それに撚糸文、組紐文、竹管文施文の土器群も明らかになって、区分する必要がなく上川名Ⅱ式の範疇で捉えることが出来るようになった。

また、仙台市三神峯遺跡の調査(白鳥良一 1974)でも、現段階で桂島式、三神峯Ⅲ式と区分する理由がないとする意見が出されている。福島県相馬郡宮田貝塚(竹島国基 1975)では、上川名Ⅱ式以後に宮田Ⅲ群土器を設定し、大木１式まで新しい観点からの編年試論が提起されている。最新の研究では上川

名貝塚上層出土を一括遺物に程遠いものであることから、宮城、山形両県の資料で５グループに考えて、桂島貝塚土器を３グループ、宇賀崎貝塚下層土器の中でもより下位の層の状況に近いとしている。５グループに三神峯Ⅲ式を挙げ「三神峯第Ⅲ層土器」をメルクマールに乏しく、個別に他の土器と見分けにくい面があり、現状では併行関係等については良く分からないとして、細部では不安定な要素を示している(相原淳一 1990)。

前期初頭の上川名Ⅱ式は、関東での花積下層式の特徴である羊歯状撚糸圧痕文で知られている。南境貝塚、雄勝町大浜貝塚など、太平洋沿岸を八戸市周辺まで広がることが明らかになり、花積下層文化の拡散を知ることが出来る。

（２） 中期縄文土器について

中期の編年型式は、東北南部陸前地方では、「大木７ａ式」・「大木７ｂ式」・「大木８ａ式」・「大木８ｂ式」・「大木９式」・「大木10式」と変遷する（山内清男 2006)。最近になって「大木８ｂ式」と「大木９式」を新旧に区別する考えが示され、また「大木10式」も新旧の区分や４段階、５細分とする考えがある。

昭和41～43年の調査で多数の中期土器群が出土した南境貝塚の整理で問題になったことは、「大木８式」か、それとも「大木９式」なのかと非常に迷う土器群の存在があった。昭和38年と古い調査であるが塩釜市桂島貝塚があり、成城大学詣での時、山内先生からは「下手な土器だね」と評された土器群の存在があり、加藤先生からの講義と「山内清男大木囲貝塚出土編年基準資料写真」にない土器群で混乱があった。桂島貝塚の資料を見た人は誰もが、一時混乱したのである。当時「大木８ｂ式」の細分は及びもつかなかったのである。

桂島貝塚の出土土器は、完全・完形品74個、復元実測図66点、総計140個。内、深鉢形95点、鉢・浅鉢形20点である。その他、拓図に示した破片は多数である。

本貝塚出土の中期縄文土器は、大木８ｂ式で中期中葉である。かつて恩師加藤孝先生から東北大学本部の赤レンガ建物、考古資料陳列室（奥羽史料調査部）で夜遅くまで教えを受けた。その後、山内清男博士から加藤先生が下賜された「大木貝塚出土の基準写真資料」は「加藤君古いほうは要らないね」と念を押されて頂いた写真資料を貸して下さって勉強した。しかし、大木８ｂ式写真資料は破片資料11点であり、大学に寄託された資料９点の解説(須藤他 2006)がある。本貝塚の出土遺物に大木９式の完形品の出土もあり、大木９式に近い遺物も存在し、どうも大木８ｂ式そのものではないと考えられる。

奥羽史料調査部研究員の小野力氏の試掘調査があって、黒川郡誌刊行会の郡内遺跡調査が実施され、大松沢貝殻塚が調査され完形土器20数点をあげた(加藤孝 1956、6・12)。大木囲貝塚の山内清男氏の未発表の遺物を氏の了解を得て成果を示した。山内氏は陸前地方の編年学上縄文文化中期大木８ｂ式として提示されたが未発表であった。遺物群として層序による分類は出来なく、一括の類型であろうとしている。筆者も昭和25年(1950)６月の小野・加藤両氏の試掘調査後、東北大学教育教養部学生諸氏によっての調査があったその参加者の一人である。貝塚は竹林で根が張り調査区設定しにくい場所である。遺物の保存状態は非常に良好であり、また、シジミ貝層から完形品・一括土器が出土したことを記憶している。この調査の土器の実測図を作成した記憶もある。しかし、報告書記載の土器施文文様や昭和47年(1972)調査の大和町勝負沢遺跡の調査(丹羽茂 1982)に引用された大松沢貝塚の実測図を見るかぎり、本貝塚出土の土器は連結曲流渦巻文が主体であり大木８ｂ式そのものと考え難いのである。

東北縦貫道遺跡・勝負沢遺跡の成果が公表された（丹羽　茂 1982)。勝負沢遺跡の中期縄文土器第Ⅱ群土器の分類は、深鉢形５群(A・B・C・D・E)、浅鉢２群(A・B)、壷形２群(A・B)、樽形、把手付き、脚台に

分類し詳述している。かつて昭和25年から26年に調査した大松沢貝塚調査（加藤孝 1956）の大松沢貝塚出土土器と山内が大木囲貝塚調査時の出土土器と、それに勝負沢遺跡の出土土器と器形・文様を比較検討した結果、勝負沢遺跡の第Ⅱ群土器の編年的位置は、最も類似する土器群は、大木囲貝塚・大松沢貝塚から出土している「大木８ｂ式」であるとし、この第Ⅱ群土器には大木囲貝塚・大松沢貝塚に見られないものが含んでいる。「大木８ｂ式」か「大木９式」かという点で、種々の見解が提出された土器群である。又、この種の土器群は上深沢遺跡でも出土し、Ｘグループの土器としたことがあった（宮城県教委1977）。詳細に検討した結果、特に、第Ⅱ群土器と大木囲貝塚・大松沢貝塚との関係について、

Ａ１グループ　大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と共通するもの。非連結もしくは大単位連結文様の土器群。

Ａ２グループ　大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と器形・文様は共通するが、文様表現法に相違するもの。単純文様・地文・無文の土器群。

Ｂ　グループ　大木囲貝塚・大松沢貝塚出土土器と器形・文様帯配置の点で共通するが、文様細部、文様表現法等においてことなるもの。小単位一部連結文様の土器群。

Ｃ　グループ　A1・A2・Ｂグループの土器の他に、これらに含まれない土器。小単位各部連結文様の土器群。

と４群のグループに分類し、A1グループ・大木囲貝塚・大松沢貝塚の土器は、大木８ａ式からの変遷と考え、Ｃグループの土器は大木９式への変遷がたどれる土器群、Ｂグループの土器は両者をつなぐ中間的なものと３段階に区分した。桂島貝塚資料をＢ・Ｃグループとした丹羽氏の説明は非常に抽象的で、図面を見ても何を言わんとしているか理解に苦しむ難解であった。その後東北大学考古学研究室が浅部貝塚の調査(林謙作 1970･1971)をし、研究報告がなされ(水沢教子 1988･管野哲文 2007)、水沢氏は類別型式グループと層位との関係で浅部貝塚の下層のⅣｂ層は大木８ａ式と大木８ｂ式段階、Ⅳ～Ⅲ層は大木８ｂ式段階、Ⅱ層は大木８ｂ式新と大木９式最古式段階と区分した。その後、水沢氏は調査研究を推進(水沢教子 1996･2000･2003･2007)させた。

特に、「中期後葉の渦巻文を有する土器とその周辺」『中期後半の再検討』(2003)は解りやすく参考になった。以下、長いが水沢氏の記述を引用する。

大木８ｂ～９式の渦巻文を有する土器様相とその変遷を、

① **文様表出技法の変化**　大木８ｂ式は隆帯は頂部が広く断面が隅丸台形もしくは台形が多く、沈線もこれに沿って鋭く抉り込まれている。対して大木９式は隆帯の頂部から裾へかけて幅の広い沈線でなぞられることにより、隆帯は器面へより密着して断面隅丸三角形になり、頂部の平坦部が狭くなる。粘土紐の太さ、高さの不定化である。小野力・加藤孝の大先生から教わった記憶がある。

特に、大木８ｂ式の文様表出技能が縄文地文の面積が広いため、縄文→隆帯添付→沈線なぞりが、大木９式の区画化が進むことによって隆帯添付→沈線なぞり→縄文もしくは沈線区画→縄文（充填縄文）という順序で変化した。

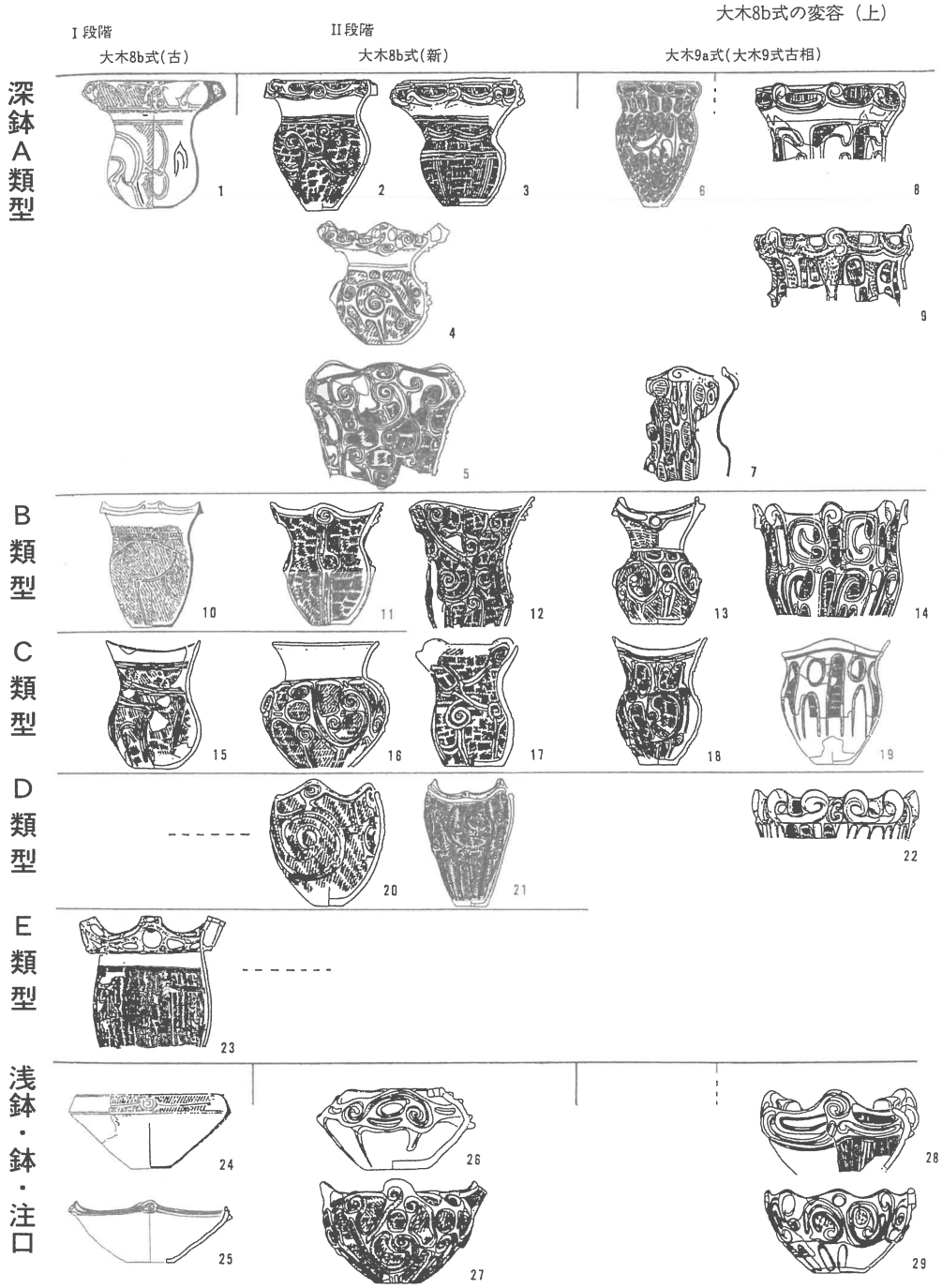
② **文様構成の変化**　大木８ｂ式～９式にかけて文様構成上の大きな変化は、大木８ｂ式固有の規格渦巻文が変化し、曲流する渦巻が流麗さを増し、それぞれが接続したり連結したりする。その結果、剣先状の棘が省略されたり、内部に不規則な区画や不整形の楕円文を持つものが多くなり、次は、蕨手文と楕円区画の組合せによる縦方向の文様構成が成立する。これは非常に漸移的である。

③ **土器組成（類型組成）の変化**　大木８ｂ式の主な器種は深鉢で、浅鉢の割合は大木８ｂ式～10式へと次第に多くなる。深鉢の類型組成は、キャリパー形のＡ類型、口縁部が外反し端部が肥厚して小渦巻文が添付されるＢ類型、口縁部外傾もしくは外反無文のＣ類型が主体で、その他樽型のＤ類型、口縁部に立体的な把手装飾を施すＥ類型で構成される。

各類型とも二（頚部文様帯があれば三）文様帯構成をとることが基本である。しかし、やがて口縁部から底部まで文様が展開する一文様帯構成のものがそれぞれの器形に表われる。これが縦の区画を

生み、大木７式から続いてきた横の区画線によって分割するという志向が縦方向に土器を分割するという方向に転換して大木９式が展開していく。このように、口縁部から胴部まで一連の文様構成をとる土器の出現は大きな変化である。「大木８ｂ式から大木９式」への途切れない連続性が強い。

このように、勝負沢遺跡の報告書では、例えばキャリパー形の深鉢Ａを３類に分割、しかも再細分し、文様の非連結・大単位連結文、小単位一部連結文等の説明が、報告書から読み取ることに苦労した。したがって水沢氏の方法で進めることにした。また、型式段階について県内の遺跡名をあげ、型式の特徴を示し、更に、型式段階と深鉢形Ａ・Ｂ・Ｃ・Ｄ・Ｅ、浅鉢形の大木８ｂから大木９式の変遷模式図を示している。



第40図　大木８ｂ～大木９式変遷模式図（縮尺不同）

1・10・15・24・25 大松沢、 2・3・4・11 中の内Ｂ、 8・14・19・22・28・29 大梁川、 5 勝負沢、 9 上深沢
12・16・17・27 上野、 13 幡谷、 18 山前、 21 緊、 23 大館

大木８ｂ式古段階＝大松沢貝塚・高柳遺跡・（浅部貝塚Ⅳｂ層）ほか
・大木８ａ式からの系譜の定着弱い隆帯、規格渦巻文
＝大松沢貝塚・高柳遺跡・（浅部貝塚Ⅳａ層）勝負沢遺跡ほか
・口縁部の繊細な隆帯渦巻、体部規格渦巻文多し
大木８ｂ式新段階＝里浜貝塚台囲Ｐ32－21区144－150・（浅部貝塚Ⅲ層）・中ノ内Ｂ遺跡・高柳遺跡・（桂島貝塚）・上野遺跡・勝負沢遺跡ほか
・口縁部上下端へ接する渦巻・上部へ隆起する渦巻、体部は大型連結曲流渦巻・規格渦巻文、不整形区画形成、隆帯は隅丸台形や蒲鉾形で沈線は細い。ただし、次の段階との連続性が強く、同一土器で両段階の特徴を有するものが多い。
大木「９式」段階＝里浜貝塚台囲地点Ｐ32－21区134・（浅部貝塚Ⅱ層）・小梁川遺跡・山前遺跡・上野遺跡・高柳遺跡・山口遺跡・勝負沢遺跡ほか
・隆帯渦巻文土器の増加、隅丸三角形隆帯、ヒレ状隆帯の祖形、区画化進行、充填縄文
大木９ａ式（９式古相）段階＝里浜貝塚台囲Ｐ32－21区115－129・梨木囲貝塚・上深沢遺跡・大梁川遺跡ほか
・ヒレ状隆帯、細い摘みだし状隆帯、太い浅い沈線、区画文優先、蕨手状渦巻文、二文様帯構成が優勢、磨消縄文・充填縄文発達
大木９ｂ式（９式新相）段階＝大梁川遺跡・上深沢遺跡・里浜貝塚台囲地点Ｐ32－21区115－129ほか。
・多重沈線文土器、多重とヒレの組み合わせ、磨消縄文・充填縄文、地域的な特色が強まる。
＝大梁川Ⅲａ－ｂ・里浜貝塚台囲地点Ｐ32－21区101・102層・アルファベット文土器の増加。

表２　型式名と県内遺跡と時期の特徴

桂島貝塚の中期縄文土器は、総数140点の実測図・120の多数の拓本図で示した。貝層の堆積は薄く北側のＡⅢで10cmそこそこで、徐々に堆積が厚くなり、南側ＡⅢ′破砕貝混じりの混土貝層で約80cmである。ＡⅢ～ＡⅡ′まで堆積層を見られるが遺物の区分が出来ていない。したがって、一括遺物として取り扱い、グリット毎に扱った。

表２の型式名と県内遺跡と時期の特徴で水沢氏は「大木８ｂ式新段階」に（桂島貝塚）と示して浅部貝塚のⅢ層に比定している。報告書がなかったから（　）を付したものと考えられる。

桂島貝塚の出土土器は、最初に、深鉢Ａ・Ｂ・Ｃ類型では口縁部文様帯、頚部文様帯、胴部文様帯が揃い、三文様帯をほとんど形成、口縁部文様に連結なしの横位渦巻文、連結横位渦巻文、上下突起状渦巻文に剣先状の棘の施文、胴部文様も大単位の渦巻、小単位の規格文と剣先状の棘を施文した、古い大木８ｂ式の様相を持つ土器群（第10図 1･2･3･5、第11図 6･7･10、第12図 14、第14図 32･33、第15図 1、第16図 1･3、第17図14、第18図 1･5、第19図 1･2、第21図 10、第24図 31、第27図1･5、第30図 9、第32図 1･6）である。浅鉢にも非連結渦巻文に剣先状の棘を施文した注口土器（第17図 14）がある。

第10図３は、勝負沢遺跡の第Ⅱ群土器について検討遺跡として、桂島貝塚の出土土器12点が取り上げられた土器の一つ（勝負沢遺跡第113図 3）である。説明に文様が単純であるため深鉢Ａ１・２・３類か明らかにしなかったが古い要素のＡグループとした個体である。このように、大松沢貝塚、勝負沢遺跡Ａグループ、浅部貝塚Ⅳａ～Ⅲａ層の時期に近い遺物の存在がある。

次の段階は、深鉢Ａ類型の口縁部に横位連結渦巻文・上下突起渦巻文と長方形等の区画を配し、頚部無文で多重沈線区画、胴部文様に連結曲流渦巻文、不整の区画があり、∩字形区画の初現的な出現が萌芽する。たまに、口縁部に装飾突起を１個持つものがある（第10図 4、第16図 2･4、第20図1･5、第21図 11･

12・13、第32図 3)。また、深鉢Ｂ・Ｃ類型でも頚部下の胴部文様に連結曲流渦巻文の施文が多く、Ａ類型の器形に緩やかに内湾するカリパー形（Ａ２）が多いことが注目される。この段階は、大木８ｂ式と考えると混乱をした土器群で、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器のＢグループ土器、浅部貝塚Ⅲ以上Ⅱ層出土土器群、里浜貝塚の台囲地区の成果として示された144～152層周辺の土器群(鳴瀬教委・奥松島縄文村歴史資料館 1999)、写真資料で不明な面があるが併行すると考えられる。

次の段階は、前述したが文様構成の変化で、横から縦方向の文様構成が成立する。一つは単純な文様が縦方向に沈線(第13図 22、第19図 7、第25図 28、第26図 48)・隆帯の施文(第14図 31、第19図 15、第26図 31)があり、二つは、頚部区画下に縦方向の隆帯を中心に連結渦巻文、不整区画、∩字形の区画の出現で、隆帯断面が太い沈線でなぞるため三角形状を呈する（第27図 4、第28図 11・13)ものがある。三つは口縁部から底部まで文様が展開する一文様帯構成のものの出現である。口径11.8cm、器高16.2cmの小形深鉢形で、口縁部内湾し区画４個の渦巻文を配し、頚部でやや締まり口縁から連結曲流渦巻文を施文し、円形、∩字形と充填文のもの(第27図 2)、同じく、口縁部内湾、外反の深鉢形に一文様帯構成のもの(第28図 16、第30図拓図 6・7・16・17・18、第34図拓図 8・10・13)がある。残念ながら口縁部外反したＮＩ区出土の一文様帯構成の土器が所在不明になっている。(写真あり70頁下段の写真)

この段階の一は、大松沢貝塚の図示された中に類例があり、深鉢Ｃ2a1・2b・Ｄ1a(勝負沢遺跡第112図 5、第113図 5)である。文様が共通するが、文様表現技法の相違するものが含まれており、縦位下垂線文の文様が単純であり極めて限定された文様で識別が困難として、Ａ２グループに区分している。

二は縦方向の下垂文中心に連結曲流渦巻文下垂し、不整区画、∩字形区画の出現のものは、三の一文様帯構成し連結曲流渦巻文施文し円文、∩字形区画するグループと同一と考えられ、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器の深鉢Ｂ1b類・Ｄ3類であり、Ｃグループにあたる。また浅部貝塚Ⅲ層上Ⅱ層出土のＤ類型に相当し、大木８ｂ新式から大木９式古に併行するものである。

最終段階は、口縁部波状でやや内湾する深鉢形、文様縦方向の円文、∩字文の区画に縄文充填され、周囲は擦消しである(第23図 29、第30図拓図 19・26、第34図下段拓図 6、上段P区拓図 3～7)。僅か11点の資料である。山内写真資料の大木９式であり、近年では上深沢遺跡(1978)、山前遺跡(1976)、浅部貝塚Ｉｅ層、大梁川遺跡Ⅲ層(1988)、南境貝塚７トレ16・17層(2004)、８トレ12～14層(2005)に類例がある。大木９ｂ式に相当する。

以上のように、一括遺物として取り扱ったが、文様表出技法、文様構成の変化、土器組成の変化によって、

第１段階　三文様帯の形成と口縁部に横位渦文と剣先状の棘、胴部にも大単位の渦巻、小単位の規格文類似と剣先状の棘の施文した、大木８ｂ式の様相を持つ土器群、大松沢貝塚、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器Ａグループ、浅部貝塚Ⅳａ～Ⅲａ層に相当する。

第２段階　三文様帯を形成するが口縁部に横位連結渦巻文と長方形等の区画を配し、胴部に連結曲流渦巻文と不整の区画の出現があり、口縁部に装飾突起を持つもの、緩やかに内湾するカリパー形（Ａ２）が多い。Ｂ・Ｃ類型も胴部に連結曲流渦巻文が多い。この段階グループで混乱を引き起こした問題の土器群であり、桂島貝塚出土の主体の土器群である。勝負沢遺跡第Ⅱ群土器Ｂグループ、浅部貝塚Ⅲ～Ⅱ層土器群、里浜貝塚台囲地区の144～152層周辺の土器群で、近年の研究により大木８ｂ新式に相当する。

第３段階　文様構成の横から縦の文様構成が成立し、①単純な文様が縦に沈線、隆帯の施文、②頚部下に縦方向の隆帯の連結渦巻文、不整区画、∩字形区画の出現、隆帯断面三角形状を呈する。

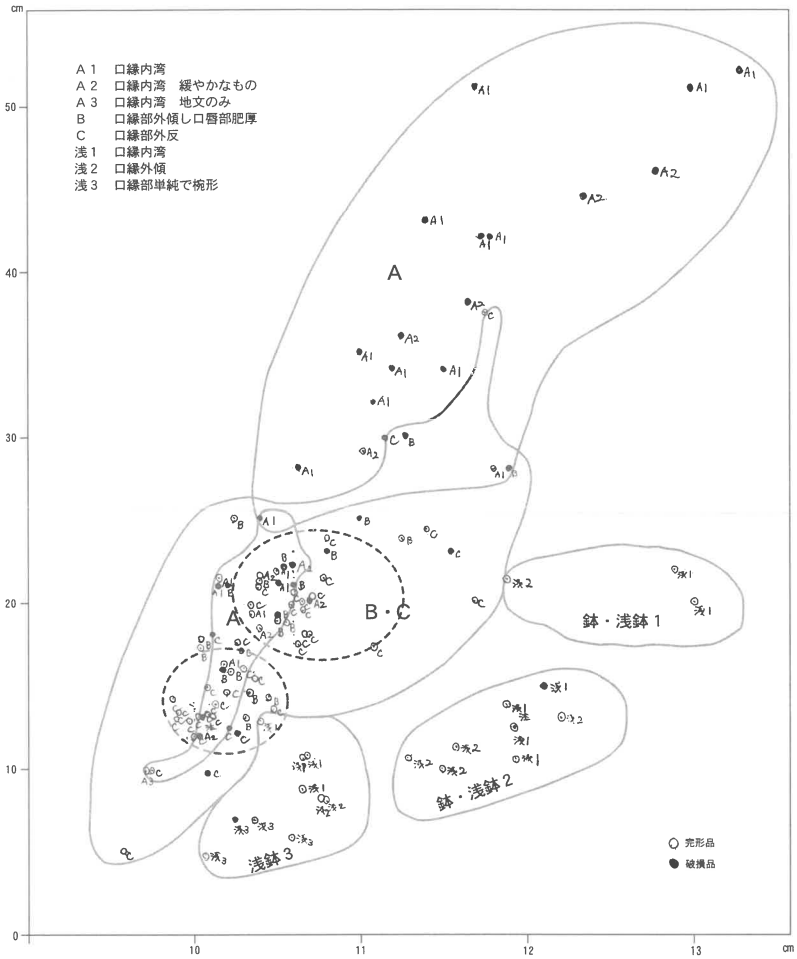
③一文様帯構成のものの出現である。①②は大松沢貝塚に類例があり、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器のＡ２グループに区分している。③は勝負沢遺跡第Ⅱ群土器のＣグループ、浅部貝塚Ⅲ層～Ⅱ層出土のＤ類型に併行し、大木８ｂ新式から大木９式古に併行する。南境貝塚16層に類例があり大木９ａ式に併行すると考えられる。

第４段階　文様縦円文、∩字形文の区画に縄文充填され、周囲は擦消しである。僅かな出土であるが、大木９式であるが新しい資料として、上深沢遺跡、山前遺跡、浅部貝塚Ｉｅ層、大梁川遺跡Ⅲ層、南境貝塚７トレ16・17層、８トレ12～14層に類例があり、大木９ｂ式に併行する。

４段階の時期変遷を確認した。大木９式遺物は貝塚縁の西側のグリットＮ区、ＡグリットのＡＩ´ＭＩ´区の堆積層の厚い地区と一段低い貝層の無いグリットＰ区の周辺に集中していることも確認された。

調査中に話題になったことに、Ａ・Ｂ・Ｍ・Ｎ区のⅡ・Ｉ・０区に完形品の出土が多く、特に、Ｉ・０に90個以上の完形品が集中した。大形土器・中形土器・小形土器の組合せセットがあって、これに鉢浅鉢形土器の組合せがあるという話題であった。第41図に器高・口径と器形類型の関係図で示した。調査時点で大形土器(35cm以上)、中形土器(25cm内外)、小形土器(18cm内外)と考えていた。計測値(推定値)で見ると、カリパー形のＡ類型が大形と中形・小形グループに分かれ、大形グループは器高30～50cm、口径15～42cmの範囲にあり、しかも器形類型はＡ１・２に限定され、完形品は１個だけで他は胴部以下の破損品であり、貝塚の堆積層が薄いためだと考えられる。中・小形グループは器高25～10cm、口径７～16cmであり13点存在し、小形土器は３点であり、最小はＭⅡ出土のＡ３の土器である。Ｂ・Ｃ類型はほとんど中・小形土器の器高25cm以下であり、20cm前後と15cm前後に纏まりを持つ、調査中に特にＢ・Ｃ類型土器に小形土器の存在を示していたのである。中形土器に小形土器が納められていた事実がある。鉢・浅鉢は器高と口径によって、３グループに纏まる。グラフでの［鉢・浅鉢１］は口縁部内湾する器形であり大形の鉢形であり、口径30cm以上である。［鉢・浅鉢２］は口縁部外傾し肥厚、突起や連結渦巻文施文と口縁部内湾し、口径20～30cm前後のものである。［浅鉢３］は口縁部やや内湾する器形と口縁部外傾し肥厚する器形、口縁部単純で椀形器形で、さらに小形の土器群である。口径10～20cmの範囲であり、椀形はさらに口径10～15cmである。

器高・口径と器形類型の関係図



第41図

残念なことにA・B・C類型に鉢・浅鉢形がどう組み合うかは明らかにすることが出来なかった。しかし、鉢・浅鉢土器の口縁部内湾した器形に、横位連結渦巻文、不整形・方形の区画、矢羽根状の刺突文の施文土器群(第13図 27、第24図 34・35・36、第29図 20・21、第33図 15)は、第２～３段階の大木８ｂ新式から大木９式古い時期に併行すると考えられる。

また、鉢・浅鉢形の口縁部内湾の器形で、非連結渦巻文に剣先状の棘の施文の(第17図14) 鉢形注口土器はやや古い文様構成であり、大木８ｂ式に併行するかも知れない。

鉢・浅鉢形の出土は貝塚西側のM・Nグリットに多く、しかも、同じグリットと貝塚の離れた南のP区に、第３～４段階の新しい土器の出土が多いことが関係があって、小形の浅鉢がやや多くなることが想定される。

（３） その他の出土遺物について

① 石製品

剥片石器と棒状石器に区分されるが、出土の量は多くはない。石鏃は無茎（凹基）３点、同じく浦戸二小の採集遺物に凹基の２点がある。有茎（凸基）１点で計６点であり、このような無茎が多く、有茎が少ない状態は県内遺蹟と共通することである(後藤勝彦 1986)。特に、有茎（凸基）は

後期以降に多くなるのである。石匙も縦型石匙が２点、浦戸二小の採集品に３点の計５点、横型石匙１点の出土があり、前期縄文土器の出土もあり、古い時期に縦型が多いということから時期の区分が出来なかった。

棒状石器として石斧が４点、打製石器が１点、凹石２点、小判状丸石がある。浦戸二小の採集品に小判状丸石２点、多数の凹を持った大形凹石がある。特に凹石は両面に凹部を持つもので、古くは堅果類を凹部にて砕いたものとしているが、最近凹部を持たない浅い打痕を表裏に密集するものの発見もあり、凹石と同じ機能をするものが明らかになり、硬度の高い、硬い石の利用から音響を出す用具とも考えられるようになった。特殊ものとして、凝灰岩に切込、擦痕様の切り込みをした石器があるが、用途は明らかでない。浦戸二小の採集品にも大形方形状の凝灰岩に長い切り込み痕のある石があるが用途不明である。特に、第38図23は凝灰岩周囲に切り込み、擦痕で整形し、上部に突起を造り出し、表面に突起近くから舟底状の凹みがあり、下部が広めの形、背面は舟底状に整形した石器である。上部突起ある部分と、下部が離れた別地点から出土したものである。石偶と考えた事もあったが用途不明である。

軽石製品の不明石器、凝灰岩を利用した垂飾品が出土している。

②　骨角製品

耳飾り残欠、魚の種名不明の鰓蓋骨の上部に貫通孔をあけて垂飾品としたものと、完形品が少ないが刺突具がある。浦戸二小の採集品に小形無鈎釣針が２点出土しており、貴重な資料である。特に、縄文中期になると沿岸漁撈が活発になり、頑丈な釣針と鈎と返りを持った精巧な利器の工夫がなされている一方、湾内近くの波浪厳しい岩礁性海岸でも刺突・釣漁法がなされた。マダイ、クロダイやスズキ漁が実施されていたことを示す。

③　貝製品

装身具としての貝輪（腕輪）サルボウ製である。浦戸二小の採集品にイタボカキ製の５点も貝輪がある。

④　自然遺物について

緊急調査という性格からと、完形品が多数出土し土器の収納に追われた調査としては、34種という遺物数の収納は幸いの事である。前期初頭と中期中葉の貝塚である。中期の貝塚としては少ない、特に、魚類のマダイ・クロダイの遺存骨が多い。時期が異なるが桂島貝塚の北斜面のＢトレの調査で、狭い調査区からタイ類の脊椎骨が1000点以上の検出があって、積極的なタイ漁と頭骨が少なく脊椎骨だけが驚異的な埋存率から、タイ類の解体処理の変化があって食法の変化を示すのではないかと推論した（後藤勝彦 2006）。また、七ヶ浜町左道貝塚でもタイ類の遺存骨が桂島ほどでないが多かった。これは、松島湾内の海底環境の岩礁底に集まるタイ類の生態を熟知しての活動である。

自然遺物の調査は調査者の注目によって、大きいものを採集していた。貝層のブロックサンプリングがない不備な調査でもあった。

⑤　出土遺構について

⑴　Ｐトレンチの炉跡遺構は、凝灰岩と粘土によって長方形に区画され、焼土層、木炭の堆積された遺構である。時期は貝塚と違い奈良末から平安時代のもの、土器形式では表杉入式である。

⑵　Ｏトレンチの焼土遺構は、残念ながら時期は不明である。

[Ⅸ] まとめ

昭和38年浦戸二小の移転新築に関わる緊急調査によって、新しい成果として、

(1) 桂島貝塚は今まで北側斜面のみと考えていたが、あらたに南側の緩斜面にほぼ南北15m、東西10mの小貝塚を発見したことによって、北側、東側、南側にわたる一種の環状貝塚を形成することになった。

(2) 前期の土器は層下の黒土層周辺の層位と考えられるが、貝塚全体から出土している。僅かな238点で小破片が多い。施文文様は羽状縄文が75％を超え、以下斜行縄文、ループ文、撚糸文、不整撚糸文、組紐文、綾絡文と続く。昭和49年の北斜面のＢトレンチの調査で、同じように羽状縄文施文が72％を超え、斜行縄文、末端ループ文、撚糸文、不整撚糸文、半截竹管文、組紐文の施文の土器群が検出されている。口縁部文様帯の区分を持った土器群の存在もあって、前期初頭上川名Ⅱ式に比定した。

かつて、東北大学に保管されていた桂島貝塚の土器群の器形・文様を詳細に検討して「桂島式」が提唱された。それは撚糸竹管文等の口縁部文様帯の欠如から、上川名Ⅱ式から分離独立させ、大木１式への移行をスムーズにする考えであった。

また、桂島貝塚の前期土器を大木１式として、貝層下の黒土層から出土する(藤沼他 1989)とした『宮城県の貝塚』の説明もある。

昭和38・49年の調査の結果、口縁部文様帯が少なく簡素化であるが、撚糸文、組紐文、半截竹管文の存在から前期初頭でも大木１式より古く、上川名Ⅱ式に近い時期と考えられる。

(3) 中期縄文土器は、「大木８ｂ式土器はなんぞや」と悩んだ。大松沢貝塚や勝負沢遺跡の土器群と比較して大木８ｂ式そのものと考え難いものである。勝負沢遺跡の第Ⅱ群土器のＢ・Ｃグループの土器群がやや新しい土器群であることを確認し、それに浅部貝塚の整理報告をされた水沢教子氏の学部卒業論文の「"大木８ｂ式"の成立と変容」に辿り着き、不勉強を嘆いた。桂島貝塚の中期の土器に「大木８ｂ式と大木９式の中間式の完形品」の説明もあった。氏の類型分類の方法で整理した結果、文様表出技法、文様構成の変化、土器組成の変化によって、数段階の土器群の存在が明らかになった。

①第１段階　三文様帯の形成と大木８ｂ式の様相を持つ土器群、大松沢貝塚、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器Ａグループ、浅部貝塚Ⅳａ～Ⅲａ層併行。

②第２段階　三文様帯の形成、口縁部に横位連結渦巻文と長方形等の区画、胴部に連結曲流渦巻文と不整の区画の出現、桂島貝塚の主体土器群であり、大木８ｂ新式である。勝負沢遺跡第Ⅱ群土器Ｂグループ、浅部貝塚Ⅲ～Ⅱ層土器群、里浜貝塚台囲地区144～152層周辺の土器群に併行する。

③第３段階　文様構成横から縦の変化、単純な沈線・隆帯の縦施文、縦方向の隆帯等の連結渦巻文、不整区画、∩字形区画の出現、一文様帯構成の出現。大松沢貝塚に類例があり、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器Ａ２グループに区分、勝負沢遺跡第Ⅱ群土器Ｃグループ、浅部貝塚Ⅲ～Ⅱ層出土のＤ類型で、大木８ｂ新式から大木９式古に併行し、南境貝塚16層に類例があり大木９ａ式に併行すると考えられる。

④第４段階　文様縦円文、∩字形文の区画、縄文充填され、周囲磨消される。大木９ｂ式であり、上深沢遺跡、山前遺跡、浅部貝塚Ｉｅ層、大梁川遺跡Ⅲ層、南境貝塚７トレ16・17層、８トレ12～14層に類例がある。

以上のように４段階、大木８ｂ式と大木８ｂ新式の区分がなされ、桂島貝塚の主体の土器は僅かな

大木８ｂ式と主体は大木８ｂ新式である。少ないが大木９式も細分され、大木９ａ式と大木９ｂ式である。

⑷　ＡⅡ～Ａ０、ＢⅡ～ＢＩ、Ｍ・ＮⅡ～Ｍ・ＮＩ中心に完形品・一括土器が密集して出土した状態は、調査時は住居遺構ではないかと考えていた。Ａグリットで密集域南北８ｍ、東西Ｎ～Ｂグリット8.5mの範囲であるが、残念ながら西側だけが立ち上がり貝層が切れるが、東側はやや貝層が切れるが確認されなかった。北側は段落が確認できたが、南側は徐々に堆積層が厚くなるだけで壁面の状態を確認できず住居遺構とすることができなかった。

土器の大形・中形・小形の器高の区分を考えさせられた。Ａ類型は大形と中・小形に分かれ、ほぼ同数であるが、Ｂ・Ｃ類型は４個体が大形で、中形と小形は夫々密集域があり15cm前後の小形土器数が際立って多いのも事実である。

このように、小形土器の完全品の出土は、廃棄場としての貝塚、小形土器だから壊れなかったという理由以外に、特別の理由を考えなければならない。

⑸　石製品、骨角製品、貝製品は多いほうではない。特殊な用途不明の石器があり、今後類例を検証しなければならない。

⑹　魚類・獣類・鳥類・両棲類の自然遺物は、堆積層が薄かった少ないほうである。自然遺物の精密な調査が出来なかった。生業の在り方、狩猟、漁撈、採集の技術的解明に欠かせないタイ類遺存骨が多かったことでの、釣りか刺突か網かを考え、魚種による海底環境、魚習性等も考えなければならない。その意味で残念である。

最後に昭和38年４月に塩釜市立塩釜女子高校に赴任した年、浦戸二小の移転新築の計画に起こった桂島貝塚の調査であり、したがって45年前の調査物である。筆者は塩釜女子高校史編纂の特命の役職で、担任、部活顧問を外され、編纂室を構え、資料収集の仕事に従事し、多少遺物整理が出来たが、編纂事業で体調崩し、入退院を繰り返すことになる。昭和41年から開発による大規模貝塚の調査が継続され、我が屋敷が遺物保管場所となり、やがて、学校に30坪程の倉庫が県によって建てられて、我が屋の遺物保管庫は解消する。また、生徒の要望で社会部を作り生徒共に考古学の調査を実施することになって遺物が集まり、昭和50年には要請されて県教委文化財保護課に転属し、文化財行政に携わることになって、自由な調査研究が出来なくなる。また、学校に戻るが学校管理者として重責で自由なし。やっと平成２年に定年退職して本格的な遺物整理に入るのである。大規模貝塚の整理、生徒共に調査した遺物の整理が着々進行して、やっと、桂島貝塚の本格的整理に入ったのは平成18年６月から、公民館地下室に籠り実測図・拓本図の作成、この間松島町の整理室での史跡西の浜貝塚の遺物整理と掛け持ちである。やっと、平成19年10月になってワープロによる原稿が終末をむかえ、やがて報告書の刊行となる。この１年有余の公民館地下室での整理で突然脳血栓となり、整理の中断もある。今も多少後遺症もある。今後は健康に留意し、残された遺物の整理を成し遂げ、満願の日をむかえたい。

註１　古くは石巻の毛利・遠藤両氏により、本貝塚の遺物を収集している。

引用文献・参考文献

1930　斎藤　忠「松島湾諸島における貝塚調査概報(上・下)」　『東北文化研究』2-4・5

1951　加藤　孝「宮城県上川名貝塚の研究-東北地方縄文文化の編年学的研究(1)」『宮城学院女子大学研究論集』 1

1953　佐藤達夫「宮城県桂島貝塚の調査」『地域社会研究』5・6号

1956　加藤　孝「陸前国大松沢貝殻塚の研究-東北地方縄文式文化の編年学的研究(5)-(その1・2)」『宮城学院研究論

文集』9・10
1957　伊東信雄「古代史」『宮城県史 1』
1960　加藤　孝「考古学上より見たる塩釜市周辺の遺跡」『塩釜市史 Ⅲ、別編 Ⅰ』
林　謙作「宮城県桂島貝塚出土の前期縄文土器群」『考古学雑誌』47-4
1967・68・69・70　興野義一『大木式土器理解のために(Ⅰ～Ⅵ)』考古学ジャーナル13・16・18・24・32・48
1968　芳賀良光「宮城県宮戸島貝塚梨木囲遺跡の研究」『仙台湾周辺の考古学的研究』
1969　塩釜女子高社会部「宮城県桃生郡矢本町平田原貝塚発掘調査報告」『貝輪』 5
1970　林 謙作「宮城県浅部貝塚出土のシカ・イノシシ遺体」『物質文化』 15
1971　同 「宮城・浅部貝塚出土の動物遺体-分析と考察-」『物質文化』 17
1974　白鳥良一「仙台市三神峯遺跡の調査」『東北の歴史・考古論集』 宝文堂
1975　竹島国基「福島県相馬郡小高町 宮田貝塚-昭和48年7月発掘調査報告-」小高町教育委員会
1976　宮城県教委『山前遺跡』 小牛田町教育委員会
1977　鳴瀬町教委『亀岡遺跡・金山貝塚』 鳴瀬町文化財調査報告第1集
1978　宮城県教委「上深沢遺跡」『東北自動車道調査報告書 1』 宮城県文化財調査報告書第52集
白鳥良一「宮城県七ヶ浜町左道貝塚の縄文前期の土器について」『宮城史学』 第6号
1980　阿部　恵「宇賀崎貝塚」『金剛寺貝塚・宇賀崎貝塚・宇賀崎1号墳他』 宮城県文化財調査報告書第67集
1981　藤沼他『宮城県の貝塚』 東北歴史資料館資料集25 東北歴史資料館
丹羽　茂「大木式土器」『縄文文化の研究』 4
1982　丹羽　茂「勝負沢遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告書 Ⅵ』 宮城県文化財調査報告書 第83集
1984　後藤勝彦「宮城県白石市上高野遺跡・保原平遺跡発掘調査報告」『白石市史 特別史』 3-(2)
1985　須藤　隆「東北地方における縄文集落の研究」『東北大学考古学研究報告』 1
1986　後藤勝彦「宮城県石巻市南境貝塚出土の石鏃について-石器の編年学的研究-」『宮城史学』第11号
1987　真山　悟・伊藤　裕「七ヶ宿ダム関係遺跡報告書Ⅲ　小梁川遺跡」『宮城県文化財調査報告書』122集
1988　水沢教子「"大木8b式"の成立と変容(宮城県浅部貝塚出土土器群の分析を中心に)」 学部卒業論文要旨
丹羽　茂「大木式土器」『縄文土器大観』
相原淳一他「Ⅳ大梁川・小梁川遺跡」『七ケ宿ダム関連発掘調査報告書』 宮城県文化財調査報告書第126集
1989　結城慎一「仙台市文化財調査報告書第124集　上野遺跡」仙台市教育委員会
1990　相原淳一「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年-仙台湾周辺地区の分層発掘資料を中心に-」『考古学雑誌76-1』
1991　七ヶ浜町教委『左道貝塚』 七ヶ浜町文化財調査報告書第7集
1994　角田市教委『土浮貝塚』 角田市文化財調査報告書第13集
佐藤好一「高柳遺跡」『仙台市文化財調査報告書190』仙台市教育委員会
1996　水沢教子「大木8b式の変容(上)」―東北、越後、そして信濃へ―『長野県の考古学』
興野義一「山内清男先生供与の大木式土器写真セットについて」『画竜点睛』 山内先生没後25年記念編集刊行会
1999　鳴瀬町教委・奥松島縄文村歴史資料館『里浜貝塚-平成10年度発掘調査概報-』 鳴瀬町文化財調査報告書第5集
2000　水沢教子「中期後葉の土器」『上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』 24　長野埋蔵文化財センター発掘調査報告書第51集
2003　同 「中期後葉の渦巻文を有する土器とその周辺」『第16回縄文セミナー中期後半の検討会-記録集-』 縄文セミナーの会
2004　後藤勝彦「南境貝塚調査の層位的成果 Ⅰ-7トレンチの場合-」 『宮城考古学』第6号
2005　同「南境貝塚調査の層位的成果 Ⅱ-8トレンチの場合-」 『宮城史学』第24号
同「宮城県宮城郡七ヶ浜町左道貝塚の調査-陸前地方の前期縄文土器の編年学的研究(1)-」『宮城考古学』第7号
2006a　同 「南境貝塚妙見地区の調査-陸前地方早期末前期初頭の編年学的研究-」『宮城考古学』第8号
b　同 「宮城県塩釜市桂島貝塚の調査-陸前地方前期縄文土器の編年学的研究(3)-」『宮城史学』第25号
c　同 「宮城県河北町南境貝塚久保地区出土の早期末前期初頭の土器-陸前地方早期末前期初頭の編年学的研究(2)-」『秋田考古学』第50号

須藤他　『東北大学文学研究科考古学陳列所蔵大木囲貝塚出土基準資料-山内清男編年基準資料-。』　東北大学陳列館
2007　管野哲文「東北地方中期縄文文化における地域性の研究-宮城県登米市浅部貝塚出土土器の分析を中心として-」『考古学談叢』
水沢教子「大木式土器情報の移動と検証-把手付突起の広域比較から-」『考古学談叢』　須藤先生退官記念論文集刊行会
大村　裕「山内清男の大木諸型式（７ｂ式～８ｂ式）について」―関東地方の土器編年との関わりから―　下総考古学20
村本周三「岩手県における中期大木式土器研究の動向」―岩手県史所収「山内清男提供」大木式土器写真資料と県内における基準資料の変化
建石　徹・工藤幸尚「馬目順一の大木式諸型式（７ｂ式～８ｂ式）について」―主要三部作の読解を通じて―
大内千年「丹羽茂の大木諸型式（７ｂ式～８ｂ式）について」―（丹羽1981）・（丹羽ほか1982）
安達香織「宮城県における丹羽茂論文の引用動向―縄文時代中期大木７ｂ式～８ｂ式土器について―
井出浩正「西村正衛の大木諸型式」―特に大木７ｂ式～８ｂ式に注目して―
小林謙一「塚本師也氏の大木式研究について―塚本師也1990「北関東・南東北における中期前半の土器様相」「古代」第89号を中心に―
大村　裕「塚本師也『北関東・南東北における中期前半の土器様相』「古代」89号（1990）で用いられた資料の層位的検討」　以上　下総考古学20
2008　後藤勝彦『西の浜貝塚』松島町文化財調査報告書第１集　松島町教育委員会
後藤勝彦『貝殻塚貝塚』松島町文化財調査報告書第２集　松島町教育委員会
後藤勝彦『西の浜貝塚Ｒ・Ｓトレンチ(昭和34・35年)』松島町文化財調査報告書第３集　松島町教育委員会
2009　後藤勝彦『西の浜貝塚Ｎトレンチ(昭和34年)』松島町文化財調査報告書第４集　松島町教育委員会
丹羽　茂「楠本コレクションの調査　縄文土器編」『東北歴史博物館研究紀要』10、東北歴史博物館
相原淳一「東北地方における縄文時代中期末葉から後期後葉に関する土器編年」

謝　辞

報告書作成にあたって、土器の補修に山田ケイ、図版作成に兼平宏子の両氏の協力があり、県博物館の相原淳一、縄文館菅原弘樹の両氏には、小生の不勉強のため、文献の提供に御協力いただいたことに感謝申し上げます。

平成19年(2007)10月14日脱稿

◀ ＡＩ区の遺物出土状況
（西から）

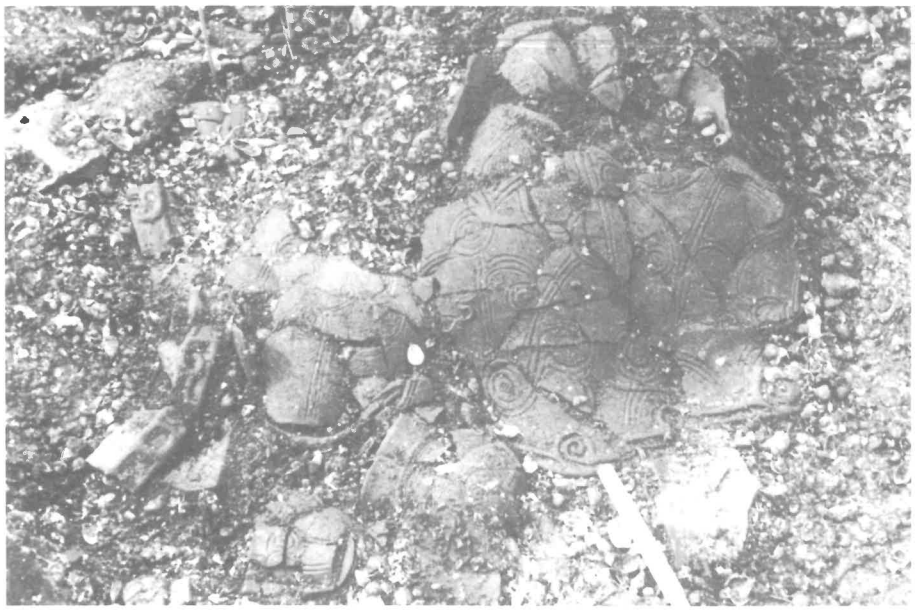
ＡＩ南東壁付近の遺物 ▶
出土状況（拡大）

◀ ＢＩ区の遺物出土状況

図版 1

◀ ＢⅠ区の注口浅鉢土器
浅１の出土状況

M・N区遺物出土状況 ▶
(MⅠ, MⅡ, NⅠ, NⅡ)



◀ ＮⅠ区の遺物出土。
大形・中形・小形土器
の密集　一文様の土器

図版２

▶ Ａ区深鉢
（Ａ類型１）
第11図10
高さ28.6cm、
口径30.0cm、
直径 8.0cm、
底無文

◀ ＡＩ区深鉢
（Ａ類型１）
第10図４
高さ19.5cm
(実測21.3cm)、
口径15.0cm、
直径 8.0cm、
底無文

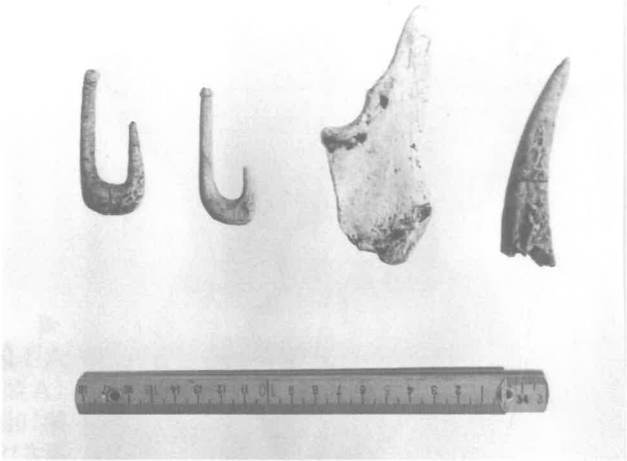
◀ ＮＩ区出土
（Ａ類型２）
第27図２
高さ16.2cm、
口径11.8cm、
底径 5.2cm、
底無文

▲ ＭⅡ区深鉢（Ｃ類型） 第23図26
高さ37.5cm、口径27.5cm、底径9.5cm、底無文

◀ ＭＩ区深鉢（Ｃ類型）
第22図21
高さ19.8cm、口径13.4cm、
底径 6.3cm、底無文

図版３

▲ ＮＩ区　深鉢（Ｃ類型）
第28図11
高さ24.3cm、口径24.3cm、
底径 7.8cm、底無文



▲ 浦戸二小採集遺物　無鈎の釣針・刺突具

▶
ＮＩ区　浅鉢１　第29図20
高さ12.5cm、口径29.25cm、
底径 9.4cm、底無文

ＮⅡ区　深鉢　▶
（Ｂ類型）
第31図37
高さ12.5cm、
口径12.2cm、
底径 6.5cm、底無文

◀
ＮＩ区　深鉢
（Ｂ類型）第27図５
高さ15.0cm、口径12.4cm、
底径 7.2cm、底無文

図版４

表３　実測図で表示した遺物の観察表

	出土地区	類　型	器高 cm (現高)	口径 cm	底径 cm	特　　徴
第10図　1	ＡＩ区	Ａ２類型	18.4	16.9	― 無文	完形品、文様帯三、口縁部上上端沈線施文、小さい装飾突起１個、頚部無文、沈線区画　体部規格渦巻沈線文、棘状文、LR
第10図　2	A区	Ａ１類型	(16.0)	16.3	― ―	体部欠損、文様帯三、口縁部渦巻突起から下渦巻突起をつなぐ、隆帯断面台形、頚部無文帯、下に沈線区画沈線カギ状、RL
第10図　3	ＡＩ区	Ａ１類型	21.4	11.5	7.0 無文上底	完形品、文様帯三、口縁部渦巻文連結、頚部無文帯、２本の隆帯区画、体部隆帯規格渦巻文４本下垂、棘状文
第10図　4	ＡＩ区	Ａ２類型	21.3	15.0	8.0 無文上底	完形品、文様帯三、装飾突起１個、口縁部上下端渦巻、方形区画の連結、頚部刺突帯区画、体部沈線渦巻連結文、LR
第10図　5	Ａ０区	Ａ１類	(16.0)	15.2	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁に小突起１個、渦巻と方形区画の連結、頚部無文下沈線区画、体部沈線大形連結渦巻文、LR
第11図　6	A区	Ａ１類	(22.0)	27.0	― ―	下部欠損（図上復元）、文様帯三、口縁部上下の渦巻と方形区画の連結、複節ＬＲ、棘状文、頚部無文下区画文、体部隆帯下垂、棘状文、ＲＬ
第11図　7	ＡＩ区	Ａ１類	(12.6)	(20.0)	― ―	下部欠損（図上復元）、文様帯三、口縁部方形区画文、渦巻の連絡、棘状文あり、頚部無文下沈線区画、体部、沈線渦巻文、ＲＬ
第11図　8	A区	Ａ２類	(10.0)	(36.3)	― ―	下部欠損（図上復元）、文様帯三、口縁部渦巻、方形区画の連結、ＬＲ、頚部無文下不明
第11図　9	ＡＩ区	Ａ２類	(27.8)	(35.1)	― ―	下部欠損（図上復元）、文様帯三、口縁部渦巻、方形区画の連結、ＬＲ、頚部無文下沈線区画、体部渦巻規格文下垂、隆帯断面、カマボコ形、ＲＬ
第11図　10	A区	Ａ１類	28.6	30.0	8.0 ―	完形品、文様帯三、口縁渦巻装飾突起４個、突起間に渦巻突起で連結、頚部無文ヨコ整形、下隆帯区画、体部隆帯太い沈線でなぞり、断面カマボコ形、規格のカギ文、ワラビ状の文様、LR
第12図　11	ＡⅢ区	Ｂ類	23.8	22.5	8.4 無文上底	完形品、文様帯三、口縁渦巻小突起溝で連結、頚部無文下縄文区画、体部、LR
第12図　12	ＡＩ区	Ｂ類	(12.0)	17.0	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁渦巻小突起溝で連結、頚部無文下３沈線で区画、体部規格沈線文、LR
第12図　13	ＡＩ区	Ｂ類	(12.4)	15.0	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁渦巻小突起溝で連結、頚部無文、下３沈線で区画、体部規格渦巻沈線文、棘状文、LR
第12図　14	ＡＩ区	Ｂ類	(18.0)	18.6	― ―	完形品、文様帯三、口縁渦巻小突起溝で連結、頚部無文、下３沈線で区画、体部規格渦巻沈線文、棘状文、ＬＲ
第12図　15	ＡⅡ区	Ｂ類	13.0	13.1	6.4 ―	下部欠損、文様帯三、口縁渦巻施文突起、その間渦巻沈線で連結、頚部無文下２本沈線で区画、体部、ＬＲ
第12図　16	ＡＩ区	Ｂ類	21.8	15.5	8.0 無文	完形品、文様帯三、口縁渦巻突起４個、頚部無文下沈線区画、体部　連結渦巻文、ＬＲ
第12図　17	Ａ０区	Ｃ類	20.0	16.5	6.5 無文上底	完全品、文様帯三、口縁無文、頚部沈線、体部　大形連結渦巻文、ＬＲ
第12図　18	Ａ０区	Ｃ類	15.5	13.4	5.6 無文上底	完形品、文様帯三、口縁無文、頚部沈線、体部　連結渦巻文、ＬＲ
第12図　19	ＡＩ区	Ｃ類	17.5	16.1	6.5 無文上底	完形品、文様帯三、口縁無文、頚部３沈線区画、体部　大形連結渦巻文、ＬＲ
第12図　20	ＡＩ区	Ｃ類	12.8	9.7	6.5 無文上底	完形品、文様帯三、口縁無文波状４個、タテヨコ整形、頚部・体部無文
第12図　21	Ａ０区	Ｃ類	13.8	11.3	6.6 無文	完形品、文様帯三、口縁でややふくらみ　口縁無文、小突起４個、ヨコ擦痕、体部以下タテ擦痕
第13図　22	ＡＩ区	Ｃ類	18.7～20.6	16.0	6.0 無文上底	完形品、文様帯三、口縁無文波状２個、頚部３本沈線区画、体部区画から３本沈線４組下垂、ＬＲ
第13図　23	Ａ０区	不明	(16.8)	不明（胴9.8）	5.2 無文	上部欠、文様帯不明、体部　大形連結渦巻文、区画帯あり、ＬＲ

第13図	24	A０区	C類	(5.5)	10.8	— —	図上復元、下部欠損、口端無文、体部　ＬＲ、コップ形
第13図	25	AⅡ区	浅１	8.7～8.1	16.3	6.0 無文	完全品、口縁部土面に一条の沈線文、体部無文なめらか、ヨコナナメ整形
第13図	26	A０区	浅１	10.8～10.1	16.0	8.2 無文	完形品、口縁部土面に一条の沈線文、体部無文なめらか、ヨコナナメ整形、二文様帯
第13図	27	AＩ区	浅１	(20.0)	38.8	(推11.7) —	下部欠損、口縁渦巻、方形区画の連結、ヤバネ状の施文、ヨコナナメ整形、二文様帯
第13図	28	AＩ区	浅２	10.7	23.8	7.8 無文	完形品、口縁に渦巻突起４個、突起間に沈線の渦巻連結、体部無文、ヨコナナメ整形、二文様帯
第13図	29	AＩ区	浅２	8.0	18.0	7.8 無文	完形品、口縁に渦巻突起４個、突起間に沈線の渦巻連結、体部無文、ヨコ整形、二文様帯
第14図	30	AＩ区	不明	(27.3)	不明	10.25 無文上底	上部欠損、体部　渦巻連結文、底部近く無文ヨコＬＲか
第14図	31	AＩ区	不明	(15.0)	不明	7.2 無文上底	上部欠損、体部　渦巻を持つ隆帯５本下垂、隆帯断面カマボコ形
第14図	32	A区	不明	(11.3)	不明	7.3 無文	上部欠損、体部規格連結渦巻文、カギ状文、ＬＲ
第14図	33	A区	不明	(9.5)	不明	6.3 無文上底	上部欠損、体部規格渦巻連結、棘状文、ＲＬ
第14図	34	AＩ区	不明	(15.9)	不明	5.0 無文上底	上部欠損、体部複節、ＬＲ
第14図	35	A区	不明	(34.5)	不明	13.5 無文	上部欠損、体部ＬＲ擦痕状
第14図	36	A０区	不明	(14.7)	不明	14.0 無文	上部欠損、体部無節縄文、ＬＲ
第16図	1	BＩ区	A１類	(14.0)	18.6	— —	下部欠損、文様帯三、口縁部隆帯上下端の渦巻文の連結、棘状文、頚部無文下沈線区画、体部ＲＬ、沈線文
第16図	2	BⅡ区	A１類	(8.9)	11.3	— —	下部欠損、文様帯三、口縁部装飾突起１個、渦巻、区画文の連結、頚部無文下沈線３本で区画、体部大形渦巻文、ＲＬ
第16図	3	BＩ区	A類	(12.0)	(22.3～16.9)	— —	上・下部欠損、文様帯三、口縁部不明、頚部無文下３沈線で区画、体部連結渦巻文、カギ状文、ＲＬ
第16図	4	BＩ区	A１類	(22.5)	24.0	— —	下部欠損、文様帯三、口縁部装飾突起１個、上・下渦巻、区画文の連結ＲＬ、頚部無文、下ＬＲ下に３沈線区画、体部連結渦巻文、ＬＲ
第16図	5	B０区	A２類	(13.5)	17.0	— —	下部欠損、文様帯三、口縁部円文とヤバネ状区画文の連結、頚部無文、体部、ＬＲ
第16図	6	B０区	A１類？	(23.5)	42.3	— —	下部欠損、文様帯三、口縁部渦巻・円文・区画文の連結ＲＬ、頚部無文下沈線区画、体部連結渦巻、隆帯渦巻、ＬＲ
第16図	7	BＩ区	A１類	(12.4)	27.4	— —	下部欠損、文様帯三、口縁部上下端の連結渦巻、隆帯断面台形か、カマボコ形、複節ＬＲ、頚部無文下隆帯区画、体部沈線複節ＲＬ
第17図	8	B０区	A類	(27.0)	不明	12.9 無文	上部欠損、文様帯三？、頚部無文下沈線で区画、体部規格渦巻文が下垂、ＬＲ
第17図	9	BＩ区	B類	18.8	15.6	8.0 無文	完形品、文様帯三、口縁渦巻突起４個、頚部無文下３沈線区画、体部大形の連結渦巻文、ＬＲ
第17図	10	B０区	B類	(14.0)	11.8	— —	下部欠損、文様帯三、口縁円文突起４個、頚部無文ヨコ整形、体部ＬＲ
第17図	11	B０区	B類	(13.5)	14.5	— —	下部欠損、文様帯三、口縁円文突起４個、頚部無文ヨコ整形、体部ＬＲ

第17図	12	ＢＩ区	B類	17.6	10.4	7.0 無文	完形品、文様帯三、口縁円文突起４個、頚部無文ヨコ整形、体部、ＬＲ
第17図	13	Ｂ０・ ＣＩ´区	浅2類	12.0	32.0	6.5 無文	完形品、文様帯二、口縁渦巻突起４個、突起間に小渦巻で連結、頚部不明ヨコ整形、補修孔あり、体部ヨコ整形、無文
第17図	14	ＢＩ区	浅1類	13.9～13.0	28.8	7.7 無文	完形品、文様帯二、口縁上・下の渦巻文連結棘状文、隆帯断面台形、頚部なし、体部無文ヨコ整形、注口土器
第17図	15	Ｂ０区	浅3類	4.8	10.7	6.2 無文	完形品、文様帯なし、小形浅鉢、椀形、口縁から体部ヨコ整形、無文
第18図	1	Ｃ０区	A1類	(22.4)	22.0～17.4	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁上部渦巻隆帯上向きの突起、棘状文・区画のヨコ連絡、ＲＬ、頚部無文ヨコ整形下３沈線区画、体部規格渦巻連結文、ＲＬ
第18図	2	Ｃ０区	A2類	(5.5)	10.8	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁方形区画渦巻連結、頚部無文下２沈線で区画、体部規格渦巻の連結、ＬＲ
第18図	3	Ｃ０区	A類	(9.0)	(46.0)	― ―	図上復元、文様帯三？、口縁渦巻・矢ばね状区画文上下の連結、頚部無文以下不明
第18図	4	ＣＩ´区	A2類	29.0	20.2	7.5 無文	完形品、文様帯三、口縁隆帯渦巻・区画帯連結、隆帯深く太い、断面カマボコ形、頚部無文下３沈線区画、体部連結曲流渦巻文、ＲＬ
第18図	5	Ｃ０区	Ｂ類	17.8	10.5	5.0 無文	完形品、文様帯三、口縁渦巻突起４個、太い沈線で連結、この間凹穴、頚部狭く無文、ヨコ整形、体部大形規格渦巻文、棘状文、ＬＲ
第18図	6	Ｃ０区	浅2類	(5.0)	17.9	― ―	下部欠損、文様帯二、口縁連結渦巻突起４個、頚部なし、体部無文ヨコ整形
第20図	1	ＭＩ´区	A2類	(16.0)	26.5	― ―	下部欠損、文様帯二、口縁上・下連結渦巻・方形区画の連結、沈線深く隆帯断面カマボコ形、ＲＬ、頚部無文下３沈線区画、体部規格大形渦巻下垂、ＲＬ
第20図	2	ＭⅡ区	A3類	9.7	6.8	4.1 無文	完形品、文様帯二、口縁から体部ＬＲ縄文
第20図	3	Ｍ０区	不明	(15.0)	13.8	7.6 無文上底	上部欠損、体部文様のみ、体部やや張り出し、連結渦巻文下垂、ＬＲ
第20図	4	ＭＩ区	不明	(9.6)	不明	6.5 無文	上部欠損、体部文様のみ、太い沈線での連結渦巻文下垂、ＬＲ
第20図	5	ＭＩ区	（A類？）	(23.6)	16.2	16.2 無文上底	上部欠損、文様帯三？、頚部沈線区画、体部連結曲流渦巻文下垂、ＲＬ
第20図	7	ＭⅡ区	Ｂ類	15.8	12.2	6.5 無文	完全品、文様帯三、口縁円形渦巻突起４個この間沈線連結、頚部狭い、体部やや張り出し、ＬＲ
第20図	8	ＭⅡ区	Ｃ類	14.5	12.0	6.5 無文上底	完形品、文様帯二、口縁小突起４個、頚部区分なし、体部やや張り出し、ＬＲ
第20図	9	ＭⅡ区	Ｃ類	13.0	9.1	5.3 無文	完形品、コップ型、口縁から体部タテ整形、無文
第21図	10	ＭⅡ区	A1類	(16.2)	16.0	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁装飾突起１個、上下の渦巻突起に方形区画の連結、頚部無文下３沈線区画、体部規格渦巻文、棘状文あり、ＬＲ
第21図	11	ＭＩ´区	A2類	(18.6)	25.0	― ―	下部欠損、文様帯二、口縁隆帯渦巻方形区画の連結、頚部狭く、無文下３沈線区画、体部規格渦巻沈線、ＬＲ
第21図	12	ＭＩ区	A1類	(11.0)	20.8	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁隆帯渦巻文・方形区画の連結、ＲＬ、頚部無文ヨコ整形下沈線区画、体部不明
第21図	13	Ｍ０区	A2類	(25.0)	35.0	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁渦巻文・刺突文の方形区画の連結、頚部無文下部ＬＲ下沈線区画、体部規格渦巻文の下垂、ＬＲ
第21図	14	ＭⅡ区	A2類	21.3	14.5	7.6 無文	完全品、文様帯三、口縁装飾突起１個、連結渦巻文、やや方形区画の連結ＬＲ、頚部狭い無文、区画なく、ＬＲ施文で体部へ、胴部張り出し
第22図	15	ＭＩ´区	Ｃ類	(26.8)	21.5	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁無文波状5～6個、頚部2本沈線区画、体部やや脹り出し、連結渦巻文下垂、ＬＲ

第22図	16	ＭＩ区	Ｃ類	17.0	12.9	5.3 無文	完形品、文様帯三、口縁無文小波状３個、ヨコ整形、頚部２本沈線区画、体部やや張り出し、連結渦巻文下垂、ＬＲ
第22図	17	Ｍ０区	Ｃ類	23.8	18.0	9.2 無文	完形品、文様帯三、口縁無文ヨコ整形、下ＬＲ、頚部沈線2本区画、体部連結渦巻文、ＬＲ
第22図	18	ＭＩ区	Ｃ類	14.2	8.7	6.2 無文	完全品、口縁外反し頚部でしまり体部でやや張り出す、口縁無文、頚部から体部へＬＲ
第22図	19	ＭＩ区	Ｃ類	17.3	11.6	6.3 無文	完形品、口縁外反し頚部でややしまり体部で張り出す、口縁無文ヨコ整形、体部ＬＲ
第22図	20	ＭⅡ区	Ｃ類	14.9	10.8	6.0 無文	完形品、波状４個口縁外反し頚部でややしまり体部で張り出す、口縁から体部無文、タテ整形
第22図	21	ＭＩ区	Ｃ類	19.8	13.4	6.3 無文	完形品、文様帯三、口縁無文波状２個整形良好、頚部２本沈線区画、体部やや張り出し、規格渦巻文連結文、∩文の区画出現、ＲＬ
第22図	22	ＭＩ´区	A類？	(6.4)	12.0	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁隆帯渦巻文、方形区画の連結、頚部無文体部ＬＲ
第22図	23	ＭＩ区	Ｂ類	18.8	15.0	7.2 無文上底	完形品、文様帯三、口縁渦巻突起４個、頚部無文ヨコ整形、体部、ＬＲ
第22図	24	Ｍ０区	Ｂ類	(10.0)	24.9	― ―	下部欠損、文様帯二、口縁渦巻突起４個連結、体部規格渦巻文下垂、ＬＲ
第22図	25	ＭＩ区	A2類	21.2	14.0	6.0 無文	完形品、文様帯三、口縁隆帯渦巻・方形区画の連結、ＬＲ、頚部太い沈線と隆帯区画、体部ＬＲ
第23図	26	ＭⅡ区	Ｃ類	37.5	27.5	9.5 無文上底	完形品、文様帯三、口縁無文ヨコ整形、大形波状４個この間に小波状４個、頚部２沈線区画、体部連結曲流渦巻文、不整区画文、ＲＬ
第23図	27	ＭＩ区	Ｃ類	18.0	17.0	5.8 無文	完形品、文様帯三、口縁大波状３個、ＬＲ無節縄文、頚部２沈線区画、体部やや張り出し、区画から連結曲流渦巻文下垂、区画文、ＬＲ無節
第23図	28	ＭⅡ区	Ｃ類	13.5	14.9	5.6 無文上底	完形品、文様帯三、口縁小突起４個？、無文ヨコ整形、頚部２沈線で区画、体部規格渦巻文、ＬＲ
第23図	29	ＭＩ´区	Ｃ類	17.3	20.8	7.2 無文	完形品、文様帯二、口縁小突起４個？、内湾、口縁部無文ヨコ整形、体部∩文、∩文の規格文、タテ施文、ＬＲ、無文ヨコ整形、頚部３沈線で区画、体部規格渦巻文、ＬＲ
第23図	30	ＭＩ区	Ｃ類	21.0	14.0	10.3 無文上底	完形品、文様帯三、口縁平縁、無文ヨコ整形、頚部無文、体部でやや張り出しタテＬＲ
第24図	31	ＭＩ区	Ｃ類	19.4～17.6	15.7	6.75 無文	完形品、文様帯三、口縁波状２個、無文ヨコ整形、頚部狭く沈線２本で区画、体部下部でやや張り出し、規格渦巻文が下垂、棘状文あり、複節ＲＬ
第24図	32	ＭⅡ区	Ｃ類	(12.3)	11.1	― ―	下部欠損、文様帯三、口縁平縁、ヨコ整形無文、頚部刺突の沈線区画、体部で張り出し連結規格渦巻文、ＬＲ
第24図	33	ＭＩ´区	浅3類	6.7	13.7	6.5 無文	完形品、口縁平、小突起１個、口縁から体部へＲＬ
第24図	34	Ｍ０区	浅1類	26.0	40.2	19.2 無文	完形品、口縁平、円文、渦巻・方形区画文ヨコ連結、頚部に隆帯の区画あり断面台形状、体部無文ヨコ整形
第24図	35	ＭＩ区	浅1類	10.6	16.8	6.4 無文	完形品、口縁平、円文、矢ばね状沈線区画帯の連結、頚部隆帯区画、体部上ヨコ、下タテ整形無文
第24図	36	ＭＩ´区	浅1類	(8.7)	(推31.0)	― ―	図上復元、文様帯二、曲線隆帯渦巻の連結、矢ばね状刺突区画、口縁下に隆帯区画、断面カマボコ形、体部ＲＬ・ＬＲの縄文
第24図	37	ＭＩ´区	不明	(13.8)	(胴径14.3)	4.6 無文	上部欠損、頚部剥離、体部張り出し、ＬＲ
第24図	38	ＭⅡ区	不明	(20.8)	不明	21.0 無文	上部欠損、体部渦巻沈線文３本下垂、ＬＲ
第24図	39	ＭⅡ区	不明	(15.2)	不明	6.3 無文	上部欠損、体部ＬＲ

第27図	1	ＮＩ区	A1類	19.2	13.5	6.8 無文	完形品、文様帯三、口縁部平、隆帯渦巻・方形区画の連結、ＲＬ、頚部無文ヨコ整形、下３沈線区画、体部連結渦巻文下垂、棘状文、ＬＲ
第27図	2	ＮＩ区	A2類	16.2	11.8	5.2 無文	完全品、文様帯二、口縁渦巻状突起４個、この間渦巻をともなう太い沈線、体部円文・不整区画と連結曲流渦巻文が下垂、不整区画、∩文がある、ＬＲ
第27図	3	ＮＩ区	A2類	(17.0)	(胴径17.2)	7.2 無文	上部欠損、文様帯二？、頚部に隆帯の区画、体部胴張り、隆帯の大形連結渦巻文、不整区画、∩文の下垂、隆帯の側面をなぞる沈線、太く広い、断面三角形状、ＲＬ
第27図	4	ＮＩ区	B・C類	(15.0)	(胴径13.2)	7.2 無文	上部欠損、体部やや張り出す、連結渦巻文、不整区画と∩文がある、ＲＬ
第27図	5	ＮＩ区	B類	15.0	12.4	7.3 無文上底風	完全品、文様帯三、口縁渦巻の小突起３個、この間沈線沈線で連結、頚部無文ヨコ整形、下３沈線で区画、体部規格渦巻文が下垂、棘状文、ＬＲ
第27図	6	ＮＩ区	B類	14.6	13.4	7.0 無文	完形品、文様帯二、口縁連続凹部による波状突起４個この間沈線連結、頚部から体部に鋸歯状の沈線文
第27図	7	ＮＩ区	C類	16.4	12.7	7.2 無文上底	完形品、文様帯三、口縁無文ヨコ整形、頚部刺突をもつ沈線２本で区画、体部連結曲流渦巻文・不整区画、ＬＲ
第27図	8	ＮＩ区	C類	9.8	7.5	6.2 無文	完形品、文様帯三、口縁上部に貫通孔、下無文、頚部２沈線で区画、体部やや張り出し連結渦巻文が下垂、ＬＲ、小形コップ型
第27図	9	ＮＩ区	C類	12.4	12.2	9.0 無文	完形品、口縁ヨコ整形、頚部から体部無文タテ擦痕、コップ状形
第27図	10	ＮＩ区	C類	13.4	9.0	4.6 無文	完全品、コップ状型、文様帯区分なし、口縁から体部無文タテ整形
第28図	11	ＮＩ区	B類	24.3	24.3	7.8 無文上底	完形品、文様帯二、口縁渦巻刺突方形区画で連結、体部隆帯による連結曲流渦巻文と不整区画、∩形区画が展開する、ＬＲ
第28図	12	ＮⅡ区	C類	(12.0)	(胴径10.5)	6.0 無文	完形品、文様帯三、注口土器、口縁無文ヨコ整形、頚部３沈線で区画、下部注口部、体部連結曲流渦巻文が下垂、ＬＲ
第28図	13	ＮＩ区	C類	21.5～19.5	17.8	6.3 無文	完形品、文様帯三、口縁波状２個、口縁無文ナナメ整形、頚部狭く刺突をもつ２沈線で区画、体部隆帯による連結曲流渦巻文の下垂、不整区画∩文も存在、ＬＲ
第28図	14	Ｎ０区	C類	20.0	17.0	8.0 無文上底	完形品、文様帯三、口縁平、無文ヨコ整形、頚部２沈線で区画、体部連結規格の渦巻文が下垂、ＬＲ
第28図	15	ＮＩ区	C類	12.9	10.2	4.9 無文	完形品、文様帯三、波状口縁２個、無文ヨコ整形、頚部２沈線で区画、体部連結渦巻文が下垂、下部に∩文あり、ＬＲ
第28図	16	ＮＩ区	C類	19.8	13.9	6.4 無文	完形品、文様帯二、口縁部無文ヨコ整形、口縁近くから連結渦巻文が下垂、ＬＲ
第29図	17	ＮＩ区	C類	20.0	26.9 (胴径14.8)	6.0 無文	完形品、文様帯三、口縁波状２個、無文ヨコ整形、頚部沈線２本で区画、体部張り出し連結規格大形渦巻文下垂・下部に不整区画と∩状区画あり、ＲＬ
第29図	18	ＮＩ区	C類	23.0	25.4	— —	下部欠損、文様帯二、口縁波状４個、無文ヨコ整形、体部ＬＲ
第29図	19	ＮＩ区	C類	38.0	(推口径27.4)	— —	上部、下部欠損、文様帯三、口縁無文ヨコ整形、頚部３沈線で区画、体部張り出し、区画から連結曲流渦巻文、円形、不整区画、∩形区画あり、ＬＲ
第29図	20	ＮＩ区	浅1類	12.5	29.25	9.4 無文	完全品、文様帯二、口縁円文、連結渦巻文、不整区画の連結、ＲＬ・ＬＲ、隆帯のなぞり深く太い断面三角状、体部、ＬＲ
第29図	21	ＮＩ区	浅1類	12.8	14.0	8.0 無文	完形品、文様帯二、口縁平、隆帯渦巻・不整区画の横連結、隆帯断面カマボコ形、三角形状、体部無文ヨコ・タテ整形
第29図	22	ＮＩ区	浅1類	10.5	(推口径29.3)	10.5 無文上底	完形品、文様帯三、口縁平、無文ヨコ整形、頚部太い隆帯で区画、体部無文ヨコ整形
第31図	37	区不明	C類	(6.0)	12.5	6.5 無文	完形品、椀形、口縁平、口縁から体部無文ヨコ整形
第31図	38	区不明	C類	8.7	8.7	6.9 無文上底	完全品、コップ形、小形、体部無文、タテ整形

第31図	39	ＮＩ区	不明	(27.5)	(胴径26.6)	11.0 無文上底	上部欠損、体部で張り出し、ＬＲ
第31図	40	ＣＩ区	不明	(24.5)	不明	13.4 無文上底	上部欠損、体部で張り出し、ＬＲ
第32図	1	区不明	Ａ1類	(24.7)	25.2	― ―	完形品、文様帯二、口縁湾曲、上下の隆帯の渦巻文連結、棘状文、ＲＬ、頚部ヨコ整形で不明瞭、下体部タテ整形
第32図	2	区不明	Ｄ類	(8.9)	(推口径21.0)	― ―	図上復元、口縁平、円形の装飾突起、隆帯棘状文あり、ＬＲ
第32図	3	浦二小 （Ｃ区）	Ａ2類	(18.0)	37.3	― ―	下部欠損、口縁平、隆帯渦巻文不整区画のヨコ連結、下部隆帯があって区分、下ヨコ整形、体部ＬＲ
第32図	4	区不明	Ａ類？	(13.7)	(胴径11.9)	7.0 無文	上部欠損、上部沈線区画、大形渦巻文連結が下垂、不整区画、∩文がある、ＲＬ
第32図	5	区不明	Ｂ類	(15.8)	16.0	― ―	下部欠損、文様帯三、渦巻突起４個、沈線連結、頚部無文ヨコ整形、無文下に複節ＬＲ、２沈線
第32図	6	区不明	Ｂ類	(25.2)	20.0	5.0 無文	下部欠損、文様帯三、渦巻突起４個、沈線連結、頚部無文ヨコ整形、頚部無文下に２沈線区画、体部張り出し、規格沈線下垂ＬＲ
第32図	7	浦二小 （Ｃ区）	Ｂ類	(16.0)	22.0	― ―	下部欠損、文様帯三、渦巻突起３個、間に小渦巻の小突起が太い広い沈線で結ぶ、頚部無文タテ整形、区画なく、ＲＬ
第32図	8	区不明	Ｂ類	12.9	10.6	6.0 無文	完形品、文様帯三?、口縁渦巻突起４個、口縁無文ヨコ整形、頚部区分なし、体部ＬＲ
第33図	9	区不明	Ｃ類	(41.1)	(胴径25.2)	― ―	上下部欠損、文様帯三、頚部無文ヨコ整形、ＬＲ、下３沈線区画、体部張り出し、連結規格渦巻文下垂、ＬＲ
第33図	10	区不明	Ｃ類	11.9	10.0	5.5 無文	完形品、口縁小突起４個、口端から体部無文ヨコ・タテ整形、下部ＲＬ
第33図	11	区不明	Ｃ類	13.0	11.9	6.2 無文	完形品、突起２個、口縁無文ヨコ整形、区画なく、ＬＲ
第33図	12	区不明	Ｂ類	18.3	16.8	5.4 無文	完形品、渦巻突起４個、沈線で連結、突起から連結渦巻き文下垂、無文
第33図	13	区不明	浅2類	10.0	24.9	8.7 無文	完全品、小突起４個、口縁から体部無文ヨコ、凹凸あり
第33図	14	区不明	浅3類	5.9	15.3	5.0 無文	完全品、椀形、全体無文ヨコ
第33図	15	浦二小 （Ｃ区）	浅1類	21.3	28.8	11.6 無文	完形品、文様帯二、口縁渦巻、円文方形区画のヨコ連結、体部タテ整形
第33図	16	浦二小 （Ｃ区）	浅2類	11.5	25.7	6.5 無文上底	完形品、文様帯二、口縁渦巻突起間広い深い沈線で連結、体部無文ヨコ整形
第33図	17	浦二小 （Ｃ区）	不明	(19.0)	(19.0)	14.0 無文	上部欠損、体部下半に連結渦巻文下垂、下部に∩文がある、ＬＲ
図なし		Ｍ１区	Ｃ類？	(23.0)	(23.8)	― ―	下部欠損、口縁平、土面に沈線、口端に推定４個の隆帯の渦巻、下部に２沈線区画し下に曲流連結渦巻文が下垂、体部ＬＲ、内面上部ヨコ、下部タテ整形

報告書抄録

ふりがな	かつらしまかいづか
書名	桂島貝塚
副書名	
シリーズ名	塩竈市文化財調査報告書
シリーズ番号	第８集
編著者名	後藤勝彦
編集機関	塩竈市教育委員会
所在地	〒985-0052　塩竈市本町８番１号　　TEL 022-362-7744
発行年月日	西暦2010年３月31日

所収遺跡名（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
桂島貝塚（かつらしまかいづか）	宮城県（みやぎけん） 塩竈市（しおがまし） 浦戸桂島（うらとかつらしま） 字台（あざだい）	042030	11005	38度 20分 5秒	141度 5分 42秒	１次調査 19631019～20 19631026～27 ２次調査 19631118～20	130㎡	浦戸第二小学校校舎新築に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桂島貝塚	貝塚	縄文前期・中期・平安	石組遺構 炉跡	縄文土器、土師器、石鏃、石匙、石斧、骨角器（銛、針、釣針、耳飾）、貝製品（貝輪、貝刃）	

要約

塩竈市史跡の昭和38年10月19～20日、26～27日、11月18～20日の計７日間の浦戸第二小学校の新築と運動場の造成に伴う事前調査の報告書である。南斜面の新しい貝塚は東西約10m、南北約15mの小さな貝塚であり、既存の北斜面の貝塚との関係で一種の環状貝塚を構成する。

A、B、C、D、M、Nのグリット調査を実施し、ABC、MNとAⅢ～Ⅱ´、MNⅡ～Ⅰ´中心に多数の縄文中期の土器の完形品、完全品が約140個出土した。大中小の土器区分があり、特に縄文中期の大木８ｂ式から大木９式の変遷と、大木８ｂ式の細分がなされた。下層から前期縄文式土器が出土し、前期初頭の上川名Ⅱ式に比定されることも判明した。石製品、骨角製品、貝製品、自然遺物の出土もあり、タイ類の岩礁性海岸での漁撈活動の展開が理解された。

塩竈市文化財調査報告書第８集

桂　島　貝　塚

2010年３月31日発行

発行　塩竈市教育委員会
塩竈市本町８番１号
電話（０２２）３６２－７７４４

印刷　株式会社　工　陽　社
宮城県塩竈市尾島町８番７号
電話（０２２）３６５－１１５１